

# 昭和63年度発掘調査概報

茨木市教育委員会

## は し が き

本市は、恵まれた気候や地形、また交通の要衝であることなどを生かして、北大阪の中核都市として目覚ましい発展を遂げて来ました。将来は、さらに北部丘陵地区を開発整備し、既成市街地と連携した住み良く、働き良く、学びよい21世紀を展望した都市づくりをめざしております。

この住みよい環境は、今始まったものではなく、原始・古代から名もない多数の人々がつくりだし、継承してきたものです。そういった人々の営みを教えてくれるのが、土に埋もれ眠っている埋蔵文化財です。

本市にはこういった遺跡が、千数百年いや数千年の間人々の目に触れることなくいまだ多数眠っております。しかし、現在の我々は開発・発展と言う名のもとに、その存在を忘れつつあります。

そこで、将来の都市づくりとともに私たちは、この貴重な文化遺産を後世の人びとに引き継ぎ、保護・顕彰していく重大な責務をも担っていることを、認識しなければならないと考えます。

今回発掘調査の概要報告をいたしますのは、昭和62・63年度に実施した調査の内、東奈良遺跡5ヵ所、中条小学校遺跡1ヵ所、上穂積遺跡1ヵ所の計7ヵ所を合冊したものです。

最後になりましたが、調査に従事された方々や、ご協力をいただきました関係各位に、心より感謝の意を表しますとともに、今後とも、文化財の保存・保護についてなおいっそうのご指導とご援助、ご協力をお願い申しあげ、はしがきといたします。

平成元年3月

茨木市教育委員会

教育長 中 平 敏

## 例 言

1. 本概報は、東奈良遺跡・中条小学校遺跡・上穂積遺跡における昭和62年11月から昭和63年10月までの発掘調査結果の概要をとりまとめたものである。なお、昭和63年度発掘調査の中でも、東奈良遺跡H-4-E・F(88-5)、H-4-M・N(88-6)、G-2-K・O(88-8)、K-1-A・B(88-9)、H-4-A(88-10)の各地区は、来年度に報告予定である。
2. 発掘調査は、茨木市教育委員会事務局文化財調査員(嘱託)井上直樹が担当して実施し、外業調査員中東正之氏の協力を得た。

整理作業は、昭和63年4月から平成元年3月まで実施した。発掘調査と整理作業には、中東、大戸井浩一郎、神保忠宏、難波武史、藤田昌宏、石原健一、桑原紀子、大戸井和江、田中良子、早川博子、峯松皓代、西坂泰子、森木芳子諸氏の協力を受けた。
3. 発掘調査を実施するにあたっては、西門 隆、平尾徳秀、寺村伍一郎、清原ちへこ、迎井芳太郎、西川正一、黒田芳男の各位に御協力いただいたことに感謝いたします。
4. 本概報の執筆は、本文を井上、遺物実測を西坂・井上、遺物写真を井上が担当して行った。
5. 東奈良遺跡の地区割りは、昭和47年設定のものを使用している。また、標高はO・P(大阪湾標準高)を使用している。

# 本文目次

はしがき

例言

I 東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区	
1. 調査経過 .....	1
2. 層位 .....	1
3. 遺構 .....	2
4. 遺物 .....	3
5. 結語 .....	6
II 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区	
1. 調査経過 .....	7
2. 層位 .....	8
3. 遺構 .....	8
4. 遺物 .....	12
5. 結語 .....	17
III 東奈良遺跡 (88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区	
1. 調査経過 .....	18
2. 層位 .....	18
3. 遺構 .....	18
4. 遺物 .....	21
5. 結語 .....	26
IV 東奈良遺跡 (88-3) H・N E-5-G・K地区	
1. 調査経過 .....	27
2. 層位 .....	27
3. 遺構 .....	27
4. 遺物 .....	30
5. 結語 .....	34
V 東奈良遺跡 (88-4) H・N B-5-M・N地区	
1. 調査経過 .....	35

2. 層位	35
3. 遺構	35
4. 遺物	37
5. 結語	37
VI 上穂積遺跡 (88-1)	
1. 調査経過	39
2. 層位	39
3. 遺構	39
4. 遺物	40
5. 結語	40
VII 中条小学校遺跡 (88-1)	
1. 調査経過	41
2. 層位	41
3. 遺構	41
4. 遺物	42
5. 結語	43

## 図 版 目 次

図版 1 (上) 東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 全景(北から)	
(下) 東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) (南から)	
図版 2 (上) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 溝-1・2・3・4(西から)	
(下) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 溝-1 杭列	
図版 3 (上) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓群(南東から)	
(下) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓群(西から)	
図版 4 (上) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-1	
(下) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-2	
図版 5 (上) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-3	
(下) 東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-4	

- 図版 6 (上) 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 全景(東から)  
 (下) 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 住居跡(南から)
- 図版 7 (上) 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 土器溜り  
 (下) 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 土壇-1
- 図版 8 (上) 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 全景(北から)  
 (下) 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 全景(南から)
- 図版 9 (上) 東奈良遺跡(88-4) H・N B-5-M・N地区 全景(北から)  
 (下) 上穂積遺跡(88-1) 全景(北から)
- 図版10(上) 中条小学校遺跡(88-1) 全景(南から)  
 (下) 中条小学校遺跡(88-1) 全景(東から)
- 図版11 東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器
- 図版12 東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器
- 図版13 東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 包含層、溝-1・1(A) 出土の土器・石器
- 図版14 東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2 出土の土器
- 図版15 東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4 出土の土器
- 図版16 東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4 出土の土器
- 図版17 東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1、木棺墓-4 出土の土器・石器
- 図版18 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 包含層、土壇-1、P-1、溝-1、土器溜り 出土の土器
- 図版19 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1 出土の土器
- 図版20 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1 出土の土器
- 図版21 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1 出土の土器
- 図版22 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1 出土の土器
- 図版23 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1・2 出土の土器
- 図版24 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1 出土の土器
- 図版25 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1 出土の土器
- 図版26 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1 出土の土器
- 図版27 茨木市の遺跡

- 図版28 各調査地区の位置
- 図版29 東奈良遺跡(87-4)H・N C-4-K・O地区
- 図版30 東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区
- 図版31 東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区木棺墓-1
- 図版32 東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区木棺墓-2
- 図版33 東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区木棺墓-3
- 図版34 東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区木棺墓-4
- 図版35 36東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区
- 図版37 東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 土壇-1
- 図版38 東奈良遺跡(88-3)H・N E-5-G・K地区
- 図版39 40東奈良遺跡(88-4)H・N B-5-M・N地区
- 図版41 42上穂積遺跡(88-1) 中条小学校遺跡(88-1)
- 図版43東奈良遺跡(87-4)H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A)出土の土器
- 図版44東奈良遺跡(87-4)H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A)出土の土器
- 図版45東奈良遺跡(87-4)H・N C-4-K・O地区 包含層、溝-1・1(A)出土の土器
- 図版46東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2出土の土器
- 図版47東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4出土の土器
- 図版48東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2出土の土器
- 図版49東奈良遺跡(88-1)H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3出土の土器
- 図版50東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 包含層、土壇-1、溝-1出土の土器
- 図版51東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1出土の土器
- 図版52東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1・2、土器溜り出土の土器
- 図版53東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1・2出土の土器
- 図版54東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1、土器溜り出土の土器
- 図版55東奈良遺跡(88-2)H・N I-4-B・C・F・G地区 溝-1・2出土の土器
- 図版56東奈良遺跡(88-3)H・N E-5-G・K地区 包含層出土の土器
- 図版57東奈良遺跡(88-3)H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器
- 図版58東奈良遺跡(88-3)H・N E-5-G・K地区 溝-1出土の土器
- 図版59東奈良遺跡(88-3)H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器

## 挿 図 挿 表 目 次

挿図-1	溝-1・1(A) 土層図	2
挿図-2	溝-1(A) 土器出土状況	3
挿図-3	溝-3 土層図	12
挿図-4	土 馬	38
挿図-5	石 包 丁	38
挿図-6	土 馬	38
挿図-7	石 包 丁	38
挿図-8	穂積院寺を望む	40
挿図-9	石 鏃	43
挿図-10	石 鏃	43
挿表-1	木棺墓一覧表	10



# I 東奈良遺跡(87-1) H・N C-4-K・O地区

## 1. 調査経過

所在地 茨木市若草町437-1

調査面積 245m<sup>2</sup>

調査期間 昭和62年11月24日～同年12月22日

届出理由 共同住宅建設

H・N C-4-K・O地区は、東奈良遺跡の北西部に位置する。これまでの調査によって判明しているこの付近の遺跡の環境は、北西から南東に向かって緩やかに地形が低くなっており、集落の遺構面はその標高6～8mに位置する。この付近の地質は、上部洪積層の位置も浅く、排水性の良い沖積層上に遺構が立地している。弥生時代前期から古墳時代前期の集落は、環濠を巡らし、環濠外には方形周溝墓などの墓が造られている。今回の調査地区は、その位置から、環濠外と思われる所である。

昭和62年11月12日、マンション建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼によって試掘調査を実施したところ、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物を含む茶灰色粘質土が検出されたため、発掘調査の必要性があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会と協議の結果、昭和62年11月24日から発掘調査を実施することが決定した。

## 2. 層位 (図版29)

当地区の基本層位は、上層より耕土、淡茶灰色砂層、淡灰黄色粘質土層、茶灰色粘質土層、茶灰色砂礫層、黄灰色粘質土層の堆積がみられた。茶灰色粘質土層と茶灰色砂礫層からは、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式と6世紀中葉～8世紀末の須恵器片が検出された。黄灰色粘質土層は、弥生時代中期から奈良時代頃の生活面で、調査地区内では標高8.01～7.73mを測り、北西から南東に向かって僅かづつ低くなっており、その比高差は約0.28mである。

### 3. 遺 構 (図版29)

当調査地区から検出された遺構は、溝4条・土墳5基・柱穴跡66穴である。

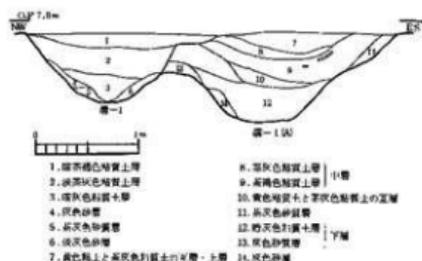
溝

溝-1・溝-1(A)は、調査地区内において北東から南西に蛇行しながら連なり、その蛇行部で溝-1・溝-1(A)は2条に別れている。層位と平面的には、溝-1(A)が大きく蛇行していたのをその蛇行部で埋め、溝-1を直線的に掘り直したことが判明したが、出土遺物からはその時期差が認められなかった。

溝-1(A)は、断面U字形の幅約2.2m、深さ約0.75~0.95mを測り、北東から南西に向かって溝底部は低くなっている。溝内には、レンズ状に粘質土と砂質土が9層以上堆積しており、中層の茶灰色・茶褐色粘質土、下層の暗灰色粘質土より畿内第Ⅲ~Ⅳ様式の土器が検出された。特に中層から多量に検出され、その状態から土器を投棄して埋め固めたと考えられる。また、調査地区南端の溝底がすりばち状に約0.3m深くなっているが、土層から覗る限り切り合いがないことから、溝と同時期に存在していたものと思われる。

溝-1は、同じく断面U字形の幅約2.0~2.2m、深さ約0.6~0.7mを測り、溝-1(A)に比較して溝幅・深さ共にやや小さくなっている。溝内には、上・中層に粘質土、下層に砂質土がレンズ状に5層以上が堆積しており、上・中層の暗茶褐色・淡茶灰色・暗灰色粘質土から畿内第Ⅲ~Ⅳ様式の土器が多量に検出された。

溝-2は、調査地区北西の微高地から東に向かって伸びる断面U字形の幅0.34m、深さ0.26~0.40mの小型の溝。溝の一部は、後世に削平を受けているため消失しているが、溝底部は東に向かって低くなっている。溝内には、茶褐色粘質土の堆積が観られ、畿内第Ⅲ~Ⅳ様式の土器片が少数検出された。



挿図-1 溝-1,1(A) 土層図



挿図-2 溝-1 (A) 土器出土状況

#### 土壌

土壌-1は、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.12mを測る楕円形をなし、土壌内には茶灰色砂質土の堆積が見られたが、遺物は出土しなかった。

土壌-2は、土壌の北東を土壌-1に切られている。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.44mを測るすりばち状楕円形をなし、土壌内には茶褐色砂質土の堆積が見られたが、遺物は出土しなかった。

土壌-3は、長軸0.82m、短軸0.64m、深さ0.1mを測る隅丸長方形をなし、土壌内には暗灰色砂質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

土壌-4は、径0.7mを測る円形をなし、茶灰色砂土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

土壌-5は、調査地区内で一部検出されたのみであるが、すりばち状楕円形土壌の底に円形の土壌が掘られていると思われる。すりばち状楕円形土壌は、長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.22mと推定され、黄色砂礫土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。円形の土壌は、径0.7m、深さ0.2mを測り、灰色粘質土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

## 4. 遺物

当調査地区からは、コンテナバットに約40箱の土器・石器が出土したが、大多数は溝-1・1 (A) から出土したものである。しかし、その多くは、細片

あるいは風化が著しく、図示できるものは少なかった。

#### 溝-1 (A) (図版43~45)

壺型土器 1は、太く短い頸部から短く外反する口縁部、口唇部は短く上下に肥厚し面をもち、細い凹線紋を施す。頸部から肩部に、橢原体14本の橢描直線紋で始まる同波状紋を交互に施す。また、同原体による扇状紋を口縁部内部に施す。2は、厚さの薄い底部と最大腹径を体部中位にもつ形態をなし、橢描直線紋で終る同波状紋を交互に施す。調整は、最大腹径部に横ヘラ磨きを僅かに確認される以外は風化により不明である。3・4は、頸部に指おさえ貼り付け凸帯紋を施すタイプ。口縁部は大きく外反し、口唇部は上下に肥厚し面をもち、凹線紋を施す。5・6は、口唇部が下方に長く拡張し、凹線紋を施すタイプ。5は、口縁径29.75cmの大型で、肩部から体部に橢描波状紋で始まる同直線紋を交互に、口縁内部に同扇状紋を施す。頸部に凹線紋、口唇部の凹線紋上に小さな円形浮紋を多数貼り付けている。6は、頸部に断面三角形の貼り付け凸帯紋、口唇部の凹線紋上に棒状浮紋、口縁内部に扇状紋を施す。

鉢型土器 7は、いわゆる台付把手深鉢型土器。鉢底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でさらに内湾し、凹線紋を施す。把手は断面楕円形のを縦に貼り付けている。調整は、外面が下から上へのヘラ磨き、内面はヘラ押えが残っていることから、口縁部の横ナデ以外は無調整と思われる。その他、同台部と思われる8・9がある。8は、柱部に断面三角形の貼り付け凸帯紋、端部外面に凹線紋、同内面に深い円形竹管紋を施し、残存体部から深鉢型と思われる。9は、太く低い台部、台端部はあまり肥厚せず終る。残存体部から浅鉢型と思われる。

高坏型土器 10・11は、いずれも中空の柱部に、端部で上下に肥厚する裾広がり脚部のみである。10は、柱部外面が縦ヘラ磨きである以外、調整は不明である。

台型土器 12は、台部が脚部より大きく張り出すタイプ。台径21.6cmの台部上面の中央に径8cm、深さ0.1cm程の浅い凹みがある。13は、台部と脚部の径にあまり差のないタイプ。同じく台部上面中央に径11cm、深さ0.4cm程の凹みがあり、台径22.4cm、残存高11.6cmを測る。

その他、14の水差型土器がある。1~14は、いずれも中層出土の畿内第Ⅲ

(新) ~IV様式である。

溝-1 (図版43~45)

壺型土器 15は、太く短い頸部から短く外反する口縁部、口唇部は短く下方に拡張し、ヘラ描沈線紋を施す。頸部から体部には、雑な櫛描直線紋で始まる同波状紋が交互に施されている。調整は、外面に縦刷毛、内面に斜めに刷毛目を行い、頸部上部から口縁に強い横ナデを行っている。16は、最大腹径がやや体部下位にあり、頸部下位は締まり、外反ぎみに立ち上がる。肩から最大腹径まで櫛描波状紋で始まり終る同直線紋を交互に施す。頸部下位には凹線紋を施す。調整は、底部から最大腹径まで縦・横ヘラ磨きを行い、最大腹径の横ヘラ磨きは櫛描波状紋の後で行っている。17は、頸部から外反ぎみに立ち上がり、口縁部でさらに外反し、口唇部で下方に拡張し細い7条の凹線紋と小さな円形浮紋を施す。頸部には、低い断面三角形貼り付け凸帯紋、口縁部内面に櫛描扇状紋が施されている。18・19は、いわゆる細頸壺型土器。いずれも、筒状の頸部からやや開きぎみに立ち上がり、口唇部で内弯する。口縁部に凹線紋、18は頸部に断面三角形貼り付け凸帯紋、19は凹線紋を施す。18はさらに、円形浮紋・竹管紋を施している。

甕型土器 甕型土器は出土点数も少なく、そのなかで図示できるのは20の1点とミニチュア土器の21のみであった。20は、最大腹径が体部上位にあり、また口径を上まわる。口縁部はくの字形に外反し、口唇部で僅かに上下に肥厚する。

鉢型土器 22は、底径(8cm)・器高(12.7cm)に比較して、口径(45.75cm)の非常に大きい、笠を逆さにしたような形態をなし、口縁端部は、断面三角形状につまみ上げられている。調整は、底部から体部下位にヘラ削り、それより上位は縦刷毛と櫛描直線紋風に体部を一周する横刷毛を行っている。23は、台付鉢の台部と思われる。太い柱部から裾部へ広がり、端部は面をもって終る。柱部に低く鈍い断面三角形の貼り付け凸帯紋、小さな円形透かし穴が2孔1対で施されている。

高坏型土器 いずれも、中空の柱部に裾端部で上下に肥厚する脚部のみである。24は、柱部に櫛描直線紋、裾端部外面に円形竹管紋を施すが、他は無紋であり調整も風化によって明確でない。

台型土器 29・30はいずれも、脚部より台部が張り出すタイプ。29は台端部が僅かに下がり、脚部と台部の接点に凹線紋を施し、台径24.4cmを測る。30は、台径23.3cmの中央に径11cm、深さ0.1cmの浅い凹みがあり、残存高9.8cmを測る。

その他、31は甌型土器。32は、径約3cmの中実の湾曲ぎみ柱部、柱底部は広がり平坦になっている。その形態から土馬の足と思われる。

16・19・26・28・30は上層、15・17・18・20・21・22・23・25・31は中層、24・27・29は下層出土で、16は畿内第Ⅱ様式、他の畿内第Ⅲ（新）～Ⅳ様式である。

#### 石器（図版60）

石包丁の33は、直線刃半月型でかなり破損しているが、長さ16.5cm、幅5.2cm、厚さ0.75cm、紐孔間2.4cm、92.5gを測る片岩製である。

石槍の34は、先端と基端の一部を欠損するが、断面菱型のほぼ完形品である。フリーフレイキングとステップフレイキングを併用しており、柄部はフリーフレイキングを僅かに行った後研磨している。残存長13.5cm、幅2.7cm、厚さ1.1cm、42.5gのサヌカイト製である。

石鏃の35は、尖基無基式・断面菱型のフリーフレイキングとステップフレイキングを併用しているが、作りは雑で、先端に刃を潰したような研磨の跡がある。長さ4.6cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、7.2gのサヌカイト製である。34は溝-1上層出土、33・35は包含層出土である。

## 5. 結 語

当調査地区は調査範囲の関係から、溝-1・1(A)の性格は把握できないが、南西約50mの昭和52年度調査のD-4-A地区（東奈良遺跡調査概報Ⅱ昭和56年）の溝-17と多少規模が異なるが時期・方向が合致し、また東約30mの昭和56年度調査のC-4-L地区の溝-5と規模・時期・方向が合致することから、同一の溝と思われる。また他の弥生時代前期・中期・後期の環濠と思われる溝とも同一方向に巡ることから、溝-1・1(A)も現時点では環濠の一部と考えられる。溝-1・1(A)埋没後、当地区に生活圏が広がるのは、奈良時代以降それも北側の現奈良町付近であったと思われる。

## II 東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区

### 1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宜西1丁目26-1

調査面積 200㎡

調査期間 昭和63年2月16日～同年4月3日

届出理由 共同住宅建設

当調査地区付近は東奈良遺跡の南東部に位置し、東奈良遺跡の中でも比較的発掘調査が進んでおり、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の環境がおおよそ復元されつつある。それによると、現在の中央環状線沿いに遺跡を二分する大きな谷が、南東部に扇を広げたように存在し、当調査地区はその谷の西側の肩沿いに位置する。谷の西側は、東側に比較して遺構面の地質が異なり、含水性の高い粘土あるいは砂質土上に立地する。そのためか、多くの自然あるいは人工の溝が、北西から南東に低くなる地形に沿って北西から南東に流れており、当調査地区の西から南にかけて溝が集中する所でもある。また、北西には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居・井戸・土壇、北には谷に沿って弥生時代前期から同中期の方形周溝墓群、さらに北西から西に古墳時代前期の土壇墓群などが検出されている。

昭和62年12月16日、マンション建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼によって試掘調査を実施したところ、弥生時代中期から古墳時代後期の土器を含む茶灰色粘質土を検出した。さらに周辺の発掘状況からしても遺構・遺物が残存するのは充分予想されるため、発掘調査の必要性があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会とで協議の結果、昭和63年2月16日から発掘調査を実施することになった。なお、調査中当初予想された以上に遺構面は深く、検出土砂量が多くなりすぎて場内処分が出来なくなったため、遺構がほとんど検出されなかった調査地区南3mを包含層の検出のみを実施し、余儀なく土砂置場として使用した。

## 2. 層 位 (図版30)

当地区の基本層位は、上層から耕土、灰色・茶灰白色砂質層、黄灰色砂質層、淡灰色粗砂質層、以下弥生時代中期から古墳時代後期の包含層である茶灰色粘質土層、茶灰色砂質層、弥生時代中期の包含層の灰褐色粘質土層、遺構面の青灰色粘質土層・灰褐色粘質土層の堆積がみられた。なお、遺構面の標高は、5.43~5.57mを測り西から東へ僅かに低くなっている。

## 3. 遺 構 (図版30~34)

当地区から検出された遺構は、重複しあった溝4条、木棺墓5基、土墳1基であった。

### 木棺墓 (図版31~34)

当地区から検出された木棺墓5基は、互いに木棺の長軸を並行あるいは直交し、隣接して埋葬されていた。このうち、木棺墓-5は他に比べて規模も小さく、埋葬方法も異なることから、やや性格が違ったものと思われる。

なお、各木棺の残存規模は、挿表-1にまとめて記述する。

木棺墓-1は、長軸をN-63°-Eにとる。蓋板は全く残っていなかったが、両木口板と両側板・底板は一部腐食しているものの残存状態は良かった。棺内部には、東木口板寄りに頭蓋骨と他の骨片が僅かながら残存していた。その他、副葬品は検出されなかった。

木棺の埋設方法を土層断面と検出時の状況から考えてみると、先ず地山の青灰色粘質土を底板より0.2m程大きくすりばち状に約0.3m掘り、それと同時に土墳周辺も僅かに掘り下げる。次に底に粘土を埋めて底板を置き安定させる。両側板は底板上に置くのではなく、縁に沿って立て掛け、その外面と下面は粘土で埋め支える。両木口板は、底板に溝を彫って立てるが、外面は同じく粘土で埋めて補強する。次に遺体を入れ蓋をする。次に木棺を覆い隠す程度の土を隅丸長方形(2×3m程)に盛る。このような埋葬順序が考えられる。

木棺墓-2は、木棺墓-1の東北約2mに浅い溝を隔てて位置し、長軸を木棺墓-1に直交するN-30°-Wにとる。両木口板と両側板・底板は一部腐食しているものの残存状態は良く、蓋板の一部も残っていた。木棺内部には、ほぼ中央で極僅かな骨片が残存していた。その他、副葬品は検出されなかった。

木棺の埋設方法は、木棺墓-1と同じく底板より0.2~0.3m程大きい土壌を掘り、また土壌周辺を僅かに掘り下げる。土壌底に0.2~0.3mの粘土を盛り底板を安定させる。この時底板は、土壌の肩より高くなっている。両側板は底板に沿って立て、両木口板は底板に溝を彫って立てるが、いずれも外側を粘質土で支えている。次に、遺体を入れて蓋をして同じく棺を覆い隠す程度の土を隅丸長方形に盛っている。

木棺墓-3は、木棺墓-1の北西約2m、木棺墓-4の南西に土壌を接するように位置する。長軸を木棺墓-1・4と直交させるように、木棺墓-2と並行するN-30°-Wにとる。木棺は、底板と痕跡程度の北側木口板・西側側板が残存していたが、棺内部には人骨・副葬品は全く残存していなかった。

木棺の埋設方法は、他の木棺と同じく地山に底板埋設に必要な程度の土壌を掘り、しかし土壌周辺を掘り下げてはいない。両側板を他とは異なり底板上に立て、両木口板は他と同じく底板に溝を彫って立て、同じく外側を粘土で盛り支えている。その後、遺体を入れて蓋をしたと思われる。棺を覆い隠す盛り土は、土層断面から観るかぎり、棺の規模も関係するのかわかった。

木棺墓-4は、木棺墓-1の北西に浅い溝を隔てて約1.4mに位置する。長軸を木棺墓-1と並行するN-59°-Eにとる。木棺は、今回検出された木棺の中で最大のもので、底板・両側板・東木口板と西木口板・蓋板の一部が残存していた。棺内部からは、人骨・副葬品などは全く残存・検出されなかった。

木棺の埋設方法は、他の木棺と同じく地山に底板埋設に必要な程度の土壌を掘り、側板・木口板はその土壌から浮き出した状態で外周を粘土で埋めて支えている。その後、遺体を入れ蓋をした後、同じく棺を覆い隠す程度の土を盛り、その時周囲の溝状落ち込みも一部埋めている。なお、木棺墓-4は規模が他の木棺墓-1・2・3・5より大きいのが、埋設されている位置も同-5を除いて、底板の高さが0.1~0.15m高く、さらに側板も高いことから、かなり高く感じられた。

木棺墓-5は、木棺墓-1の約1m南東に位置し、長軸を木棺墓-1と並行のN-61°30'-Eにとる。木棺の残存状態は他と比較して非常に悪く、底板・側板・木口板の痕跡が僅かに残っていたのみであった。また、規模も他の木棺よりかなり小さく、埋設方法も異なることから、やや性格が違った木棺墓と考

えられる。

木棺の埋設方法は、残存状態が悪い上に調査中に一部を削除したため、明確でないが、他とは異なり埋設のための土壌は平面・断面共に全く検出できなかった。また、埋設位置も他の木棺墓の盛り土を埋める状態で堆積する灰褐色粘質土中である。この点から、他の木棺墓より新しく、土壌はなく周囲の土で簡単な盛り土をしていたと思われる。

木棺墓群は、時期を決定できる遺物が検出されなかったものの層位的にはやや新しい木棺墓-5以外は、棺内と棺外の埋め土から検出された遺物が細片ながら畿内第Ⅲ（新）様式であった。また、層位的にも時期差がみられなく、さらに近接し、長軸の方位も一致あるいは直交し合っていることから、相い前後して埋設したものと考えられる。

木棺 墓No	上 蓋			木 棺								長軸方位	備 考						
	形状	長	幅	木口板			側板			蓋板				底板					
				長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅			厚	長	幅	厚		
1	隅丸 長方形	2.45	0.94	0.23	東 0.35	0.17	0.05	北 1.83	0.19	0.06	2.32	0.53	0.11	—	—	—	—	N-63° - E	内寸長 1.65(測定) 西木口板が調査中に検出移動したため
					西 0.33	0.15	0.05	南 1.33	0.15	0.06									
2	隅丸 長方形	2.61	1.15	0.16	北 0.37	0.17	0.06	東 2.05	0.22	0.07	2.48	0.50	0.09	1.37	0.22	0.02	—	N-30° - W	内寸長 1.72
					南 0.36	0.16	0.06	西 1.94	0.16	0.04									
3	隅丸 長方形	1.77	0.81	0.18	北 0.15	—	—	—	—	—	1.45	0.53	0.06	—	—	—	—	N-30° - W	内寸長 1.05 以上
					—	—	—	西 0.45	—	—									
4	隅丸 長方形	2.63	1.40	0.22	東 0.34	0.28	0.10	北 2.04	0.25	0.10	2.43	0.85	0.15	0.68	0.18	0.02	—	N-58° - E	内寸長 1.80
					西 0.29	—	—	南 1.52	0.23	0.06									
5	—	—	—	—	東 0.25	—	—	北 0.33	—	—	0.49	0.34	—	—	—	—	—	N-61° 30° - E	内寸長 0.45 以上 大部分は腐食のため不明
					—	—	—	南 0.45	—	—									

挿表-1 木棺墓の一覧表（規模は、検出時・残存最大値、単位はmである。）

木棺の木取りの方法は、いずれも底板・側板が板目取りであり、かつ木棺内面側は平坦であるが、外面側は曲面で木目がみられず、樹皮側を用いている。また、木棺墓-1・4の側板は、断面が底板側が厚く、蓋板側が薄くなっていることから、樹皮側を幅広く板目取りし、さらに立て割りに二分し、用いたと思われる。木口板は柁目取りし、木目を横位にして用い、蓋板も柁目取りし、他の部材より比較的薄いものを用いている。木棺の材質は、正式な鑑定を受けていないが、いずれもコウヤマキと思われる。

#### 溝

当調査地区から検出された4条の溝は、調査地区南東でT字形に交わり、弥生時代前期・同中期・同中期後半の3時期に渡って重複して存在する。

溝-1は、調査地区北西から南東へ連なる。溝は、層位的には大きく2層に分けられる。上層の溝は、下層の包含層の灰褐色粘質土を溝肩として、溝内には砂あるいは砂質土の堆積がみられ、断面よりの推定規模は幅4m、深さ0.8mを測る。溝は、溝-2と交差して後、扇状に南東に広がる。遺物は、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土している。

下層の溝は、上層の溝肩より約0.4m下層の地山面である青灰色粘質土を溝肩として掘られており、溝内には粘土あるいは粘質土が堆積する。溝が溝-2と交差するまでの北肩裾には、自然木を放射状に立て割りした杭が一行に打ち込まれている。これは、溝肩から底にかけてこの箇所のみ、さらに下層の溝-4と重複しており、その溝-4に堆積する砂が溝肩として脆いため補強して、粘土で覆い隠したものである。溝幅4.6m、深さ0.6mを測る。遺物は、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土している。

溝-2は、調査地区北東から南西へ連なり、溝-1とT字形に交差し、溝-1と合流して消える。溝-2も溝-1と同様、層位的には大きく2層に分けられる。上層の溝は、同じく弥生時代中期の遺物を包含する灰褐色粘質土を溝肩とし、溝内には砂あるいは砂質土のレンズ状の堆積がみられ、その上層は溝-1と合流後溝肩を越えて、南東から南西へ広く堆積していた。溝の規模は、断面より幅4.2m、深さ0.8mと推定される。遺物は、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土している。

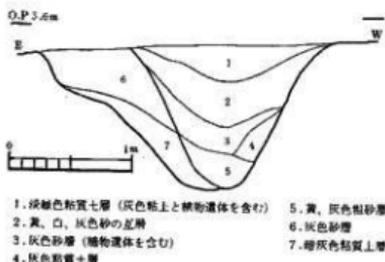
下層の溝も溝-1と同様、青灰色粘質土・灰褐色粘土を溝肩とする幅3.8m、

深さ0.6mを測る溝である。溝内には、同じく粘土が堆積し、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土した。

溝-1・2の上層と下層の溝の時期差は、出土土器からは判別できない。しかし、層位的には明らかに時期差が認められ、下層の溝が埋まった後、再び同一方向・規模の溝が掘られたものと思われる。

溝-3・4は、溝-1・2が掘られる以前の溝で、溝-3は調査地区内を南北に縦走し、溝-4は調査地区内を北西から東にやや湾曲しながら、溝-3に接するようにして途切れる。いずれの溝も、調査期間の関係から全容を検出できなかったが、青灰色粘質土の下層の灰褐色粘土を溝肩とする断面V字形の溝である。溝-3は幅2.2m、深さ1.2m、溝-4は幅2m、深さ1.3m程と推測される。溝内には、砂あるいは粗砂、粘質土が複雑な堆積層（挿図-3）を成し、畿内第Ⅰ様式の土器が出土した。

溝-3・4は、層位的にも遺物からも、同-1・2より古く、木棺墓群よりも古い弥生時代前期の溝である。同時期のこの付近の遺構は、北約50mの方形周溝墓群と北西約60m付近で検出された溝のみであり、先の谷東側の同時期の集落や方形周溝墓に比べて少なく、今後谷西側においても前期集落が検出される可能性が増したと考えられる。



挿図-3 溝-3土層図

#### 4. 遺物 (図版46～49)

当調査地区から出土した遺物は、溝-1・2を中心に包含層からコンテナバットに約45箱の弥生式土器と僅かな須恵器・石器であった。しかし、その多くは破片であり、風化が著しく図示できるものは少なかった。

##### 包含層

包含層は2層に大別され、上層の茶灰色（一部茶褐色）粘質土層から弥生時代中期から古墳時代後期の土器が検出され、下層の灰褐色（一部暗灰色）粘質

土層から弥生時代中期の土器が検出された。

#### 須恵器

坯身と思われる35は、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がり、端部は丸く終り、底部は深く、やや丸い。底部外面はヘラ削り、口縁部内外面は回転ナデ、底部内面は不整方向のナデ調整がなされ、底部はヘラ切り後未調整。

坯身36は、立ち上がりは短く内傾し、端部はやや鋭い。受部は外上方へ伸び端部は丸く終る。底部はやや深く平たく、ヘラ切り後未調整。

高坏37は、坏口縁部はやや外方へ立ち上がり、端部はやや鋭く終る。体部は底部より緩やかに立ち上がり1条の沈線紋を施す。底部は浅く丸い。脚部は、基部が細く裾部で大きく広がり、端部は鋭く面取りし鋭角に終る。

いずれも、包含層上層茶灰色粘質土層出土の陶邑編年第Ⅱ形式6段階～第Ⅲ形式1段階頃のものと考えられる。

#### 弥生式土器

壺型土器 39は、細い筒状頸部から大きく外反する口縁部。口唇部で僅かに下方に肥厚し面をもつ。紋様は、頸部に凹線紋、口唇部に櫛描波状紋、口縁部内面に櫛描扇状紋・櫛描波状紋と細い穴が3孔1対で4ヶ所に施されている。

40は、太く短い頸部から外反する口縁部、口唇部で上下に僅かに肥厚し面をもつ。紋様は、頸部に貼り付け凸帯指頭圧痕紋、口唇部に凹線紋、口縁部内面に貫通しない小孔が2孔1対で2ヶ所に施す。

41は、太く短い頸部から内弯ぎみに外開きする口縁部。口縁部に細い凹線紋が施されている。

42は、太い内傾ぎみの頸部から大きく外反し、口唇部は横ナデによる面をもつ。紋様は、風化のため明確でないが、無紋と思われる。

高坏型土器 43・44・45は、いずれも柱状中空柱部から大きく裾部へ広がるタイプ。43は裾端部で上下肥厚し面をもち、裾端部内外面には強い横ナデによる凹みがみられる。柱部に12条と10条の沈線紋、裾部には円孔が推定6ヶ所施されている。

以上、いずれも包含層下層出土で、42は畿内第Ⅳ末～Ⅴ様式、その他は畿内第Ⅲ（新）～Ⅳ様式である。

### 溝-1 (上層)

壺型土器 46は、太く短い頸部から外反し、口縁部端で水平に伸び、口唇部で上方に短く下方に長く肥厚し面をもつ。紋様は、頸部から体部に櫛描波状紋で始まる同直線紋を各2段づつ施されていると思われ、また口唇部には凹線紋が施されている。

47は、頸部から外反ぎみに立ち上り、口縁部でゆるやかに屈曲して立ち上がる。頸部には、貼り付け凸帯櫛瓦痕紋と櫛押列点紋が施されている。

48は、平底の底部に最大腹径が中位にあり、やや胴長の体部。頸部は短く外反ぎみに立ち上り、口縁部でさらに外反し、口唇部で上下に短く肥厚する。口唇部には凹線紋を施すが、他は無紋である。調整は、最大腹径下位がヘラ磨き、上位が刷毛目である。なお、体部下位に焼成後の穿孔がある。

壺型土器 49は、口径が最大腹径より大きいタイプ。頸部は、ほぼ水平に屈曲し、口唇部は上方につまみ上げている。調整は、内外面を縦刷毛目調整を行っている。

50・51・52は、いずれも最大腹径が口径を上回るタイプ。50は、頸部がゆるやかに外反し、口唇部は僅かに肥厚し丸く終る。体部外面は、刷毛目の後ヘラ磨き、内面は刷毛目調整を行う。頸部に2孔1対の円孔がある。51・52は、頸部はくの字に外反し、52は口唇部で上下に肥厚するが、51は横ナデで終る。

高坏型土器 53・54共に脚部のみである。いずれも中空柱部であるが、54は柱状、53はやや裾広がりでである。裾部は54が内湾ぎみに、53は外反ぎみに広がる。紋様は、54に櫛描直線紋と6孔の円孔が等間隔で施されている。

いずれも、畿内第Ⅲ(新)～Ⅳ様式である。

### 溝-1 (下層)

壺型土器 55は、太い筒状口頸部から上下に長く拡張する口唇部を内傾ぎみに付け足している。口唇部下縁は指押えにより波打っており、紋様はみられない。

56は、平底の底部に算盤玉状の体部、口頸部は短く外反し、口唇部は短く内下方に肥厚する。頸部に2孔1対の円孔があり、体部に縦・横ヘラ磨き調整を行っている。

壺型土器 いずれも、最大腹径が口径を上回る中型で、口頸部はくの字形に

外反し、57・58は強い横ナデによる凹線紋風の凹みがみられる。ほぼ完形の57は体部下位から中位がヘラ削り、中位から上位に刷毛目を行っている。

鉢型土器 60は、やや突出ぎみの平底から内湾ぎみに立ち上がる。外面は刷毛の後細かいヘラ磨き、内面は刷毛の後ナデ調整が行われている。

高坏型土器 61は、口径53.3cmを測るが、全体の1/12程からの反転復元のため明確でない。坏部は、浅く内湾ぎみに立ち上がり、口縁部で外面を幅広く肥厚し、口唇部・口縁部には横ナデによる凹みがみられる。口縁部には大きな円形浮紋を施し、体部外面は縦・横ヘラ磨きを行っている。

いずれも、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式である。

#### 溝-2 (上層)

壺型土器 いずれも、外反する口頸部が口縁端部で水平に伸び、63は端部でやや下がる。62・63は口唇部で下方に肥厚し、64は上下に僅かに肥厚する。62・63は頸部に断面三角形の貼り付け凸帯紋、62は口唇部に凹線紋、体部に櫛描直線紋で始まり、同波状紋で終る紋様を交互に施す。63は、口縁上部と口唇部に5個の円形浮紋が相対して施されている。

壺型土器 65は、全体の1/10からの反転復元であるため口径は明確でないが、肩の張った体部から口頸部がくの字形に外反し、口唇部は上下に肥厚し内傾する。口唇部下縁にヘラによる刻み目紋が施され、体部内外面は刷毛目調整を行っている。

高坏型土器 66は、中空柱状柱部から内湾ぎみに広がる裾部、裾部端部が上方に肥厚する。柱部にヘラ描きの直線紋が施されている。

64は、畿内第Ⅴ様式に近いと思われるが、他は畿内第Ⅲ(新)～Ⅳ様式である。

#### 溝-2 (下層)

壺型土器 67は、よく張った球形の体部、太く短い外反ぎみの口頸部から口縁端部でさらに外反し、口唇部で上下に肥厚する。紋様は、体部に櫛描直線紋、口唇部外面と口縁端部上面に同波状紋を施し、体部から頸部には縦刷毛目調整が残っている。68は、平底の底部に最大腹径がよく張った算盤玉状の体部。外傾ぎみの筒状頸部から水平に短く屈曲する口縁部、口唇部は上下に肥厚する。体部には、櫛描直線紋で始まり終る同波状紋を交互に施す、なお全部の直線紋

を施したのちに波状紋を施している。口唇部外面に同波状紋、口縁部内面に同列点紋を施す。頸部から最大腹径下位まで刷毛目調整が残り、以下へラ磨きを行っている。また、体部下位に焼成後の穿孔がみられる。

79は、外反ぎみの頸部から垂直に持ち上がる口縁部、口唇部は内外に肥厚する。屈曲部外面にへラによる刻み目紋と凹線紋の凹みがみられる。

80は、よく張った肩部からくの字形に屈曲する口頸部、口唇部は横ナデによる狭い面取りが行われている。頸部には2孔1対の円孔が穿たれ、肩部には楕円体を押え付けたような紋様が施されている。

台型土器 81は、台径21.85cmを測り、台部上面に径14cm、深さ0.2cm程の凹みがみられる。台部と脚部の境外面に、粘土を糺ぎ足し器壁を厚くしている。以上、畿内第Ⅲ～Ⅳ（新）様式である。

#### 溝-3

壺型土器 82は、口頸部が外反ぎみに立ち上がり、口唇部が丸く終る。頸部にへラ描沈線紋を施す。

甕型土器 83・84は、いずれも口径が腹径を上まわり、頸部にへラ描沈線紋、口唇部にへラによる刻み目紋を施している。調整は、83が刷毛目であるのに対して、84はその後ナデを行っている。以上、畿内第Ⅰ様式である。

#### 溝-4

壺型土器 85は、底部・体部・頸部・口縁部ともに一部しかなく、図上復元である。器壁が厚く大型の平底。最大腹径が体部下位にあって大きく張っている。頸部は長く、口縁部は大きく外反し、口唇部が丸く終る。頸部にへラ描沈線紋6状、体部に同11状を施し、口頸部から体部にはへラ磨きを行っている。86は、口頸部のみで頸部に幅があって深い、へラ描沈線紋を5条以上施す。以上、畿内第Ⅰ様式である。

#### 石器 (図版60)

石器の出土量は非常に少なく、下記以外にハク片が数点であった。

石包丁 87は、直線刃半月型で、残存長9.5cm、幅4.1cm、厚さ0.75cm、紐孔間2.6cmを測り、手掌側に紐擦れがみられる。サヌカイト製で、溝-2下層出土である。

石斧 88は、断面長方形の扁平片刃石斧で、残存長5.4cm、幅4.25cm、厚さ

1.55cmを測る。玢岩製で、木棺-4内出土である。

## 5. 結 語

当地区での遺構の変遷を層位・出土遺物などから追ってみると、弥生時代前期中頃、T字形に交差する断面V字形の溝-3・4が掘られる。その頃、北側約50~70m付近に方形周溝墓群が造られる。その溝も、一時期はゆっくりと、あるいは急速に周囲からの上砂で埋まる。その後しばらく経った弥生時代中期中頃、木棺のみの墓が4基相前後して造られる。いずれも木棺を覆い隠す程度の土盛りと区画する程度の浅い溝を掘っているのみであった。付近では、北側約30mに、中期初頭の方形周溝墓群が前期に続いて南に広がっており、また、中期中頃の方形周溝墓群や壺(甕)棺墓などが、さらに北側から北西側にも広がり、同時期の竪穴住居・井戸・土壇などの集落も北西側に作られるようになる。木棺墓に相前後した頃、その木棺墓を避けるように、あるいはその方位を意識したように、先の埋没した溝の一部を含む所に、T字形に交差する断面U字形の溝-1・2(下層)を掘っている。その時、先の溝の堆積土と溝肩が重複する箇所は、溝肩としては脆いため杭を打ち込んで補強している。しかし、この溝が方形周溝墓の周溝であるかは、今回の調査範囲内では明確にできなかった。その後、弥生時代中期後半頃溝は埋没し、木棺墓も一部埋まるが、溝-1・2(上層)が掘り直される。しかし、この溝は、短期間の内に流入土砂によって埋没する。この時期に付近では、西側約50mに幅10m、深さ2.5~3.0mの大溝が、北西から南東に連なっており、同じく短期間で埋没していることから、洪水などの自然災害があった可能性がある。その後の生活圏は、さらに西側に移り、当地区では古墳時代後期以降である。

東奈良遺跡では、今回検出された木棺墓群のように隣接して多数検出されたことはなく、また木棺墓-4の木棺の規模は最大であり、首長クラスの者が被葬者であることは確かである。東奈良遺跡にも、方形周溝墓を伴わない木棺墓、木棺墓を伴わない方形周溝墓、壺(甕)棺墓・土壇墓のみの墓もあることから、弥生時代には墓に対する意識も様々であったことが考えられる。

## Ⅲ 東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区

### 1. 調査経過

所在地 茨木市沢良宜西1丁目44-1, 45-1

調査面積 280㎡

調査期間 昭和63年4月8日～同年5月14日

届出理由 共同住宅建設

当地区は、東奈良遺跡の南東部に位置し、また弥生時代から古墳時代の遺構の南限付近でもあり、現在のところ当地区より以南・以西では奈良・平安時代以降の遺構・遺物が検出されているのみである。しかし、当地区より以北には弥生時代前期から古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壇・溝・方形周溝墓・木棺墓・甕(壺)棺墓・土壇墓などが多数検出されており、特に当地区付近は大型の溝が集中する所である。

昭和63年2月22日、埋蔵文化財確認試掘調査依頼により試掘調査を実施した結果、耕土面下約0.5mより弥生時代中期から古墳時代後期の遺物を包含する茶灰色粘質土を検出したため、発掘調査の必要があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会と協議の結果、昭和63年4月8日から発掘調査を実施することになった。

### 2. 層位 (図版35・36)

当地区の基本層位は、上層より耕土、黄灰色・淡灰色砂質土層(床土)、茶灰色砂質粘土層・同砂質層(包含層)、淡灰色砂質層・黄白色粘質土層(古墳時代前期～同後期の生活面)に分けられる。なお、生活面の標高は5.70～5.80mを測り、北から南へ僅かに低くなっている。

### 3. 遺構 (図版35・36)

当地区から検出された遺構は、古墳時代前期から同後期の溝4条、土壇3基、柱穴35穴、土器溜りなどである。

### 溝-1

溝-1は、調査地区内を西北西から東南東へ連なる幅7~9m、底幅1.5~2.0m、深さ1.87~2.10mを測る大型の溝である。この大溝は、生活面の黄白色粘質土層以下、沖積層の黒色粘土層、灰青色砂質層、同微砂層、灰色粗砂層まで掘られている。一部溝肩が2段に造られており、下段が蛇行しているため、その段は広い所で約2mある。溝内には、11層に大別される砂層・粘質土層・植物遺体層がレンズ状あるいは互層を成して堆積しており、上層の一部は先の生活面上にも堆積している。そのなかでも、上層の灰色砂層・同粘質土層・植物遺体層の互層と下層の灰白色・灰色粗砂層からは多量の古墳時代前期の土器が出土した。

溝-1は、その規模・流れの方向・出土遺物の時期から、当地区の北西約120mのH-3-A地区で昭和47年度調査（東京良遺跡調査概報I昭和54年）の時に検出された溝II-3（大溝）、さらに北北西約250mのG-3-A地区で昭和48年度調査の時に検出された溝-V（大溝）とやや規模は小さいが、同一の大溝と思われる。現在、最も北で検出された溝-V（大溝）の溝底の標高が4m、同溝II-3（大溝）が3.7m、そして当地区の溝-1が3.6mを測ることから、非常に緩やかな傾斜で掘られていることが判明する。なお、後日北西約30mのH-4-M地区で調査を実施した時にも、同一の溝を検出している。（平成元年度で調査報告予定）

### 溝-2

溝-2は、溝-1の北側を東西に連なる幅2.7m、深さ0.53mを測る幅に比較して浅い溝である。溝内には、砂層・粗砂層がレンズ状に堆積し、古墳時代前期の土器が検出された。

### 溝-3

溝-3は、溝-1の西側を北北西から南南東へ連なる幅1.3m、深さ1.0mを測る断面V字形の溝である。溝内には、砂層・粗砂層がレンズ状に堆積するが、遺物は僅かに古墳時代前期の土器片が2点出土しているのみである。

### 溝-4

溝-4は、溝-2の南側から南東に連なる幅0.54m、深さ0.16mの小型の溝。溝内には、茶灰色砂質層が堆積し、古墳時代前期の土器が出土した。なお、溝

- 4 は、層位的には溝- 2 より古い。

#### 土壌- 1 (図版37)

土壌- 1 は、溝- 1 の西側溝肩沿いにある長軸1.95m、短軸1.45m、深さ0.24mの楕円形すりばち状土壌の底に、長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.1mの同形の土壌がある。土壌内には、灰色砂質層が堆積し、古墳時代後期の須恵器の甕・坏蓋・坏身(図版50 図93~95)、土師器の甕が検出された。なお、甕の体部上・下位に焼成後の穿孔があることから、甕棺墓であった可能性がある。

#### 土壌- 2

土壌- 2 も同じく、溝- 1 の西側溝肩沿いにある長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.03mの非常に浅い楕円形土壌。土壌内には、茶灰色粘質土層が堆積し、古墳時代前期の土器片が検出された。

#### 土壌- 3

土壌- 3 は、溝- 2 の北側に位置し、周囲に柱穴跡があり、焼土が堆積していたことから炉跡と思われる。長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.7mを測る隅丸方形の土壌層が2段に掘られた土壌。土壌内には、焼土を含む暗茶褐色砂質土が堆積し、古墳時代前期の土器片が検出された。

#### 柱穴跡

柱穴跡は、土壌- 3 の周囲と溝- 1・3 の間にみられる。土壌- 3 の周囲の柱穴跡は、調査面積の関係から竪穴住居と思われる柱配置が復元できなかったが、いずれも掘方径0.3~0.5m、柱径0.1~0.3m、深さ0.15~0.3mの円形で、検出時の深さは浅いものであった。溝- 1・3 の間の柱穴跡は、その配置から柵列のようなものではないかと思われる。いずれも、掘方径0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mの浅い円形あるいは楕円形で、P- 4 からは須恵器の短頸壺が出土している。

#### 土器溜り

溝- 1 の北側肩上の包含層(茶灰色砂質層)を検出時に、長さ約5m、幅0.5~1.0mにわたって、土器が集中して検出された。土器溜りは、生活面(溝肩)より最大0.25m浮いており、低い土器は溝内に約0.2m入っていた。土器溜り自体には、掘方は無く、ほぼ埋没した状態の溝肩に沿って投棄したように検出された。土器は、全て古墳時代前期のもので、器種は壺・甕・高坏・器台・鉢

であった。その大多数は破片であり、ほぼ完形のものも数点あったが風化・摩耗が著しく、検出後復元図示できるものは非常に少なかった。

このような土器溜りは、昭和47年度調査のH-3-H地区、昭和63年度調査のH-4-N地区でも検出されている。いずれの地区でも、掘方が無いものと土壌状の落ち込みを伴うものがあり、時期も弥生時代中期と古墳時代前期とであった。

#### 4. 遺物 (図版50~55)

当地区から検出された遺物は、包含層、溝-1・2、土器溜りを中心に、コンテナバットに約60箱である。その大多数は、古墳時代前期のものであり、その他同後期の須恵器と僅かな弥生時代中期の土器である。なお、古墳時代前期の土器に関しては、東奈良遺跡の土師器編年（東奈良遺跡調査概報Ⅰ 昭和54年）を使用している。

##### 包含層

##### 須恵器

坏身89は、底部が低く、立ち上がりも低く内傾している。同90は、口径8.75cmの小型品で、底部は無調整、ヘラ削りも底部と体部の境のみに行っている。

有蓋高坏91は、脚部を欠損している。坏部は底部が低く、立ち上がりも低く内傾している。

罐92は、口頸部を欠損している。肩部はやや張り、最大腹径は体部の上位にあって、内湾ぎみに下がり、底部はやや丸い。

陶器編年では、90は第Ⅲ形式1段階、他は第Ⅱ形式5段階頃のものと思われる。

##### 土壌-1

坏身93は、体底部が低く、立ち上がりも低く内傾して、端部が丸く終る。坏蓋94は、天井部は丸く、口縁部との境に稜は無い。口縁端部は丸く終る。

甕95は、口頸部は短く外反し、端部でさらに外反し丸く終る。口縁部外面には、強い横ナデによる稜がみられる。体部は球形に近く、最大腹径がやや上位にあり、底部は丸底である。調整は、体底部外面が擬格子叩き目の後、体部はカキ目調整を行っている。内部は、下から上への同心円叩き目である。最大腹

径部と同下位には焼成後の穿孔が各々1ヵ所ずつ穿たれている。

陶邑編年では、いずれも第Ⅱ形式5段階頃のものと思われ、包含層検出時は土壌が確認されていなかったため、包含層の坏が土壌-1のものであった可能性はある。その他、土壌-1から土師器の小型の甕が検出されたが、調査中の雨のため壊れ、また風化が著しく復元図示できなかった。

#### P-4

短頸壺 96は、口頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部が丸く終る。体部は最大腹径が中位にある球形をなし、底部は丸い。体部下位から底部がヘラ削り、他は横ナデが行われている。陶邑編年では、第Ⅱ形式5段階頃のものと思われる。

#### 溝-1

##### 土師器

壺型土器 97・98は、いわゆる外反する口縁部をもつタイプ。97は、短い筒状頸部から大きく外反する口縁部に、上下に肥厚する口唇部。体部は、肩部が張り、最大腹径が下位にある。底部は突出平底である。体部外面には、縦・斜め方向のヘラ磨き、同内面は最大腹径までは横刷毛目を行っている。

99~101は、いわゆる二重口縁のタイプ。99は、内傾する頸部にくの字形に二段に外反する口縁部が付く。口縁部内外面には、櫛描波状紋が施され、頸部にはヘラ磨きが行われている。いわゆる岡山県酒津式と呼ばれているタイプである。100は、短い頸部から大きく外反し、さらに段をもって外反する口縁。紋様は無く、口頸部内外面にヘラ磨きが行われている。101は、細い頸部から直線的に大きく開く口縁部に、粘土帯を口唇部に垂下したタイプ。その垂下した外面に、櫛描波状紋と貼り付け渦巻き浮紋を施す。

102~113は、いずれも外上方に直線状に伸びる口縁部をもつタイプ。このタイプには、器高30cm前後の大型品、同15cm前後の中型品、同10cm前後の小型品がある。大型品の102・103は、球状の体部に、体部に比べて小さく短い直線状の口縁部が付き、口唇部は丸く終る。104は、丸底球状の体部に、前者よりやや大きく長い口縁部が付く。いずれも紋様は無く、体部から口縁部にヘラ磨きを行っている。中型品の106・107は、やや胴長の体部に直線状の口縁部が付き、106は突出平底に体・口縁部は刷毛目調整、107はヘラ削り底に体部はヘラ磨き

調整である。108～110は、球状の体部に、体部に比べて大きい直線状の口縁部が付き、108・109は口唇部で僅かに内弯し、110はやや外反ぎみに長く口縁部が伸びる。108は凹みの残るへら削り底に、体部は叩き目が残り、109は丸底にナデ調整、110は丸底にへら磨きが行われている。

小型品の113は、いわゆる小型丸底埴と呼ばれるタイプ。丸底の底部に浅い体部、僅かに頸部がくびれ、口縁部は直線的に外上方へ伸び端部で僅かに内弯し丸く終る。しかし、他に見られるようなへら磨きは無く、ナデ調整の粗雑な作りである。

以上、97は東奈良Ⅰの下層出土、106は同Ⅰの上層出土。99・111・112は同Ⅱの下層出土、100は同Ⅱの上層出土。98・101・102・107・108は同Ⅲの下層出土。103～105は同Ⅳの下層出土、109・110・113は同Ⅳの上層出土である。

甕型上器 114は、突出平底に卵形の体部。口頸部はくの字形に外反し、口唇部で僅かにつまみ上げている。体部外面には、2段に別けて叩き目調整が行われ、下段は上段接合前に叩いている。同内面上位にはへらナデが行われている。115は、突出平底に最大腹径が中位にある楕円形の体部。口頸部はくの字形に外反し、口唇部は丸く終わるが、外面に強い横ナデによる稜が見られる。116は、突出ぎみの平底に最大腹径が中位にある楕円形の体部。口頸部はくの字形に外反し、口唇部は強い横ナデによる凹みが見られる。体部外面の叩き目は、3段に別けて行われており、突出ぎみの平底にも叩き目調整が行われ、また一部右下がりの叩き目が見られる。117は、底部にも叩き目が行われ尖ぎみの底に、球形に近い体部。口頸部はくの字形に外反し、口唇部は丸く終わる。体部内面上位に横ハケ調整が行われている。118は、小型の甕、体部外面は叩き目の後、ナデ調整を行っているが、全体に作りが粗雑である。119は、尖ぎみの小さな平底に卵形の体部。口頸部はくの字形に外反し、中位で僅かに肥厚する。体部外面は刷毛目調整が行われている。120は、尖底に球形に近い体部。口頸部は緩やかにくの字形に外反し、口唇部で上方に僅かにつまみ上げ、内弯する。121・122は口頸部が鋭く、くの字形に外反し、中位で僅かに肥厚・屈曲し、口唇部で上方に僅かにつまみ上げ、122は内弯している。体部外面は細かい叩き目、内面はへら削りを行っており、胎土が茶褐色であることから、河内系の土器である。123・124・199は、丸底・球形の体部。口頸部はくの字形に

外反し、中位で僅かに肥厚・屈曲・内弯し、口唇部で内・外に僅かに肥厚する。体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行っており、胎土は乳褐色であることから、在地の土器である。

以上、114・118は東奈良Ⅰの下層出土。115・116は同Ⅱの下層出土。117・121は同Ⅲの下層出土。120は同Ⅳの下層、119・122は同Ⅳの上層出土。123・124・199は同Ⅴの上層出土である。

高坏型土器 125は、柱部が中空の裾広がり、坏部は底部より内弯ぎみに伸び、口縁部は屈曲して短く外反する。坏・柱部外面に縦ヘラ磨き、坏内面に放射状のヘラ磨きが行われている。126は、坏底部より屈曲して短く立ち上がり、再び水平近く屈曲して伸び、端部は僅かに上方に肥厚する。127は、脚部が中空柱状の柱部より、裾部が2段に屈曲して広がる。裾部上位に円孔が4ヶ所穿たれている。128は、脚部が充実柱状の柱部より裾部広がり、裾端部は丸く終わる。坏部は、底部が内弯ぎみに短く伸び、口縁部が稜をなして大きく外反して伸びる。器壁内外面は風化が著しく、外面に僅かにヘラ磨きが残るのみであった。129は、中空裾広がり柱部。小さな底部から稜をなして大きく直線的に斜め上方に伸びる坏部。調整は風化のため不鮮明であった。130は、小さな碗形の坏部に、脚部は柱部が無く裾部へ大きく広がる。坏部内外面に細かいヘラ磨きが行われている。

以上、125は東奈良Ⅰ、126・127は同Ⅲ、128～130は同Ⅴで、130は上層、他は下層出土である。

鉢型土器 131は、突出平底から斜め上方に内弯ぎみに立ち上がり、口頸部が僅かにくびれ、口唇部は横ナデによる面がある。体部外面は叩き目の後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きを行っている。132は、平底から斜め上方に内弯ぎみに立ち上がり、口頸部がくの字形にくびれ、口唇部は横ナデによる面があり、片口が付く。体部外面は叩き目の後ヘラ磨き、内面は刷毛目の後ヘラ磨きを行っている。133は、尖底に丸く立ち上がる体部。口頸部はくの字形にくびれ、口唇部が丸く終わる。口縁・体・底部の内外面は、刷毛目調整を行っている。134は、最大腹径が上位にある丸い体部。口頸部は僅かにくびれ、斜め上方に伸び、口唇部が丸く終わる。体部外面は刷毛目、内面はナデ調整である。135・136は、体部が内弯ぎみに立ち上り、肩部で内側に屈曲し、135は口頸部がくの字形に

外反し、再び屈曲して立ち上がる。体部外面に刷毛目調整が行われている。いずれもその形態から、吉備系の土器と思われる。

以上、131は東奈良Ⅰ、132は同Ⅱ、133は同Ⅳ、134は同Ⅴ、他は時期が不明であるが、いずれも下層出土である。

甔型土器 137は、尖底より外反ぎみに斜め上方に伸び、口縁部で内弯する。外面に叩き目の後、刷毛目調整を行っている。138は、尖底より内弯ぎみに斜め上方に伸び、底部を含み外面に叩き目調整を行っている。

以上、東奈良Ⅲの下層出土である。

器台型土器 139は、上下に開く円筒状のタイプ。上下に各4ヶ所の円孔が穿たれ、器壁外面には縦刷毛目の後縦ヘラ磨きが行われている。140・141は、皿状受部に短い充実柱部と皿状受部を逆さにしたような裾部が付くタイプ。141は、受部内面に横方向にヘラ磨きが行われている。

以上、139は畿内Ⅴ様式の上層出土。140は東奈良Ⅲの上層、141は同Ⅲの下層出土である。

## 溝-2

溝-2からは、多数の土器が出土したが、残存状態が悪かったため、図示できるものは非常に少なかった。

## 土師器

壺型土器 142・143は、二重口縁のタイプ。142は、細い筒状頸部から水平近く外反し、稜をもって再び外反する。口縁部外面には櫛描波状紋が施され、143には肩部に同波状紋、頸部には円形竹管紋とヘラ押え紋が施されている。いずれも、東奈良Ⅳである。

甕型土器 144は、やや歪んだ底部に胴長の体部。口頸部は緩やかにくの字形に外反し、口唇部は丸く終わる。体部外面には、3段に別けられる叩き目が行われているが、中段のそれは右下がりである。144は、東奈良Ⅱである。

甔型土器 145は、尖底ぎみの底部より内弯ぎみに立ち上がり、口唇部はナデによる僅かな肥厚が外面に見られる。145は、東奈良Ⅲである。

## 土器溜り

土器溜りからも多数の土器が出土したが、残存状態は非常に悪く、復元・図示できるものは極僅かであった。

## 土師器

壺型土器 146は、よく張った肩部に外反ぎみの頸部。口縁部は水平に伸び、口唇部で上下に肥厚し、全体に器形に比べて器壁が厚い。146は、東奈良Ⅱである。

高坏型土器 147は、裾広がりの中空柱部に大きく広がる裾部。裾端部は丸く終わる。裾部に4ヶ所の円孔が穿たれ、柱・裾部に縦ヘラ磨きが行われている。147は、東奈良Ⅳである。

## 5. 結 語

当調査地区での生活が始まるのは、弥生時代末から古墳時代初期である。その頃、溝-1・2・3、堅穴住居が造られる。溝-1は、東奈良遺跡の西側を北北西から南南東に連なる幅約7~10m、深さ約2.5~3.0mの大溝である。大溝は、当調査地区で向きが南南東から南東へ蛇行し、東側の谷へ注いでいる。また、溝内には砂・砂質・植物遺体層が短期間に埋没した状態を示す堆積層が見られた。また出土土器からも、上・下層の明確な時期差はなく、溝埋没後に投棄された土器溜りとも時期差がないことから、非常に短期間に埋没したと思われる。この状態は、G-3-A地区の溝-V、H-3-A地区の溝Ⅱ-3でも見られたが、土器などの遺物は最下層のみで検出された。さらに、溝自体も、整った2段掘りの溝肩を成し、規模も大きかった。このことから、大溝は自然水路を一部改修して造られたが、古墳時代初期に膨大な量の土器とともに、自然災害などで短期間に埋没したものと思われる。その時、埋没した溝上に、意図はわからないが多量の土器を投棄している。また、同時期に溝-2・3、堅穴住居も埋没・破棄された。その後、古墳時代末期から飛鳥時代初期頃再び生活圏となり、甕棺墓などが作られたが、その中心は他の地域に移ったと思われる。

## IV 東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区

### 1. 調査経過

所在地 茨木市東奈良3丁目390-2

調査面積 75㎡

調査期間 昭和63年4月21日～同年5月23日

届出理由 共同住宅建設

当調査地区付近は、近年のマンションブームによって、多くのマンションが建つ所であり、JR貨物線の高架も走り、それにともない発掘調査も進んでいる所でもある。それらの調査から、当調査地区は東奈良遺跡を二分する谷の東側にあたり、弥生時代前期から始まる集落の中心地にあたることが判明している。

昭和63年1月12日、埋蔵文化財確認試掘調査依頼を受けて、試掘調査を実施したところ、約0.5mの耕土・床土下より包含層が検出されたため、発掘調査の必要があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会と協議の結果、昭和63年4月21日より発掘調査を実施することになった。

### 2. 層位 (図版38)

当調査地区の基本層位は、上層より厚さ約0.5mの耕土(耕土が厚いのは近年客土したためである)、淡茶灰色・灰濁色砂質土(床土)、淡茶灰色砂質土(包含層)、黒灰色粘質土(包含層)、灰黄色砂質土(黒色粘質土が混ざる一時期の生活面)、黄色粘質土(弥生時代前期以降の生活面)、青灰色粘質土層である。第Ⅰ生活面灰黄色砂質土の標高は6.6m、第Ⅱ生活面の黄色粘質土は6.4mを測る。なお、第Ⅰ生活面での遺構検出を試みたが、余りにも多数の遺構と生活面と同色の埋め土のため複雑であり、また調査期間も短いため、第Ⅱ生活面で一括検出を行った。

### 3. 遺構 (図版38)

当調査地区からは、調査面積約75㎡の中に弥生時代前期から同後期の大小の

溝15条以上、同土壙10基以上、同柱穴跡約250穴が所狭しと検出された。

#### 溝-1

溝-1は、調査地区の東側を南北に連なる幅3.3m、深さ0.97~1.05mを測り、北から南へ僅かに低くなっている。また、溝底の平均標高は5.39mである。溝内には、粘土・砂質土がレンズ状に堆積し、上層と溝肩には生活面の黄色（黄灰色）粘質土が埋められたり、本来の溝の堆積土に混入していることから、溝が埋没した後生活面の拡大のため溝上を埋め固めたと思われる。また、下層には溝肩・底の地山の土がブロック状に混入していた。各層から、弥生時代前期の土器・獣骨・シカの角・自然木・加工木などが検出された。

#### 溝・土壙・柱穴跡

溝-1の西側には、溝・土壙・柱穴跡が多数検出された。これらの中には、第I生活面から掘られたものもあり、また結果的には検出出来なかったが、溝-1上にも存在していたと思われる。以下、主だった遺構を記述する。

#### 溝-2

溝-2は、調査地区南東部を南西から北東へ連なり、溝-1に沿って北に屈曲する。溝幅0.34m、深さ0.1mを測る断面U字形の溝である。溝-1内での連なりは、堆積土が同一の黒灰色砂質土であるため不明であるが、出土土器が畿内第Ⅲ様式であることから、溝-2は溝-1埋没後に掘られたと思われる。

#### 溝-3

溝-3は、調査地区南部を北西から南東に連なり、ほぼ直角に屈曲し北東へ伸び溝-1・2に接して消える。溝幅0.18m、深さ0.1mを測る断面U字形の溝で、黒灰色砂質土が堆積し、畿内第I様式の土器片が出土した。

#### 溝-4

溝-4は、土壙-1の東側から東へ連なり、ほぼ直角に屈曲し溝-1に並行して北へ約4.8m連なり、ほぼ直角に屈曲し西側へ約2.6m連なり消える。溝幅0.23m、深さ0.05~0.1mを測る断面U字形の溝で、黒灰色砂質土が堆積するが、遺物は全く検出されなかった。なお、両側の溝は、土壙と重複しているため明確でないが、さらに西へ伸びているものと思われる。

#### 溝-5

溝-5は、溝-4に囲まれた区域内を東西1.6m、南北に歪んで約3.2m連な

り消える。溝幅0.16～0.2m、深さ0.06mを測る。溝には、黒灰色砂質土が堆積していたが、遺物は検出されなかった。

#### 溝-6

溝-6は、溝-2に接して北へ約2m連なり、溝-4の南東隅で消える。溝幅0.18m、深さ0.05mを測る。溝には、黒灰色砂質土が堆積し、畿内第Ⅲ様式の土器片が検出された。

#### 溝-7

溝-7は、溝-4の北側の溝と並行して約2.6m連なり、同東側と交差して消える。また、同北側の溝とも土壇-11を介して連なっている。溝幅0.12m、深さ0.06mを測り、溝内に黒灰色砂質土が堆積し、畿内第Ⅰ～Ⅱ様式の土器片が検出された。

#### 溝-9

溝-9は、溝-4の南より東へ伸び、北へ屈曲して南側溝-4と交差して伸び、同東側と接し西へ屈曲して溝-5と接して消える。溝幅0.2m、深さ0.05mを測り、溝内に黒灰色砂質土が堆積するが、遺物は検出されなかった。

溝-2～9は、その規模・形態から、堅穴住居の壁面に沿って掘られた溝と思われるが、調査範囲も関係して全周するものがみられず、明確でない。

#### 土壇-1

土壇-1は、溝-3を切り、土壇-2他柱穴跡に切られている長軸1.5m、短軸0.66m、深さ0.19mを測り、長軸を北西-南東に取る隅丸長方形すりばち状土壇。土壇内には、黒色粘質土が堆積し、畿内第Ⅰ様式の壺型土器片と石包丁が検出された。

#### 土壇-2

土壇-2は、土壇-1の北西肩と接する長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.2mを測り、長軸を北西-南東に取る隅丸長方形土壇。土壇内には、黒色粘質土が堆積し、畿内第Ⅰ様式の壺・壺型土器片が検出された。

#### 土壇-6

土壇-6は、溝-2の東側に並行して位置する長軸0.52m、短軸0.3m、深さ0.14mを測り、黒灰色砂質土が堆積していたが、遺物は検出されなかった。

#### 土壌-7

土壌-7は、溝-1の溝肩に位置し、溝埋没後に掘られたものと思われる。楕円形のすりばち状土壌と思われ、推定長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.33m程と考えられる。土壌内には、黒色粘質土が堆積していたが、遺物は検出されなかった。

#### 土壌-9

土壌-9は、調査地区の北西部で柱穴跡と重複して検出された。推定長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.21mを測る楕円形すりばち状土壌と考えられ、黒色粘質土が堆積し、畿内第I様式の壺・鉢型土器片が検出された。

#### 柱穴跡

柱穴跡は、約250穴を数えるが、調査範囲の関係もあり建物などを現段階では復元できなかった。その中で、溝-1の底に検出されたP-3と溝肩のP-1・2がその配置関係から橋の可能性がある。なお柱穴跡掘り方径0.3~0.4m、深さ0.25~0.3mを測り、P-2から畿内第I様式の土器片が検出された。その他の柱穴は、円形・楕円形をなし、規模も径(長軸)0.08~0.5m、深さ0.05~0.45mとさまざまある。また、約250穴の柱穴の内、同50穴より畿内第I~IV様式の土器片が検出された。

### 3. 遺物(図版56~59)

遺物は、包含層・溝-1を中心にコンテナバットに約30箱検出された。

包含層の遺物は、茶灰色砂質層(上層)、黒灰色粘質層(中層)、黒色粘質土と黄色粘質土が混入する灰黄色砂質層(下層)に別けて検出したが、緻密なものでなく、下層は第I生活面であることから遺構の遺物を含むものと思われる。

#### 上層

鉢型土器 148は、突出平底から内湾ぎみに立ち上がり、口唇部僅かに外反し、丸く終わる。内面には、放射状のへら磨きが行われている。東奈良遺跡土師器編年Iに位置する。上層からは、その他弥生時代中期から中世の土師器片が検出されたが、土器量も少なく細片のため図示できたのはこの1点のみである。

## 中層

甕型土器 149は、突出平底に最大腹径が口径より小さい体部。口頸部は僅かにくびれ、内湾ぎみに斜め上方へ伸び、口唇部で僅かに外反する。150は、やや肩が張った体部にくの字形に短く外反する口頸部。口唇部は丸く終わる。体部には叩き目が残る、その上に刷毛目調整を行っている。149は東奈良Ⅰ、150は東奈良Ⅴである。

高坏型土器 151は、裾広がりの中空柱部の器壁が薄く太い。裾部は柱部よりなだらかに広がり、端部はナデによる面取りが行われている。裾部に4ヵ所の円孔を穿ち、器壁外面には細かい刷毛目調整を行っている。151は、中空柱部の上位が細く裾部へ大きく広がり、裾端部ではさらに水平近く広がる。柱部上位に櫛描直線紋、裾端部に同波状紋。柱部下位に4ヵ所の円孔。裾部下位に2孔1対の円孔が4ヵ所穿たれている。壁外面には細かい刷毛目調整を行っている。いずれも、東奈良Ⅴよりやや新しいものと思われる。

鉢型土器 153は、突出ぎみの平底から内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり、口縁部で外反し、口唇部に横ナデによる凹みがある。154は、突出ぎみの平底から内湾して斜め上方に立ち上がり、口唇部は丸く終わる。いずれも、東奈良Ⅱである。

甕型土器 155は、尖底の底部から斜め上方に立ち上がる。口唇部は指押えによる凹凸が残る、また全体に手捏ね風であり、東奈良Ⅲである。

土馬 156は、鬣の一部と脚・尾が欠損するが、他はほぼ残存する。胴部・頸部・頭部ともに丸みがあり、残存長21.9cm、幅6.25cm、高さ8.4cmのずんぐりした形をしている。頭部から胴部には、鞍など馬具の表現はされていないが、円形竹管紋によって手綱・胸繫・尻繫などが表現されている。また、接合面がないものの、同胎土の残存高7.5cmの脚部が1点出土している。時期は、共搬土器の時期が弥生時代前期から古墳時代後期までと幅広いため明確でないが、作りが他地域で検出されている土馬より素朴であり、胎土は在地の弥生式土器・古式土師器と同質であることから、古墳時代前期以前のものと考えられる。

## 下層

壺型土器 157は、底部は器壁が厚く大きい平底。体部は下位でよく張り、上位で口頸部に向かって張りがなくなる。口頸部は、頸部がやや長く、口縁部

が短く外反し、口唇部はナデによる面取りがなされている。器壁外面は、刷毛目の後、一部ナデが行われている。158は、短い頸部から、斜め上方に短く伸び、口唇部で面取りがなされる口縁部。頸部にはヘラ描沈線紋3条を施し、口頸部内外面には細かいヘラ磨き、口縁部中位に円孔1孔が2ヵ所に穿たれている。159は、外反ぎみの頸部から、大きく長く外反し、口唇部で面取りがなされている口縁部。頸部にはヘラ描沈線紋4条を施し、口縁部内面に横ヘラ磨き、同外面から頸部に縦刷毛目を行っている。いずれも、畿内第Ⅰ様式である。

甕型土器 160は、倒鐘形の体部にゆるやかに外反する口縁部。口唇部にヘラ刻み目紋、頸部にヘラ描沈線紋を施し、器壁内外面にナデを行っている。畿内第Ⅰ様式である。

鉢型土器 161は、斜め上方へ内弯ぎみに伸びる体・口縁部。口唇部は内外に肥厚する。口縁部に削り出し突帯ヘラ描沈線紋2条、口唇部にヘラ描沈線紋1条を施し、器壁内外面にヘラ磨きを行っている。162は、体部が斜め上方へ内弯ぎみに伸び、頸部で僅かにくびれ、口縁部で短く外反する。器壁内外面に細かいヘラ磨きを行っている。163は、平底から斜め上方へ伸び、体部中位でゆるやかに内側へ屈曲し、口縁部で外反し、口唇部は丸く終わる。体・底部内面に、それぞれ横・放射状のヘラ磨きを行っている。160・161は畿内第Ⅰ様式、163は東奈良遺跡土師器編年の東奈良Ⅱである。

壺用蓋型土器 164は、笠形をなし、端部は丸く終わる。口縁近くにヘラ描沈線紋3条を施し、器壁外面ナデ、内面ヘラ磨きを行っている。畿内第Ⅰ様式である。

今回包含層下層の土器は、畿内第Ⅰ様式を中心に記述したが、前述したように生活面でもあるため、弥生時代前期から古墳時代前期までの土器が含まれていた。

#### 溝-1

##### 上層

溝上を生活面として利用しているため検出土器量も少なく、時期も弥生時代前期から中期と幅がある。

壺型土器 165は、短い頸部から斜め上方へ長く外反し、端部でさらに外反する口縁部。口唇部は面取りがなされている。頸部に貼り付け突帯ヘラ刻目紋

と赤色顔料が塗られ、口唇部にヘラ描沈線紋2条、口縁部内面に貼り付け突帯が一周せずにその端部が鉤状に止まる紋様を施している。

甌型土器 166は、平底の底部から内湾ぎみに伸びる体部。底部に両面から焼成後に打欠いた円孔が1ヵ所穿たれ、体部内外面は細かいヘラ磨きを行っている。いずれも、畿内第Ⅰ様式である。

#### 下層

壺型土器 167は、器壁が厚く大きい底部。体部は最大腹径が下位にあり、その上部に段がある。口頸部は短く外反し、口唇部は丸く終わる。頸部にヘラ描沈線紋2条を施し、口頸・体部外面と口縁部内面に横方向のヘラ磨きを行っている。168～173は、削り出し突帯ヘラ描沈線紋を施すタイプ。168は、器壁の厚い底部に、最大腹径がよく張った扁平な体部。頸部は、太くやや長い。最大腹径の上位に、削り出し突帯ヘラ描沈線紋1条を施し、その間に細いヘラ描沈線紋と同直線紋を施す。その他、頸部上位にヘラ描沈線紋1条を施し、調整は横ヘラ磨きを行っている。169は、大きい底部に、最大腹径がよく張った扁平な体部。口頸部は大きく外反し、体部に比較して口径が大きい。頸部と体部上位に削り出し突帯ヘラ描沈線紋2条を施し、口縁部中に円孔1孔が2ヵ所に穿たれている。170は頸部の削り出し突帯が下段のみに削られており、かつ刷毛目が残リナデ・ヘラ磨き調整が行われていない。171は、頸部の削り出し突帯が上段のみ削られ、体部はヘラ描沈線紋である。174・175は、それぞれ頸部にヘラ描沈線紋2条と6条施し、調整もヘラ磨きと刷毛目の後ナデである。176は、頸部に貼り付け突帯刻目紋と口唇部にヘラ描沈線紋1条を施す。いずれも、畿内第Ⅰ様式であるが、167は他よりやや古いと思われる。

甌型土器 177～180は、頸部に1～10条のヘラ描沈線紋と口唇部にヘラ刻目紋を施すタイプ。また、いずれも倒鐘形の体部に、短く外反する口縁部をなし、沈線紋計10条の180のみ体部上位がやや張る。調整は、刷毛目あるいはナデである。181～185は、いずれも倒鐘形の体部に、短く外反する口縁部をなし、181が口唇部がヘラ刻目紋を施す以外、無紋のタイプ。181は、器壁の厚い平底に倒鐘形の体部、口縁部が短く外反し、口唇部下位に細かいヘラ刻目紋を施す。体部外面は、刷毛目調整を行っている。182は、口縁部が水平近くに屈曲し、口唇部が横ナデによって波打った稜が見られる。185は、体部上位がやや張り、

口縁部が僅かに外反し非常に短い。いずれも、畿内第Ⅰ様式である。

鉢型土器 186～188は、大きい底部から内湾ぎみに体部が立ち上がり、口縁部が外反するタイプ。186は、体部が下位で外反し、中位から内湾する。口縁部下位に指押えによる凹みが全周している。体部内外面上位には、ヘラ磨きを行っている。188は、小型の鉢で、口縁部が大きく外反し、口唇部に深いヘラ刻目紋を施す。189は、体部上位でくびれて口縁部が外反する。体部内外面にヘラ磨きを行っている。いずれも、畿内第Ⅰ様式である。

壺用蓋型土器 190～193は、径8.6～14.95cmの笠形をなし、191は笠頂部に中凹みの環口状のつまみがある。193は、口縁部に3条のヘラ描沈線紋が放射状と一周している。191は中心に、192・193はやや中心からはずれて円孔1孔が穿たれている。194は、人手形をなす。いずれも、畿内第Ⅰ様式である。その他、壺用蓋型土器195、甔型土器196がある。

#### 石器 (図版60)

石包丁 197は、片刃の楕円形をなすが、かなり使用あるいは再利用したのか、摩耗が著しい。紐孔は本来の2孔を石錐で穿たれているのに、後からの紐孔は大きく粗雑なため、鑿状のもので穿ったものと思われる。法量は、残存長10cm、幅5.4cm、厚さ0.65cm、紐孔間2cm、56gを測り、土壌-1検出の頁岩製である。

石斧 198は、平面形が長方形の扁平片刃石斧で、残存長8.4cm、幅5.6cm、厚さ1.2cm、76.5gを測り、溝-1下層検出のサヌカイト製である。

## 5. 結 語

当調査地区からは、竪穴住居跡を思わす小型の溝が回り、多数の柱穴跡・土壇も検出されたが、調査範囲が狭いためその性格を把握することはできなかった。しかし、東側約6mを昭和53年度に、北西から南東へ長さ約110m、幅8～12mの間を調査しており、その時検出された遺構と比較検討してみる。(東奈良遺跡調査概報Ⅱ 昭和56年) 溝-1は、弥生時代前期の環濠と考えられ、ほぼ東-西へ弓なり並行して連なる溝-25・27の南に位置し、このまま北へ伸びると直交することになる。また、北-南へ連なり東へ屈曲する同溝-28とは、ほぼ並行しており、時期・規模も同程度であることから、今回検出の溝-1も溝-28に並行する環濠の一部と考えられる。

## V 東奈良遺跡(88-4) H・N B-5-M・N 地区

### 1. 調査経過

所在地 茨木市奈良町518番地 1  
調査面積 240m<sup>2</sup>  
調査期間 昭和63年 5月24日～同年 6月20日  
届出理由 共同住宅建設

当調査地区は、東奈良遺跡の北西部に位置するが、南東・南西部に比較して遺構面が浅いことも関係し、遺構・遺物量も少なくなる。特に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡は少なく、溝・方形周溝墓などが検出されている。

昭和63年 3月 5日、埋蔵文化財確認依頼を受けて試掘調査を実施した結果、弥生時代から古墳時代にかけての土器包含層と生活面が検出されたため、発掘調査の必要があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会と協議の結果、昭和63年 5月24日から発掘調査を実施することが決定した。

### 2. 層 位 (図版39・40)

当調査地区の基本層位は、上層より耕土、淡黄灰色粘質土(床土)、淡灰色粘質土・茶灰色粘質砂土(古墳時代前期～中世の遺物を包含)、黄色粘土(一部黄灰色粘土・生活面)である。なお、生活面の平均標高は7.44mを測り、僅かに北から南へ低くなっている。

### 3. 遺 構 (図版39・40)

当調査地区から検出された遺構は、方形周溝墓2基、溝3条、土壇3基である。

#### 方形周溝墓

方形周溝墓-1は、調査地区北西部でその一部を検出した。台状部には主体部は残存しておらず、北側を溝-3によって切られている。台状部検出規模は、東西5.2m以上、南北5.9m以上を測る。周溝の南溝は、やや弓なりにN-71°-Eをとって伸び、東溝へ屈曲する。溝底は、西から東へ低くなり、東溝と交

差する付近では重複する土壌とも関係し、約0.35m落ち込む。溝幅1.6m、深さ0.15~0.5mを測り、暗茶褐色・茶灰色・淡茶灰色砂質土の堆積がみられ、弥生時代中期から古墳時代末期の土器が検出された。同東溝は、方形周溝墓-2の周溝西溝と共有しており、N-17°-Wにとる。溝幅1.8~2.3mと北側が広くなり、深さは0.53mを測る。溝内には、包含層の茶灰色粘質砂土、黒色・灰色粘土、灰濁色砂質土の堆積がみられ、7世紀末頃と思われる須恵器・土師器片が検出された。

方形周溝墓-2は、同-1の東側に接続して、同じくその一部が検出された。台状部には、厚さ0.12mの淡茶灰色砂土が盛土状に堆積していた。しかし、主体部などは検出されず、台状部東西長7.4m、南北長4.4m以上を測る。周溝南溝は、同-1の南溝と連なり、N-70°-Eにとって直線的に伸びる。溝幅1m、深さ0.38~0.61m（周溝外部との比高差）と周溝の西半が低くなっている。溝内には、茶褐色・淡茶灰色砂質土、溝底が一段低くなっている箇所には灰色砂土と生活面の黄色粘土の互層が堆積し、弥生時代中期の土器片が検出された。同東溝は、N-14°-Wにとり、溝幅1.8m、深さ0.46mを測り、周溝東側は溝-2に向かって深さ0.2m程の落ち込みが伸びている。溝内には、包含層の茶灰色粘質砂土、黒色・灰色粘土、灰濁色砂質土の堆積がみられ、黒色粘土はさきの東側の落ち込みにも広がり堆積しており、6世紀末頃の須恵器・土師器片が検出された。

#### 溝

溝-1は、調査地区内をN-77°-Eにとって直線的に連なる幅3.0~3.4m、深さ1.42~1.62mと西から東へ低くなり、溝底平均標高5.896mを測る断面V字形に近い溝である。また、溝埋没後に掘られた幅1.4m、深さ0.6mの溝が、溝の中央をほぼ同一方向に連なっていた。溝内には、17層に別けられる砂・砂質土が上層に、下層には粘土・粘質土・植物遺体層が複雑に堆積していた。しかし、溝の規模に比べ遺物は少なく、古墳時代前期から中世の土器片が検出されたのみである。

溝-2は、調査地区北東部で僅かに検出されたのみであるため明確でないが、断面よりの規模は幅約1.2m、深さ0.71mと考えられるV字形の溝で、調査地区内では蛇行している。溝内には、茶灰色粘質土が堆積していたが、遺物など

は全く検出されなかった。

溝-3は、方形周溝墓-1の台状部で僅かに検出されたのみであるため、規模は不明であるが、幅0.4m、深さ0.2m程のものと思われ、周溝南溝とほぼ並行している。

#### 土壌

土壌-1は、溝-1と方形周溝墓-1の南溝との間で検出され、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.1mを測る楕円形の土壌である。土壌内には、茶灰色砂質土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。

その他、方形周溝墓-2から溝-1にかけて自然の落ち込み、方形周溝墓-1の周溝内に不鮮明な土壌が検出されたが、いずれも方形周溝墓・溝が造られる以前のものである。

## 4. 遺物

当調査地区より検出された遺物は、包含層・方形周溝墓の周溝・溝-1から、弥生時代中期から中世（14世紀頃）にかけての土器片のみであった。そのため、復元・図示できるものは土馬と石包丁片のみであった。

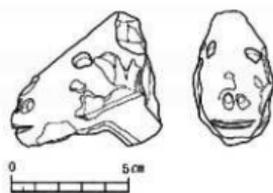
土馬 挿図-4は、馬の頭部と頸部の一部である。手捏ねの須恵質で、目・鼻・口が写実的に創られており、面繫が粘土紐を貼り付けて表現しており、包含層出土である。

石包丁 挿図-5は、杏仁形の破片で、片刃である。刃部には稜がなく、使用頻度が高いのか刃こぼれをしている。残存長7.05cm、幅4.75cm、厚さ0.65cm、23.5gを測る緑泥片岩製の溝-1出土である。

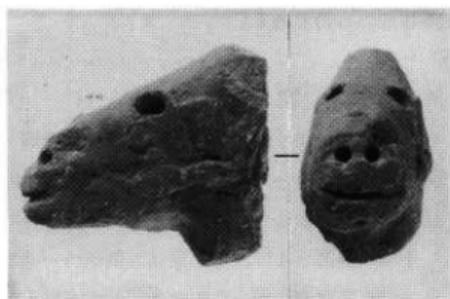
## 5. 結語

当調査地区から検出された方形周溝墓-1・2と溝-1とは、その時期を確定出来る遺物が出土していないため、前後・相互関係は明確でないが、方形周溝墓の周溝と溝-1が並行・直交していることから互いにその存在を意識して造ったものと思われる。また、このような関係は、昭和53年度調査のD-4-B・C地区において、弥生時代前期から後期の環濠と思われる溝の外側に、弥生時代前期から中期の方形周溝墓が検出されている。（東京良遺跡調査概報Ⅱ

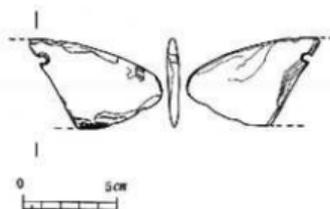
昭和56年)さらに、当調査地区の北東約160mのA-6-J地区でも、弥生時代中期の方形周溝墓群(東奈良遺跡調査概報I 昭和53年)、同北東約300mでも同時代の方形周溝墓群(昭和60年度発掘調査略報 茨木市教育委員会 昭和61年)が検出されていることから、当調査地区北東から西側にかけて方形周溝墓群が広がっている可能性が高いと思われる。また溝-1は、その連なりの方向が、東奈良遺跡で多く見られる地形の高低に沿った北西-南東でなく、ほぼ西-東であり、方形周溝墓との関係からも時期は不明であるが環濠とも考えられる。



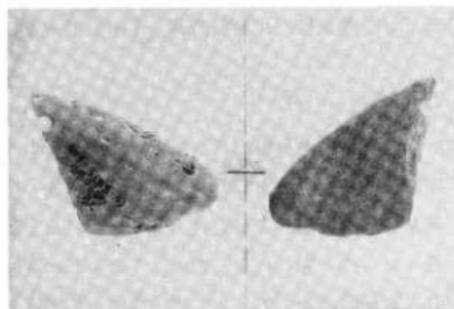
挿図-4 土馬



挿図-6 土馬



挿図-5 石包丁



挿図-7 石包丁

## VI 上穂積遺跡(88-1)

### 1. 調査経過

所在地 茨木市上穂積2丁目186-3

調査面積 33㎡

調査期間 昭和63年2月27日～同年3月4日

届出理由 共同住宅建設

昭和63年2月24日、共同住宅建設にともなう埋蔵文化財確認調査依頼を受け、試掘調査を実施した結果、現GL-1.65mから弥生時代の土器片を含む茶灰色粘土がレンズ状に堆積していたことと西側には穂積廃寺跡もあることから、発掘調査の必要があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会との協議の結果、試掘調査結果からして遺構の残存する可能性が低いため、トレンチ掘り調査を昭和63年2月27日から実施することとなった。

### 2. 層位 (図版41・42)

当調査地区の層位は、上層から造成土、耕土、青灰色砂質粘土・灰色粘土(床土)、茶灰色粘土(包含層)、淡黄白色粘質土・淡灰色砂質土(生活面)である。なお、弥生時代後期から中世の土器片を包含する茶灰色粘土層は、溝内と生活面上の一部に2cm程見られたのみである。

### 3. 遺構 (図版41・42)

当調査地区から検出された遺構は、溝2条、井戸1基、土壇1基、柱穴跡6穴であった。

溝-1は、溝肩がなだらかな2段掘りをなし、北肩は調査地区外にあり、南肩上段は北西-南東へ、下段は西-東に連なる。幅6m以上、深さ0.24mを測る溝幅に比べて非常に浅い溝で、溝内には上層が包含層と同じ茶灰色粘土、下層には灰色砂土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。

溝-2は、溝-1の南側でその痕跡程度が検出されたのみである。断面からの推定規模は、幅1.7m、深さ0.05mを測り、ほぼ西-東に連なる。溝内には

茶灰色粘土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。

井戸-1は、溝-1埋没後掘られたもので、その層位から近・現代の野井戸と思われる。推定径1.4m、断面からの推定深さ1.15m（検出時の深さ0.63m）を測る円形素掘り井戸で、井戸底は砂層であるため現在でも水がよく湧いていた。

土壌-1は、溝-1南肩に接する楕円形の土壌で、長軸1.22m、短軸0.8m、深さ0.05mと非常に浅く、土壌内には他の遺構と同じく茶灰色粘土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。

その他柱穴跡は、いずれも検出時の深さ0.05mと浅く、調査範囲の関係で建物などを復元できなかった。

#### 4. 遺物

当調査地区から検出された遺物は、総数約30点の弥生式土器・須恵器・土師器・瓦器片であった。しかし、いずれも細片で時期が判別できるものもなく、図示ができるものもなかった。

#### 5. 結語

当調査地区は、千里丘陵の東裾付近に位置し、北西200mの丘陵には飛鳥時代末期の瓦が出土した穂積廃寺跡、西300mの丘陵には古墳時代後期の見付山古墳、北の丘陵沿いには郡遺跡が広がっている。これらの環境から、遺構の検出を期待したが、周辺の遺跡の検出状況と比較して、当調査地区から検出された遺構がいずれも規模に比較して浅く、遺物も少ないことから近世頃に削平されたものと考えられる。



挿図-8 穂積廃寺跡を望む

## Ⅶ 中条小学校遺跡(88-1) (88-1)

### 1. 調査経過

所在地 茨木市新中条町5丁目19番

調査面積 170㎡

調査期間 昭和63年9月26日～同年10月12日

届出理由 共同住宅建設

昭和62年4月17日、共同住宅建設にともなう埋蔵文化財確認調査依頼を受けて試掘調査を実施した結果、現GL-0.5mにこの付近の生活面である黄色粘質土を検出した。遺物・遺構は検出されなかったものの、東側の中条小学校の校舎・グラウンドから包含層はないが、遺構を検出していることから発掘調査の必要があることを依頼者に報告する。その後、共同住宅建設計画は中断していたが、再び建設が行われることになったため、協議の結果昭和63年9月26日から発掘調査を実施することになった。

### 2. 層位 (図版41・42)

当調査地区は、以前に平屋木造住宅が3棟建っていたため、かなり攪乱を受けていた。層位は、試掘調査でも確認されていたように、上層より造成土、耕土、淡茶灰色砂質土(包含層)、黄色粘質土(生活面)である。包含層はほとんど残っておらず、一部に厚さ2cm程のものであった。

### 3. 遺構 (図版41・42)

当調査地区から検出された遺構は、土壇7基、溝2条、柱穴跡約60穴であった。その遺構も一部が、平屋木造住宅の便槽・下水管・水道管によって破壊されていた。

#### 土壇

土壇-1は、長軸1.46m、短軸1.2m、深さ0.47mを測るすりばち状楕円形の土壇である。土壇内には、茶褐色砂質粘土が堆積し、弥生時代中期から後期の土器片が検出された。

土壇-2は、周囲を下水管・水道管によって攪乱を受けており形態・規模は明確でないが、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.35mのすりばち状楕円形土壇と推定される。土壇内には、茶灰色粘質土が堆積し、上層に土器溜め状に弥生時代中期から後期の土器片が検出された。その出土状況から、土壇埋没後に壊れた土器を投棄したものと思われる。

土壇-6は、土壇が重複しており、西側の土壇を東側が切っている。東側土壇は、隅丸長方形の長辺0.7m、短辺0.36m、深さ0.4mを測り、茶褐色粘土が堆積し、弥生式土器片が検出された。西側の土壇は、径0.6m、深さ0.2mの円形土壇と推定される。土壇内には、同色の粘土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。

土壇-7は、ややゆがんだすりばち状楕円形の長軸1.6m以上、短軸0.7m、深さ0.15mを測り、西側を柱穴跡によって切られている。土壇内には、茶灰色粘質土が堆積し、弥生時代中期の土器片と石鏝が検出された。

#### 溝

溝-1・2は、いずれも約2.3mの間隔をもってほぼ南北に連なっていたものと思われるが、削平によって一部が消失している。溝-1は、幅0.54m、深さ0.03m、溝-2は同じく0.5~0.7m、0.03~0.05mを測り北より南へ僅かに低くなっている。いずれも、溝内に灰色砂質土が堆積していたが、遺物は検出されなかった。

#### 柱穴跡

柱穴跡は、径0.1~0.4m、深さ0.1~0.35mを測る円形のもので、約60穴の内、14穴から弥生時代中期から平安時代後期の土器片が検出された。しかし、調査地区内では建物などは復元できなかった。

## 4. 遺物

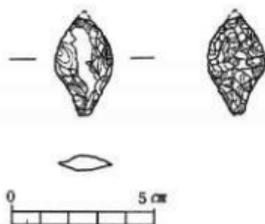
当調査地区からは、コンテナバットに1箱の土器片が検出されたが、いずれも細片であり、摩耗・風化が著しく復元・図示できるものは、土壇-7検出の石鏝1点のみであった。

石鏝 挿図-9は、凸基有茎式の断面扁平な菱形をなす。法量は、先端が欠損するが、長さ3.45cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、12.5gを測るサスカイト製であ

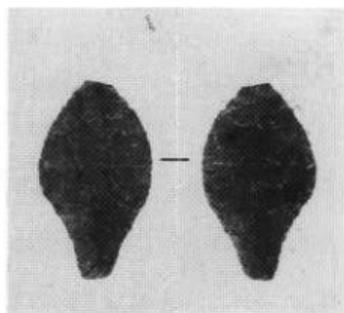
る。

## 5. 結 語

当調査地区からは、かなり削平を受けているものの、遺構は多く検出された。しかし、遺構の関係・性格を把握できるものはなかったが、今後この付近の調査が進むにつれて、中条小学校遺跡が解明されるものと思われる。



挿図-9 石鏃



挿図-10 石鏃



圖

版

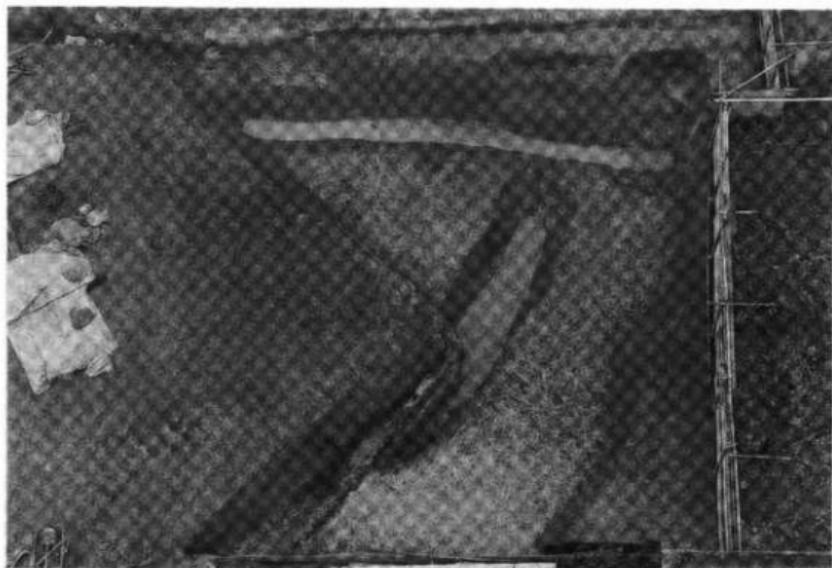




東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 全景(北から)



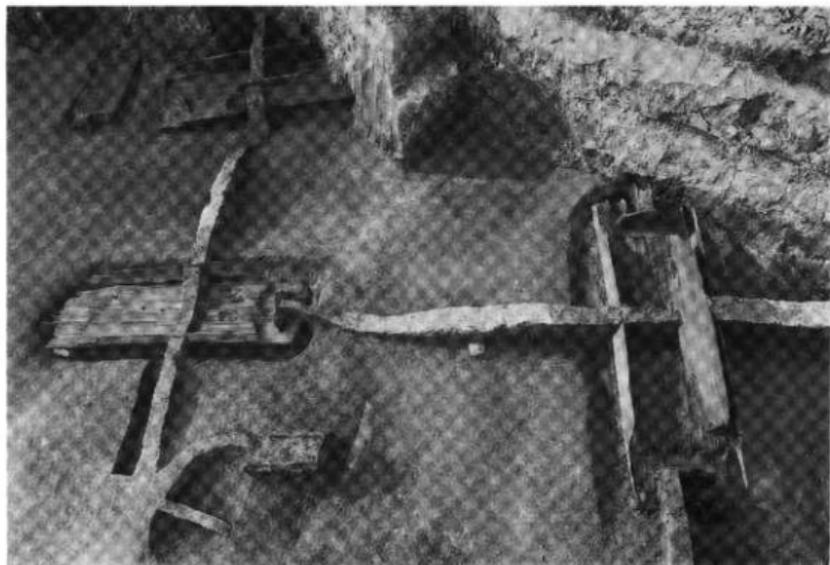
東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A)(南から)



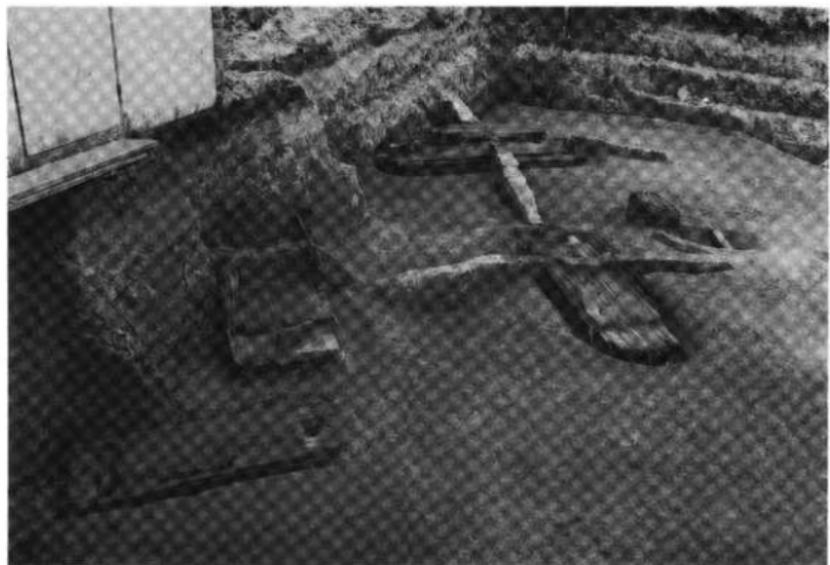
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 溝-1・2・3・4 (西から)



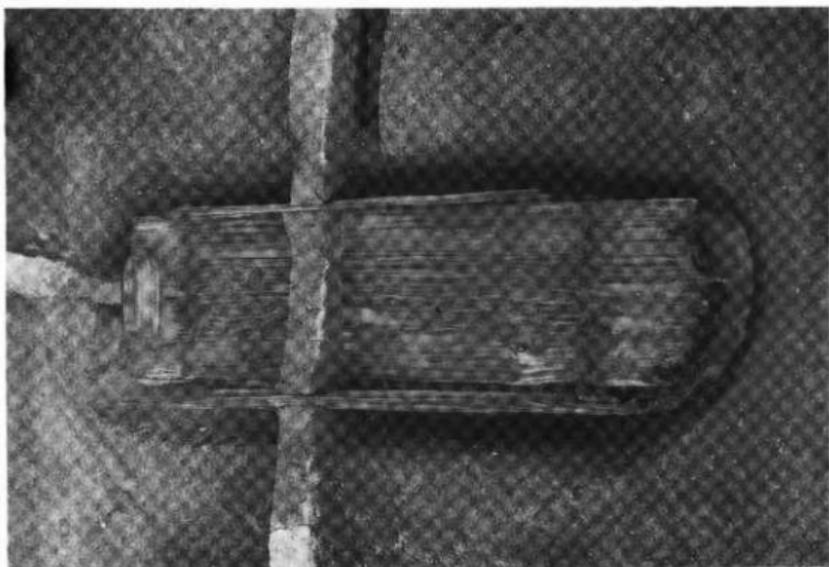
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 溝-1 杭列



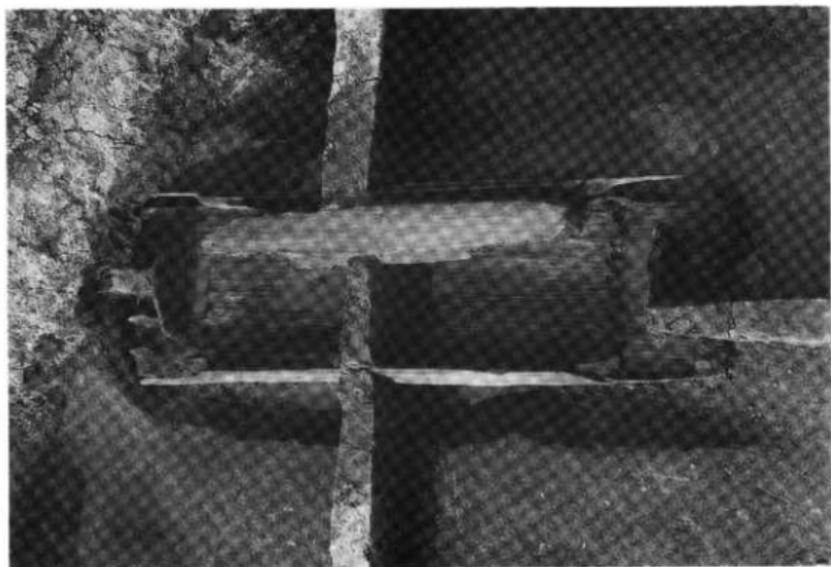
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓群(南東から)



東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓群(西から)



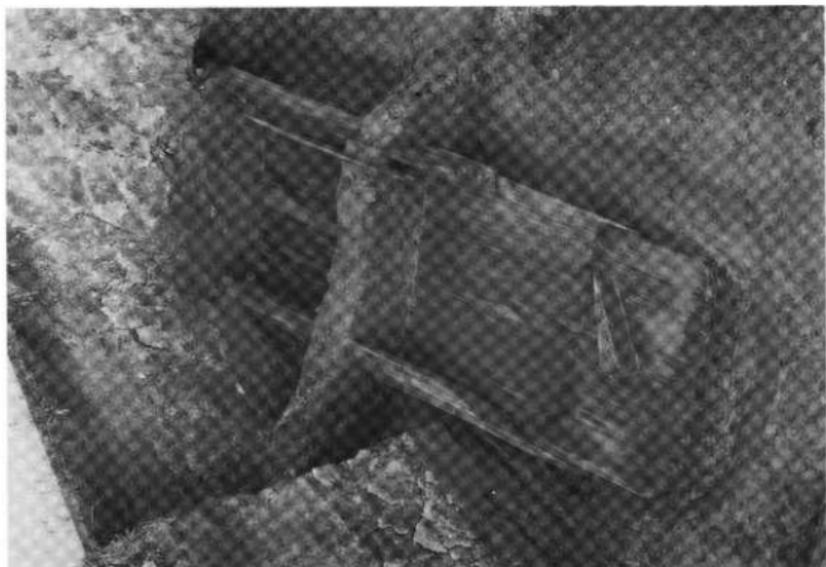
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-1



東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-2



東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-3



東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-4



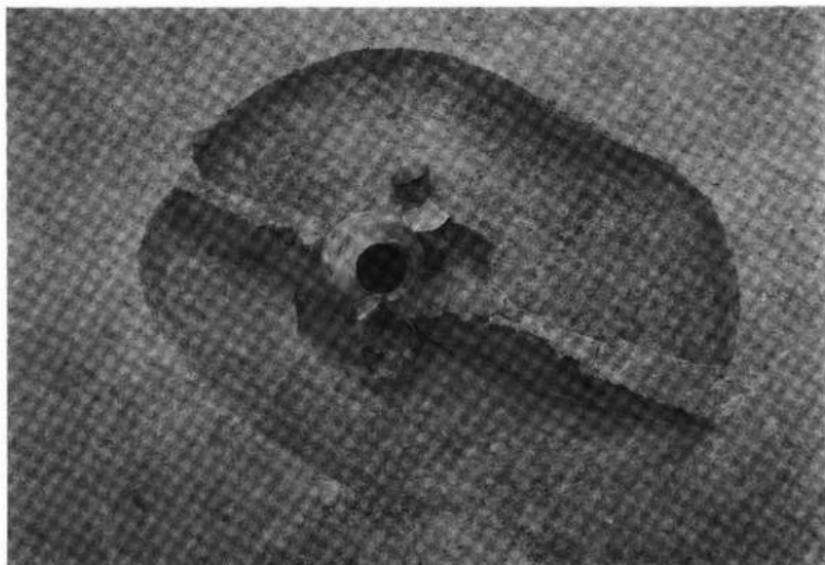
東奈良遺跡(88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 全景(東から)



東奈良遺跡(88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 住居跡(南から)



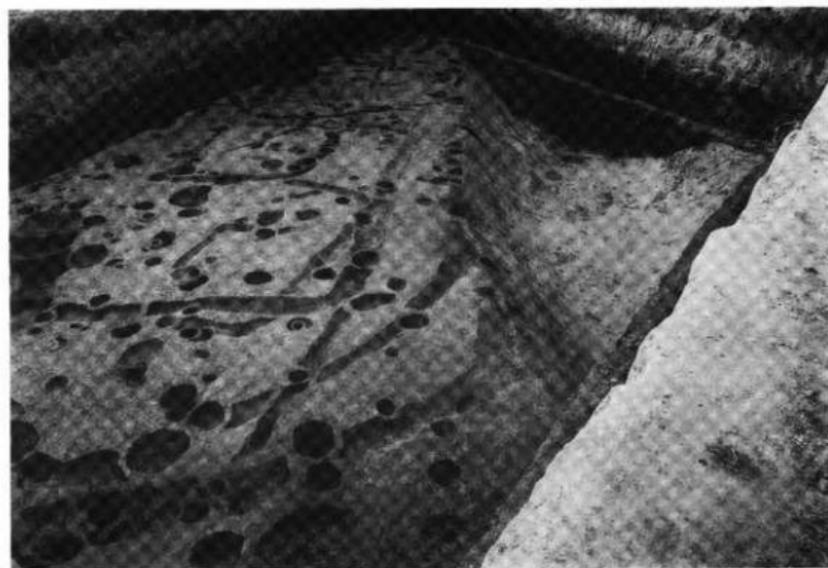
東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 土器溜り



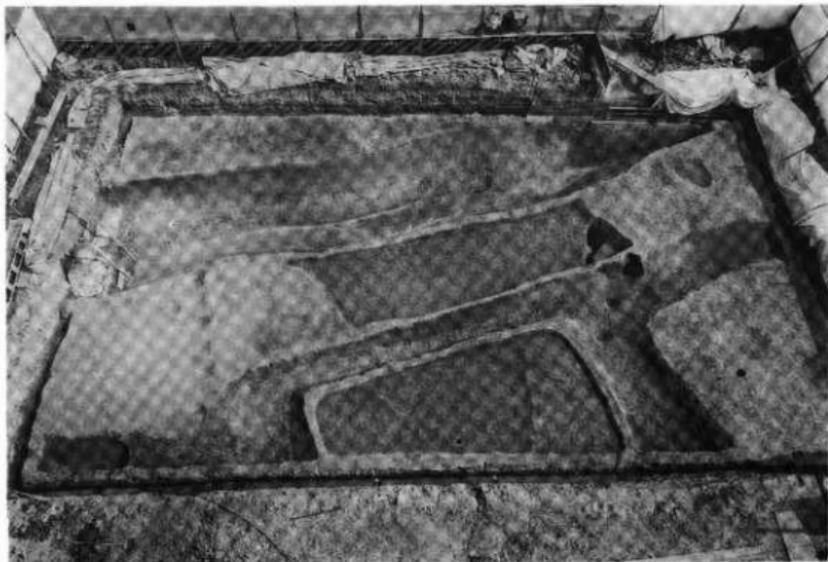
東奈良遺跡(88-2) H・N I-4-B・C・F・G地区 土塊-1



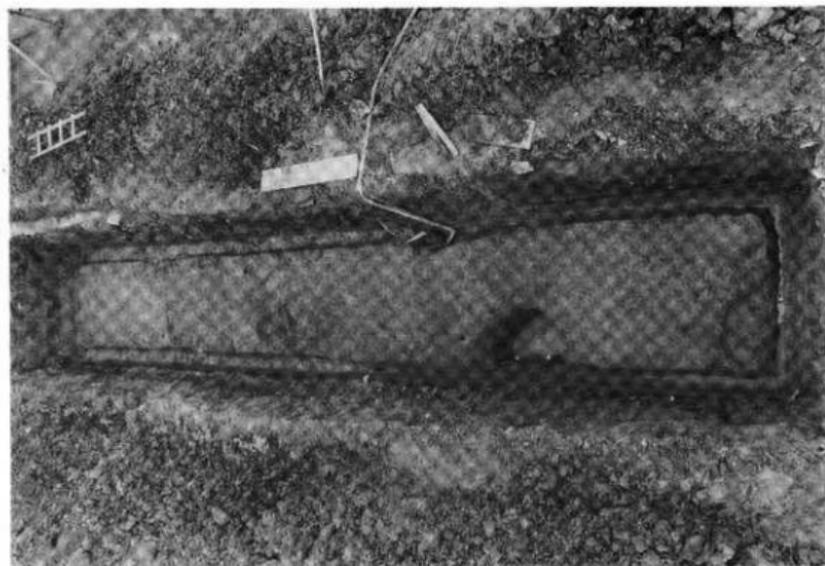
東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 全景(北から)



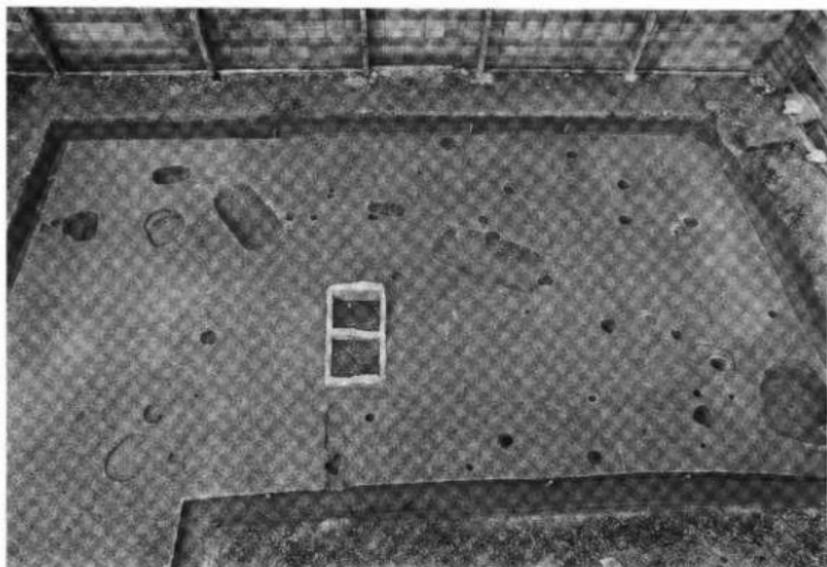
東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 全景(南から)



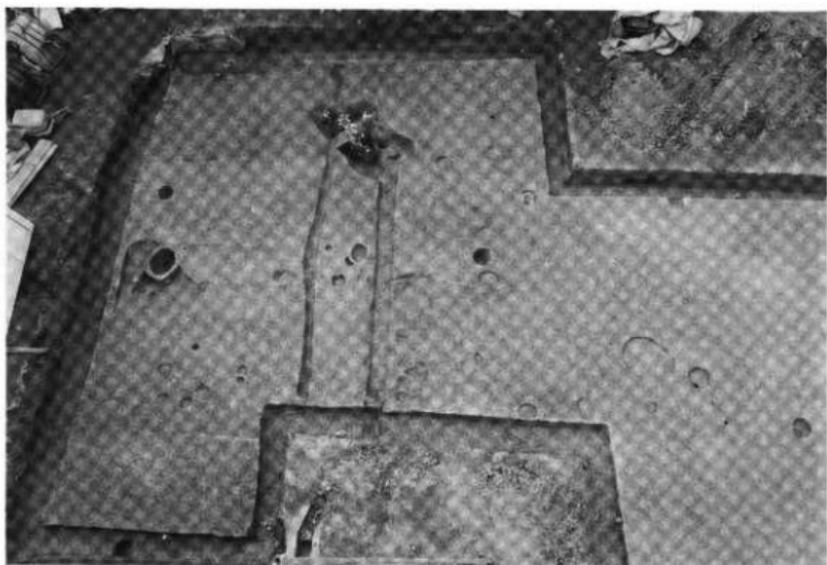
東奈良遺跡(88-4) H・N B-5-M・N地区 全景(北から)



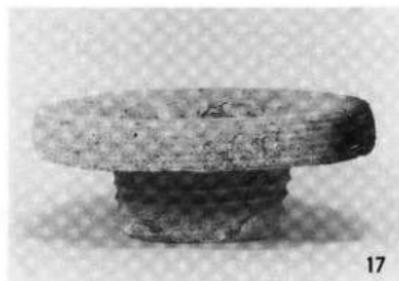
上穂積遺跡(88-1) 全景(北から)



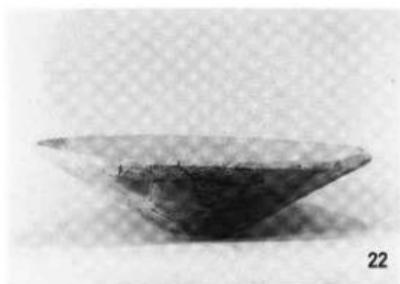
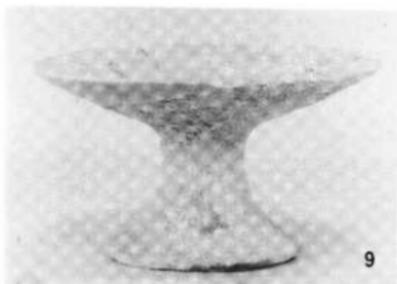
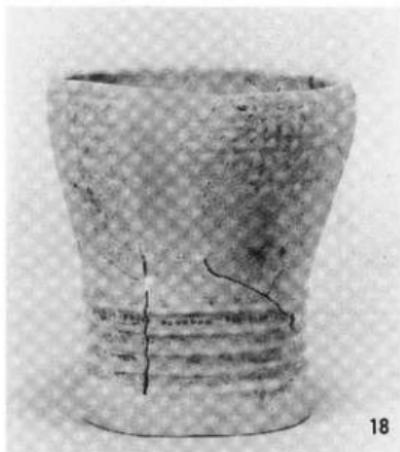
中条小学校遺跡 (88-1) 全景 (南から)



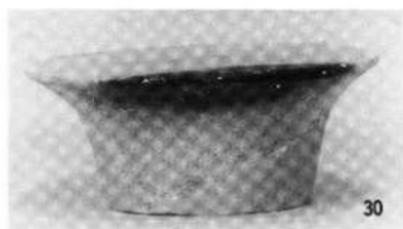
中条小学校遺跡 (88-1) 全景 (東から)



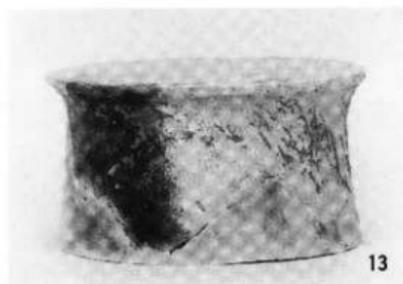
東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器



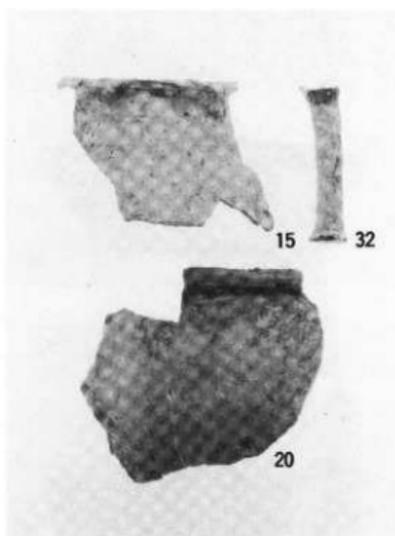
東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器



30



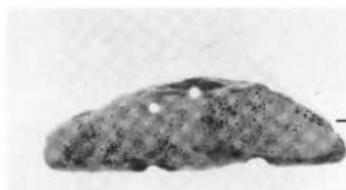
13



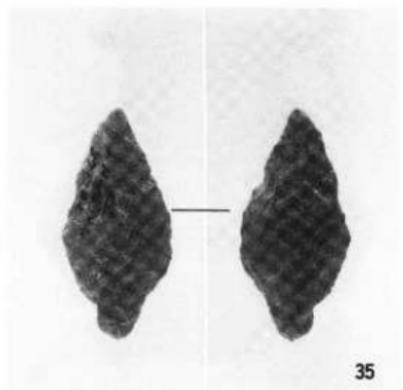
15

32

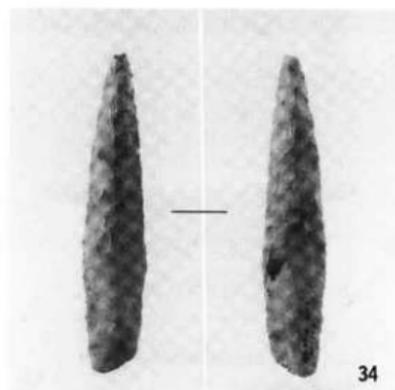
20



33



35

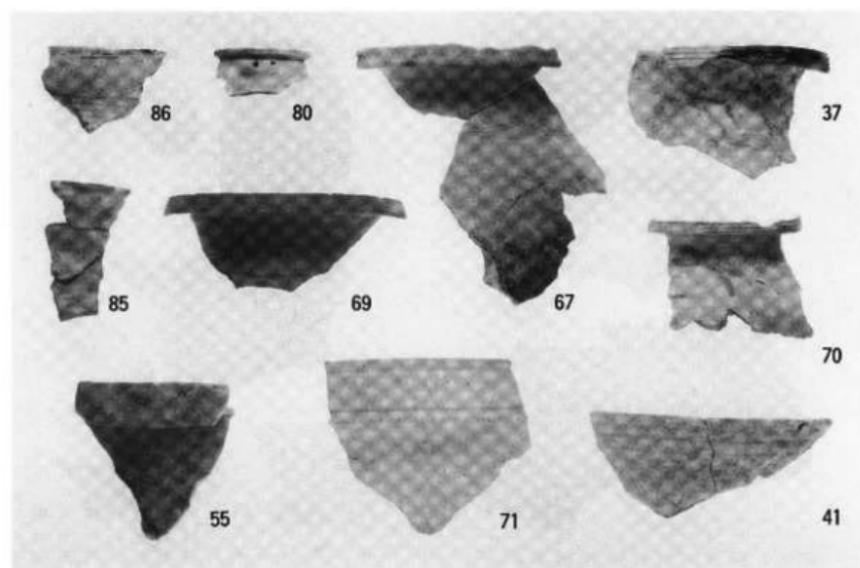


34

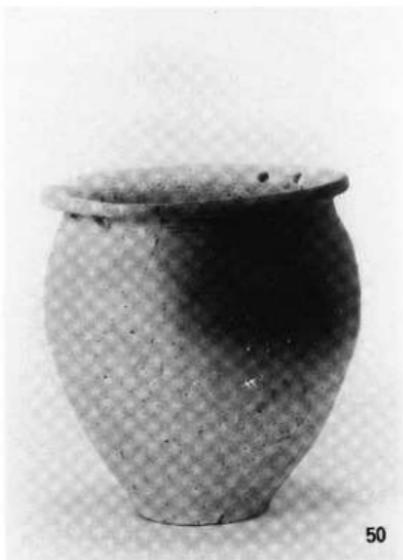
東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 包含層、溝-1・1(A) 出土の土器・石器



東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2出土の土器



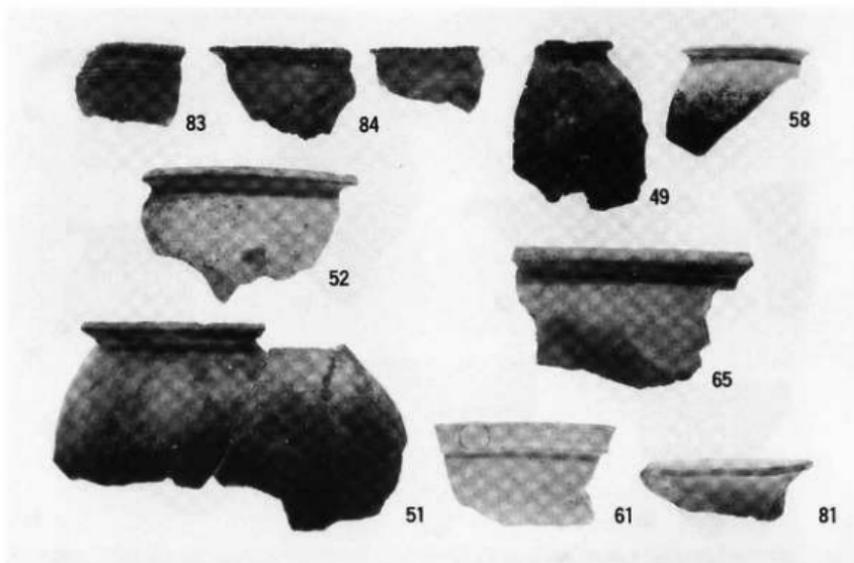
東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4出土の土器



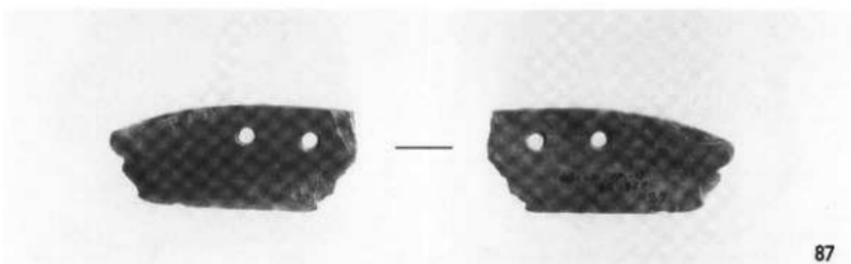
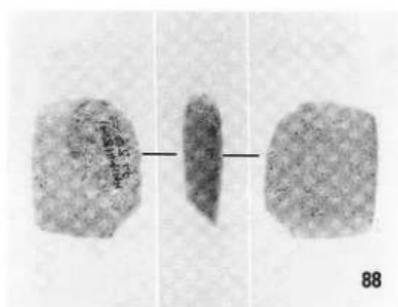
50



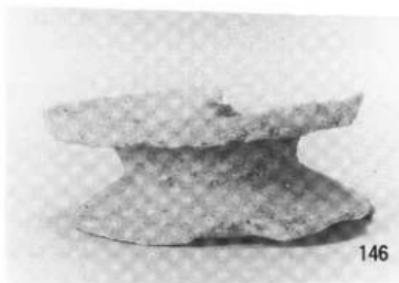
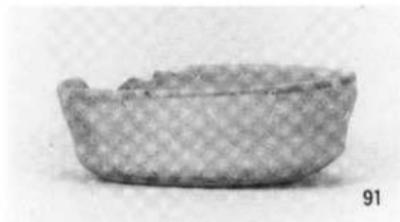
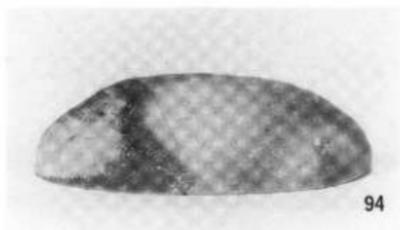
57



東奈良遺跡 (88-1) H-N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4出土の土器



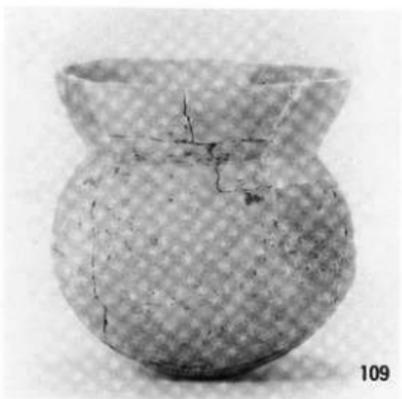
東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1、木官墓-4出土の土器・石器



東奈良遺跡 (88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 包含層、土壇-1、P-4、  
溝-1、土器溜り出土の土器

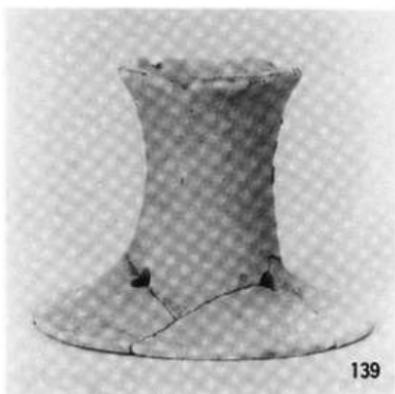


東奈良遺跡 (88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 溝-1出土の土器

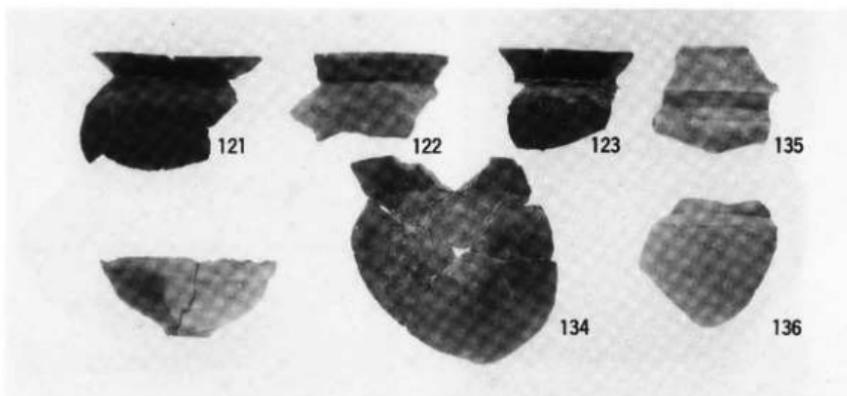
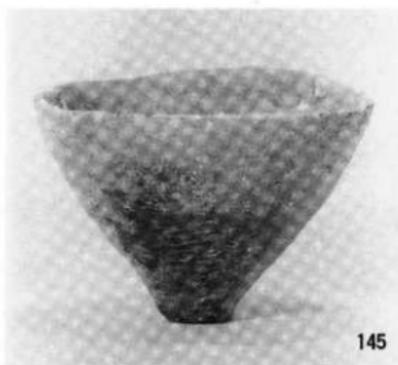
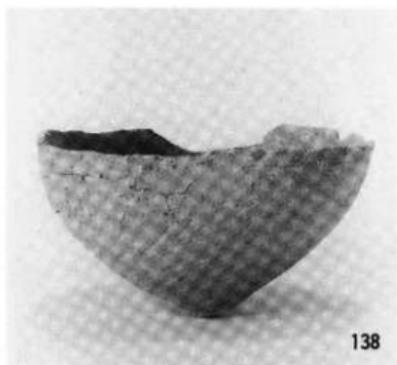
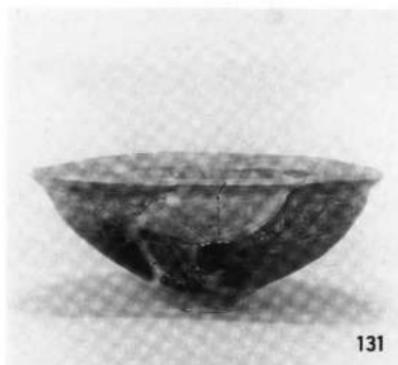




東奈良遺跡 (88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 溝-1出土の土器



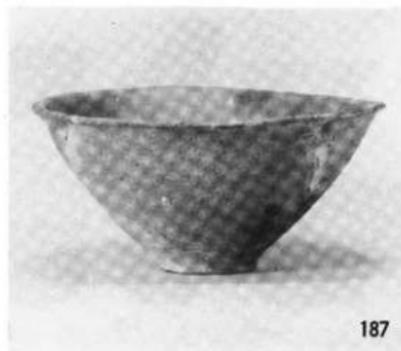
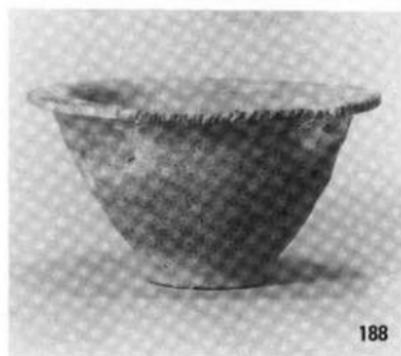
東奈良遺跡 (88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 溝-1出土の土器



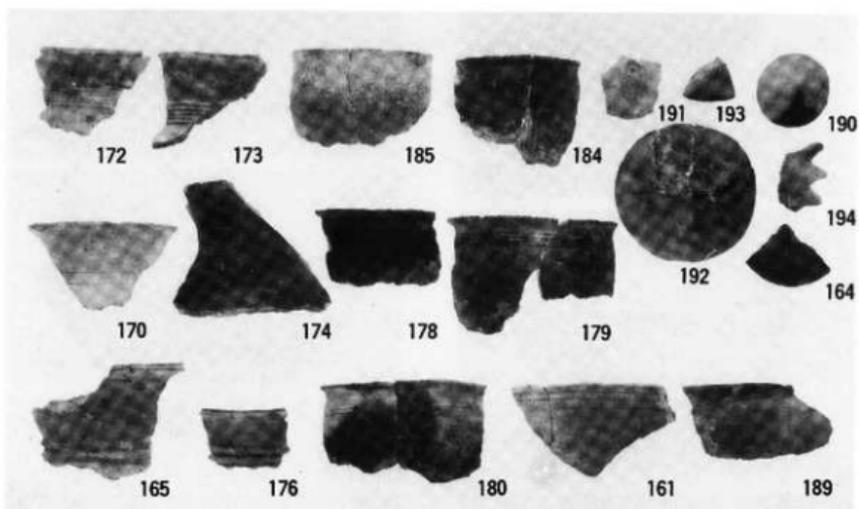
東奈良遺跡 (88-2) H・N 1-4-B・C・F・G地区 溝-1・2出土の土器



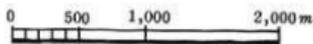
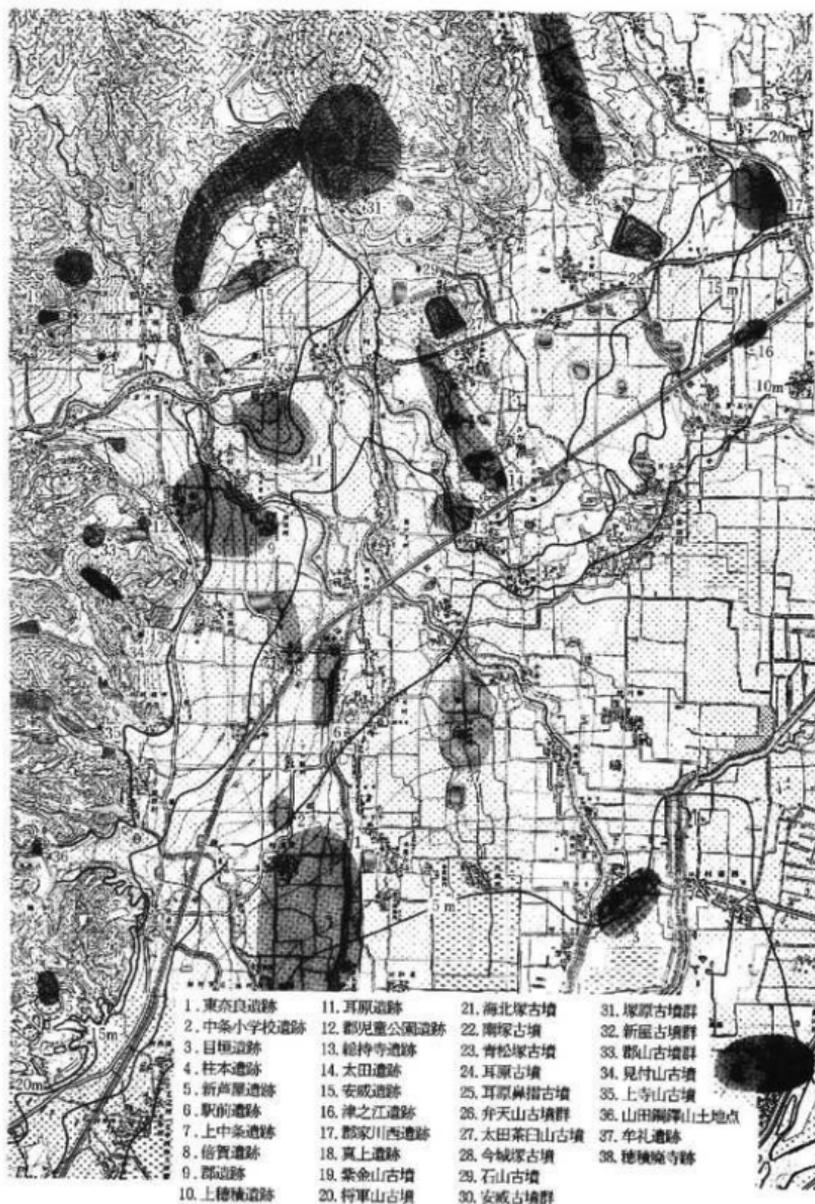
東奈良遺跡 (88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器



東奈良遺跡 (88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器



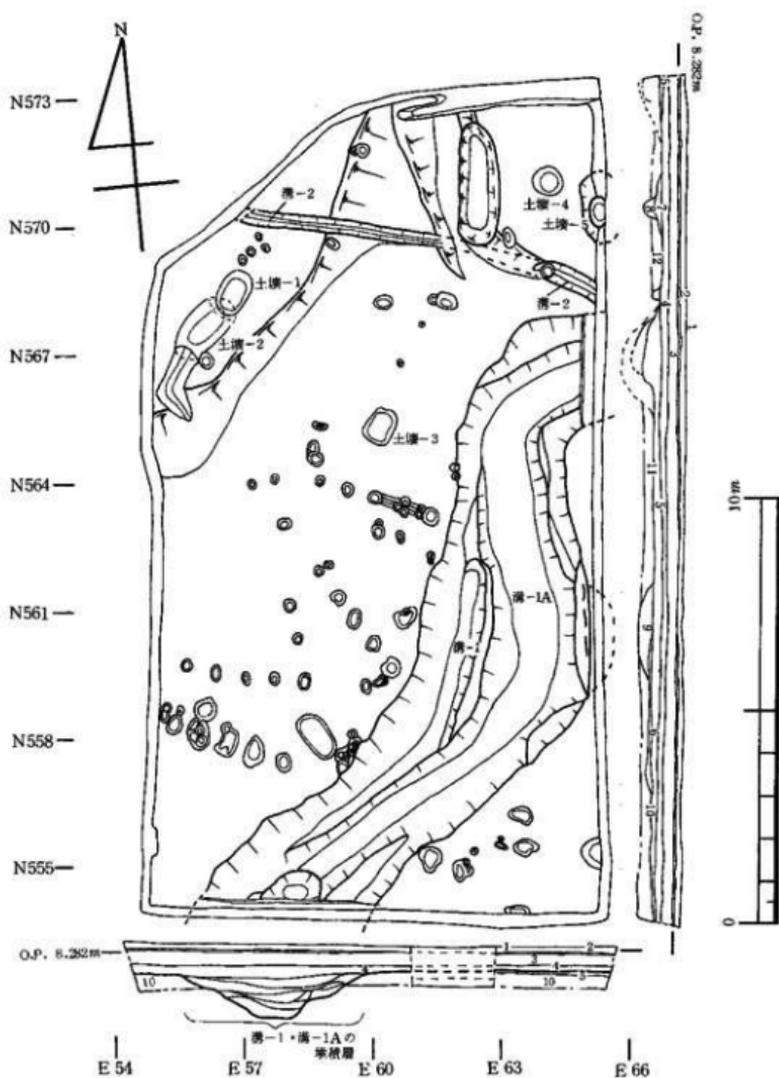
東奈良遺跡 (88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器



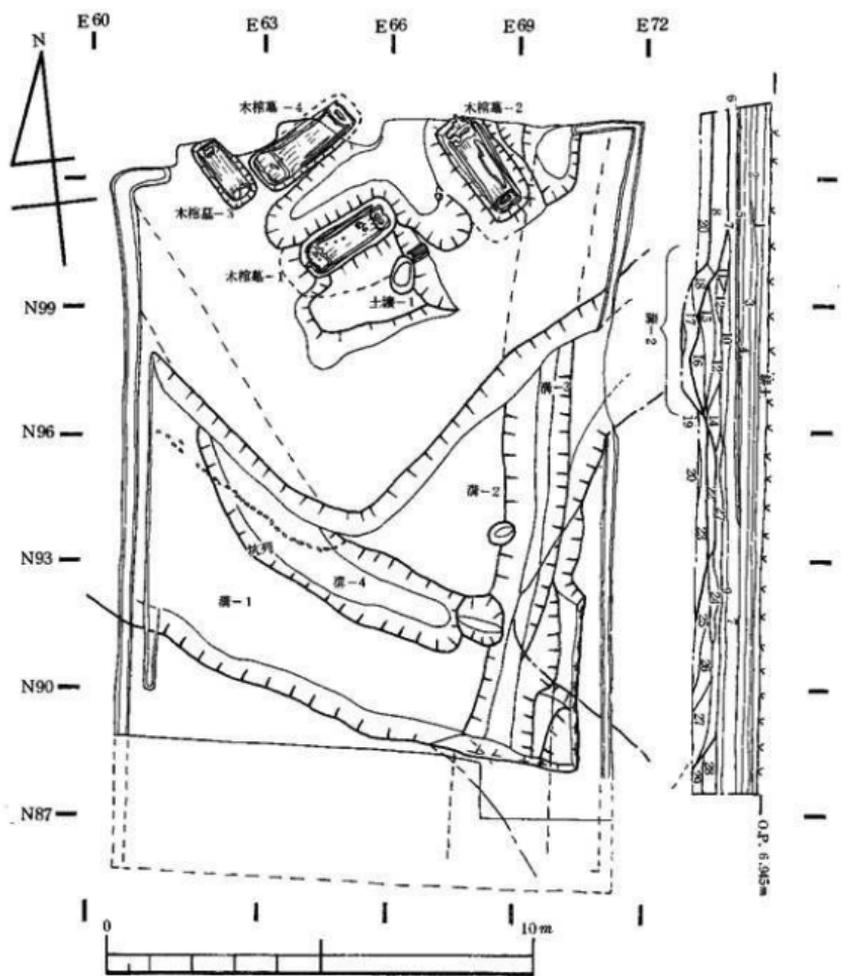
茨木市の遺跡



各調査地区位置図

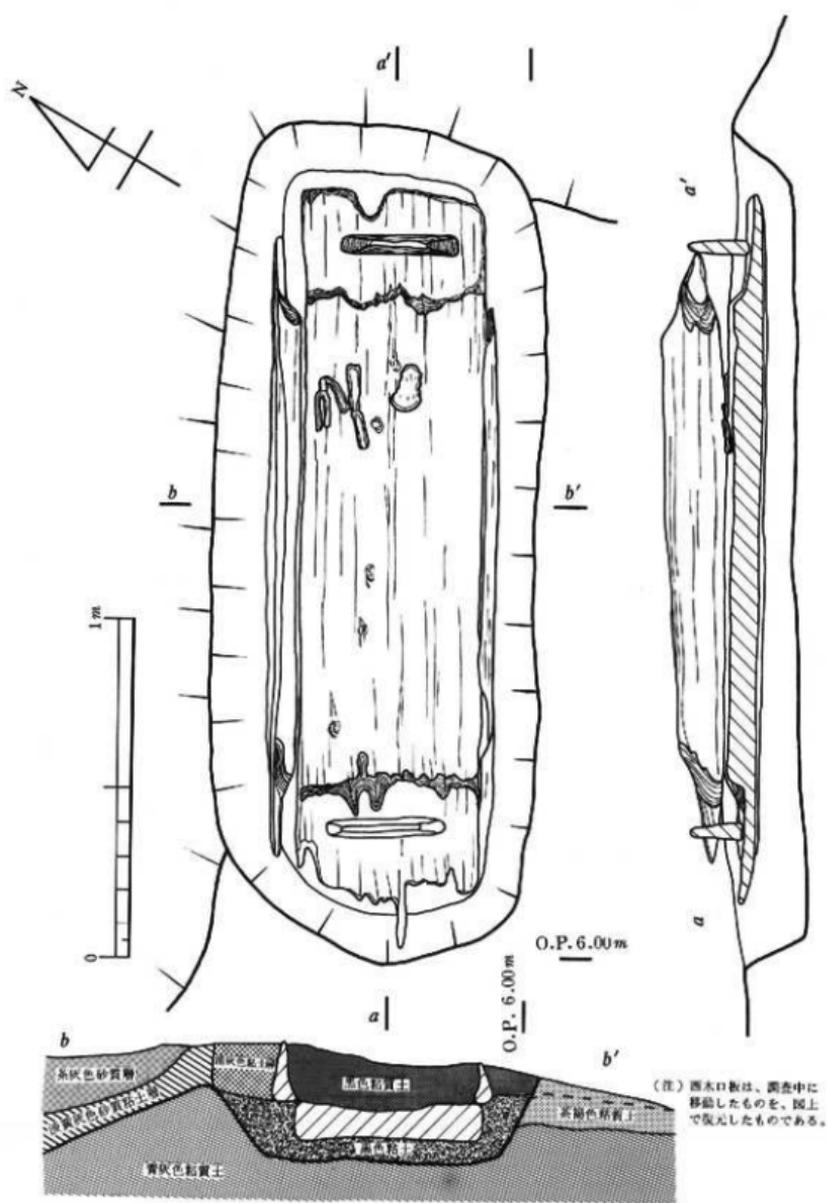


- |                  |                            |
|------------------|----------------------------|
| 1. 耕土            | 7. 黄色砂礫層                   |
| 2. 淡茶灰色砂層        | 8. 灰色粘質土層                  |
| 3. 淡灰黄色粘質土層      | 9. 黄色砂層と灰色砂層の互層 (溝-1Aの堆積層) |
| 4. 茶灰色粘質土層 (包含層) | 10. 黄灰色粘質土層 (一部砂礫質粘土層)     |
| 5. 茶灰色砂礫層 (包含層)  | 11. 赤黄色砂質層                 |
| 6. 灰色粘土層         | 12. 茶色砂質層                  |

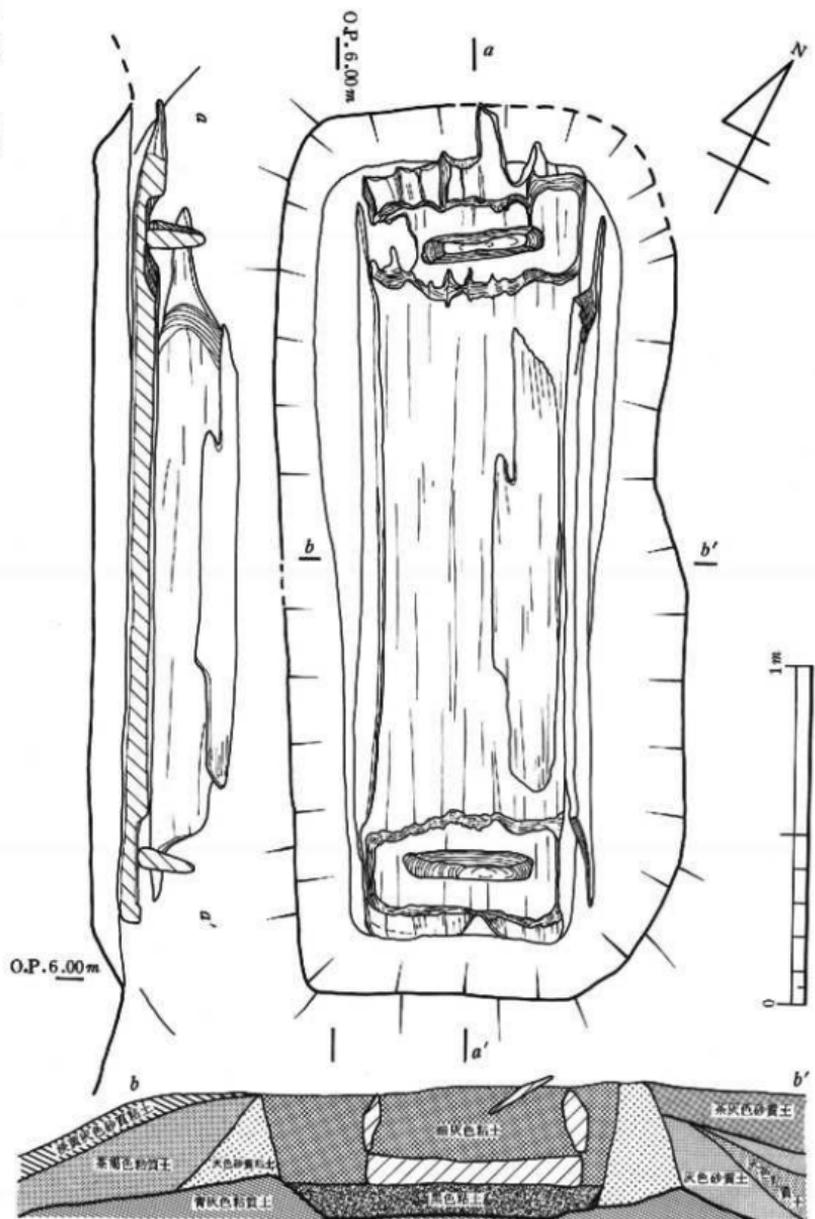


- |                     |                  |                   |
|---------------------|------------------|-------------------|
| 1. 淡茶灰色砂質層          | 11. 暗灰色粘土層       | 21. 黄褐色砂質層        |
| 2. 灰色砂質層 (床土、鉄分を含む) | 12. 暗黑色粘土層       | 22. 茶灰色粘質土層 (包含層) |
| 3. 茶灰白色砂質層 (床土)     | 13. 灰色微砂層        | 23. 灰褐色粘土層 (地山)   |
| 4. 黄灰色砂質層           | 14. 灰白色砂層        | 24. 黄灰色砂層         |
| 5. 淡灰色粗砂質層          | 15. 白濁色砂層        | 25. 灰色砂層          |
| 6. 黄白色粘土層           | 16. 淡灰白砂層        | 26. 黄白色砂層         |
| 7. 茶灰色粘質土層 (包含層)    | 17. 暗黑色粘土層       | 27. 淡灰色砂層         |
| 8. 灰褐色粘質土層 ( " )    | 18. 灰白色粘土層       | 28. 灰色砂層          |
| 9. 茶灰色砂質層 ( " )     | 19. 赤黄色砂層        | 29. 灰白色砂層         |
| 10. 灰白色粘土層          | 20. 青灰色粘質土層 (地山) |                   |

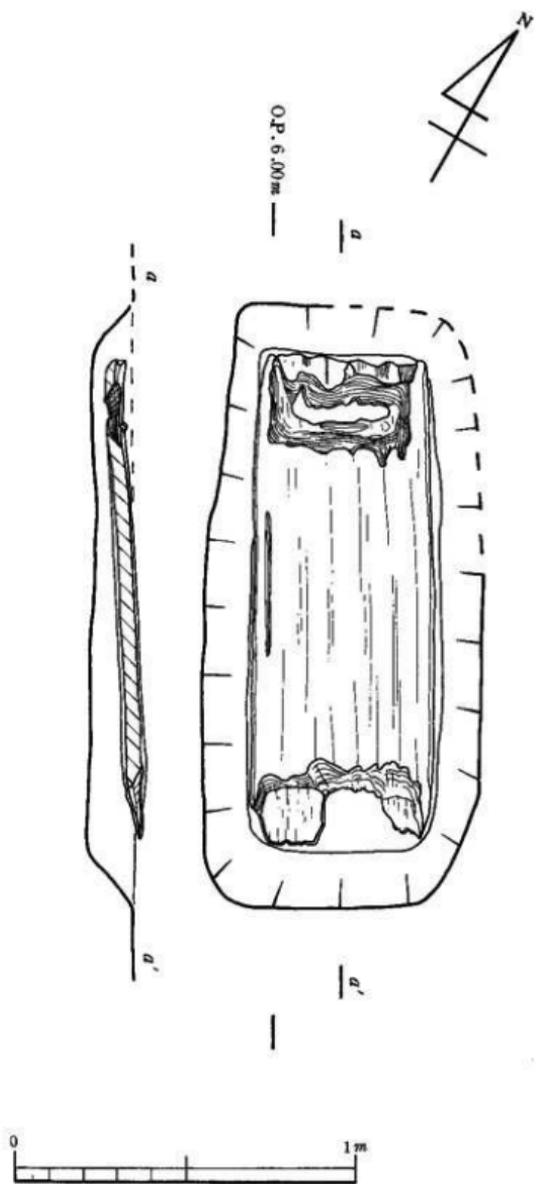
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区



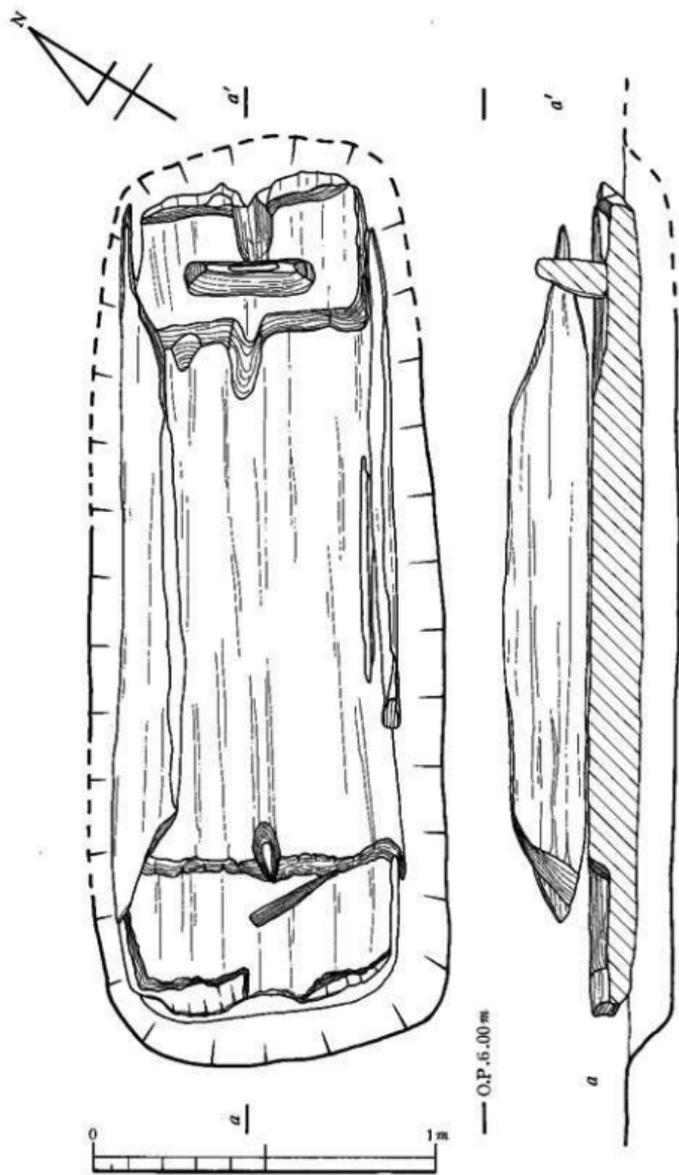
東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-1



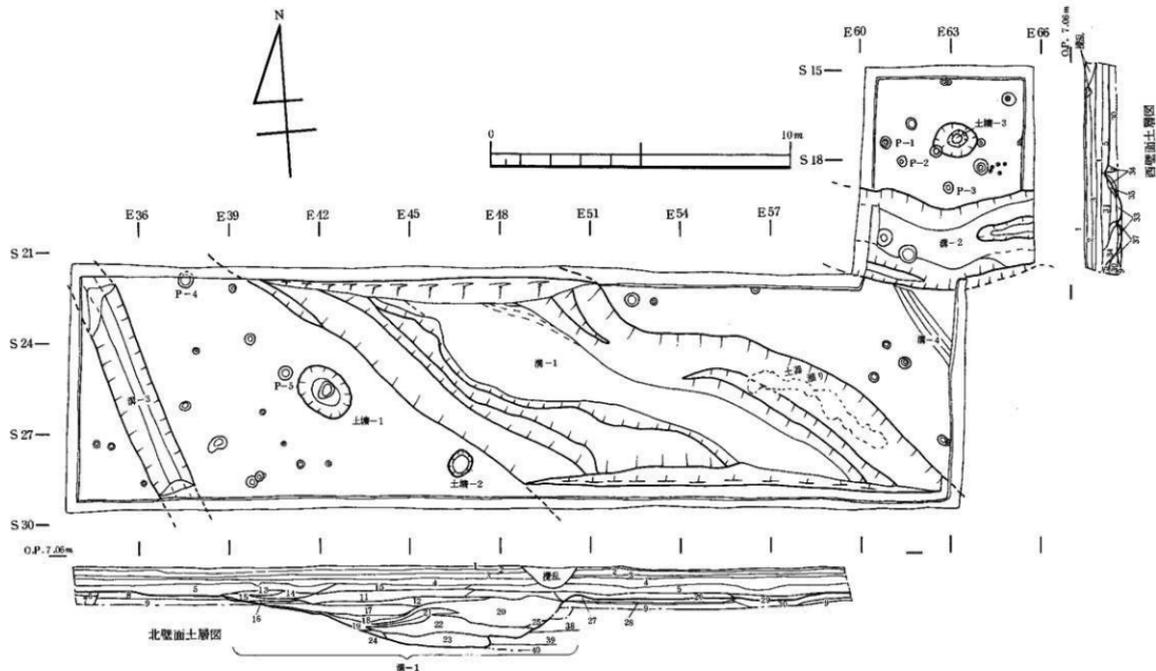
東奈良遺跡 (88-1) H・N H-4-C地区 木棺-2



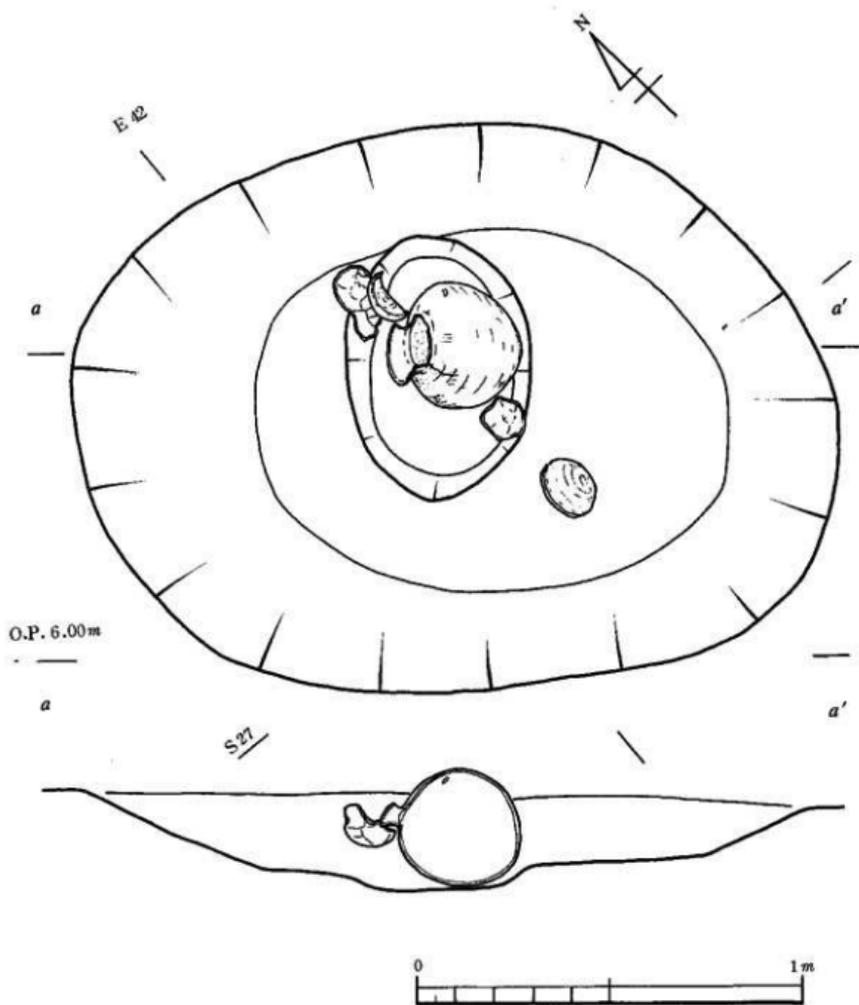
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-3

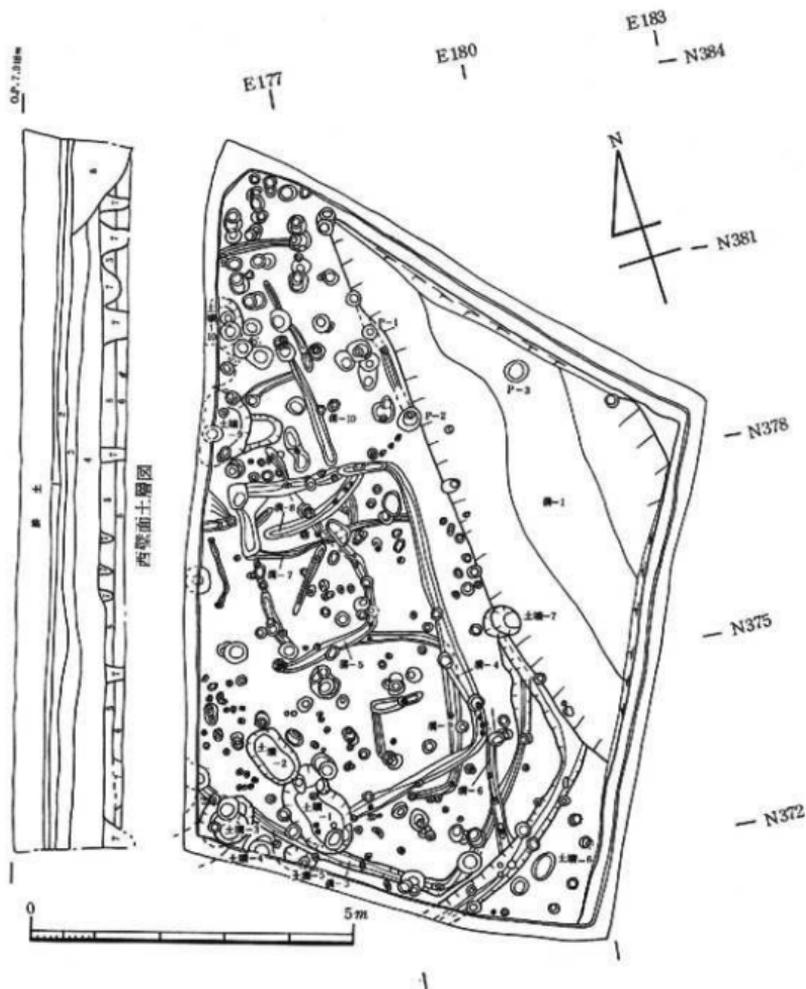


東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 木棺墓-4

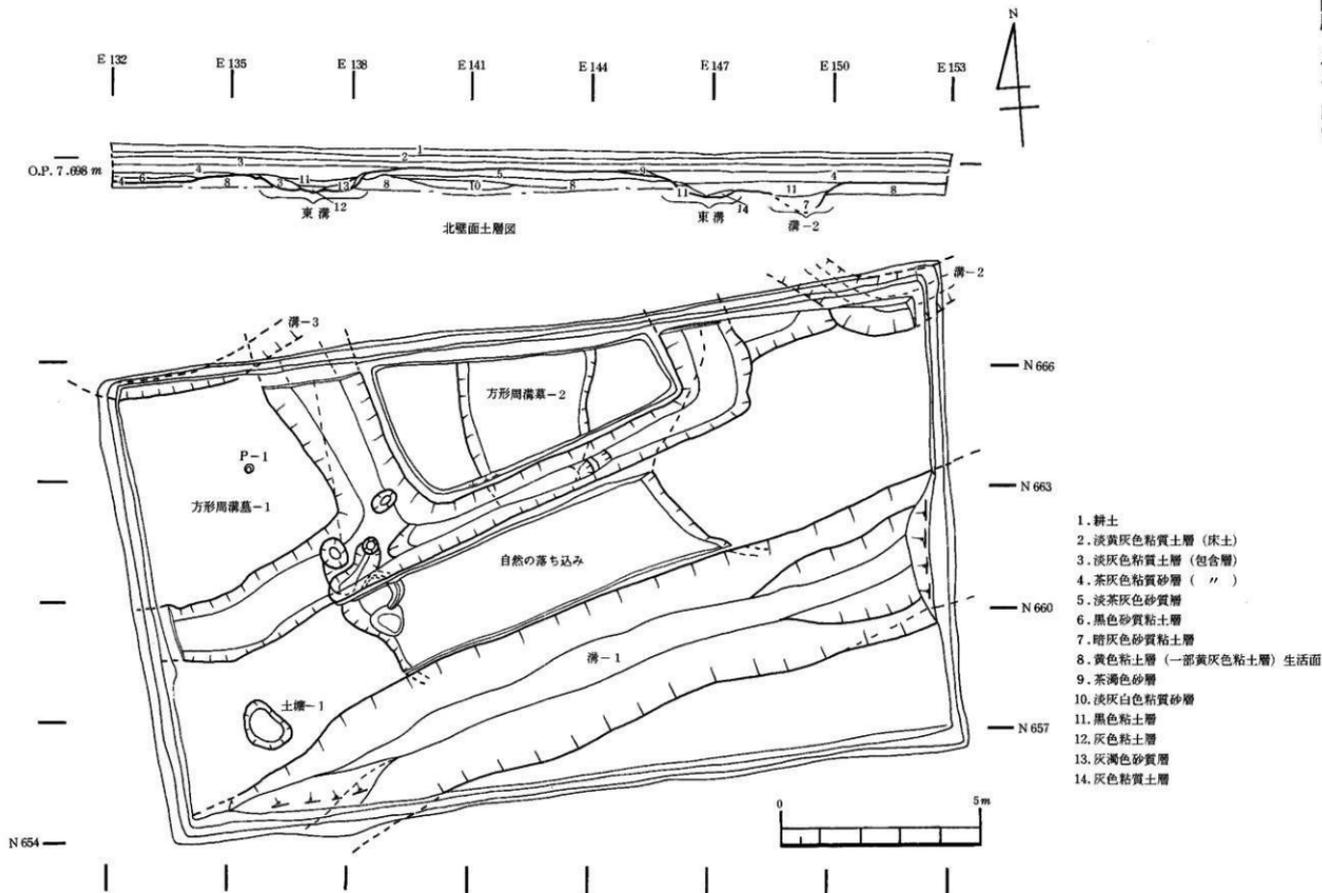


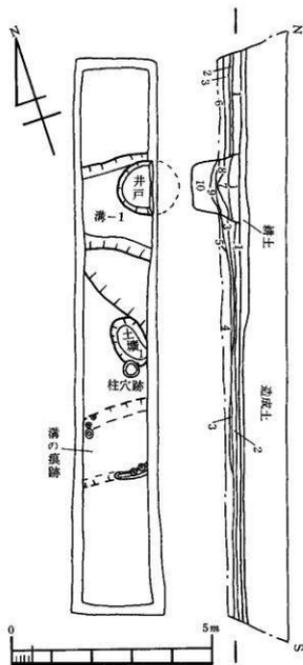
- |             |                     |                         |             |                   |
|-------------|---------------------|-------------------------|-------------|-------------------|
| 1. 耕土       | 10. 茶灰色粗砂層          | 19. 灰色砂層と灰色粘土層の互層       | 28. 黄色粗砂層   | 37. 灰青色粘土層 (地山)   |
| 2. 黄灰色砂質土層  | 11. 黄色、白色砂層の互層      | 20. 灰色砂層と灰色粘質土層、植物遺体の互層 | 29. 灰褐色砂質層  | 38. 黒色粘土層 (地山)    |
| 3. 淡灰色砂質土層  | 12. 淡灰色砂層           | 21. 灰白色砂層               | 30. 淡黄灰色砂質層 | 39. 灰青色砂質層 (地山)   |
| 4. 茶灰色砂質粘土層 | 13. 黄白色粘土層          | 22. 灰白色粗砂層              | 31. 茶褐色砂層   | 40. 灰青色微砂層 (地山)   |
| 5. 茶灰色砂質層   | 14. 淡灰黄色砂質層         | 23. 灰色粗砂層 (暗灰色粘土層を含む)   | 32. 淡茶灰色砂質層 | さらに下層は、粗い灰色粗砂層が続く |
| 6. 灰色砂層     | 15. 淡灰色粘質土層         | 24. 青灰色粗砂層              | 33. 赤褐色粗砂層  |                   |
| 7. 黄色砂層     | 16. 淡灰色粘質土層と植物遺体の互層 | 25. 暗灰色粘土層              | 34. 淡茶灰色砂層  |                   |
| 8. 淡灰色砂質層   | 17. 黄色、白色砂層の互層      | 26. 淡灰黄色砂質層             | 35. 茶褐色砂層   |                   |
| 9. 黄白色粘質土層  | 18. 灰色砂層            | 27. 淡灰色粘土層 (生活面)        | 36. 灰褐色粘質土層 |                   |



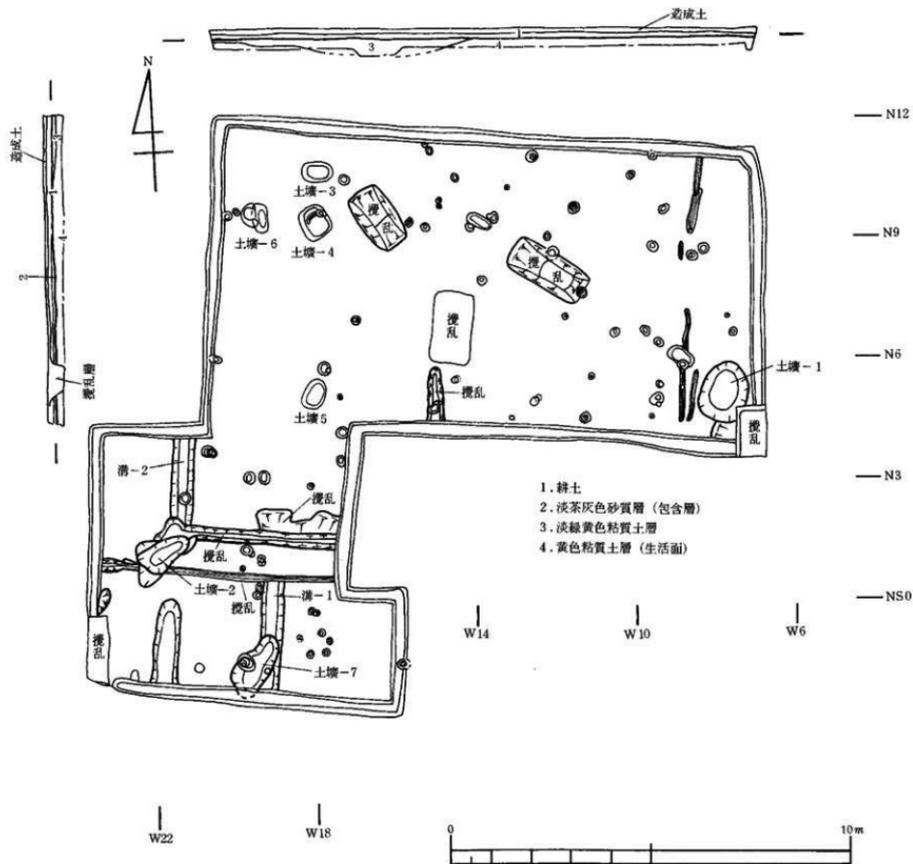


1. 淡茶灰色砂質層
2. 灰褐色砂質層
3. 淡茶灰色砂質土層 (包含層)
4. 黒灰色粘質土層 (包含層)
5. 灰黄色砂質層 (黒色粘質土と黄色土が混った土、一時期の生活面)
6. 黄色粘質土層 (生活面)
7. 黒色粘質土層と灰褐色粘質土層
8. 暗灰色砂質粘土層

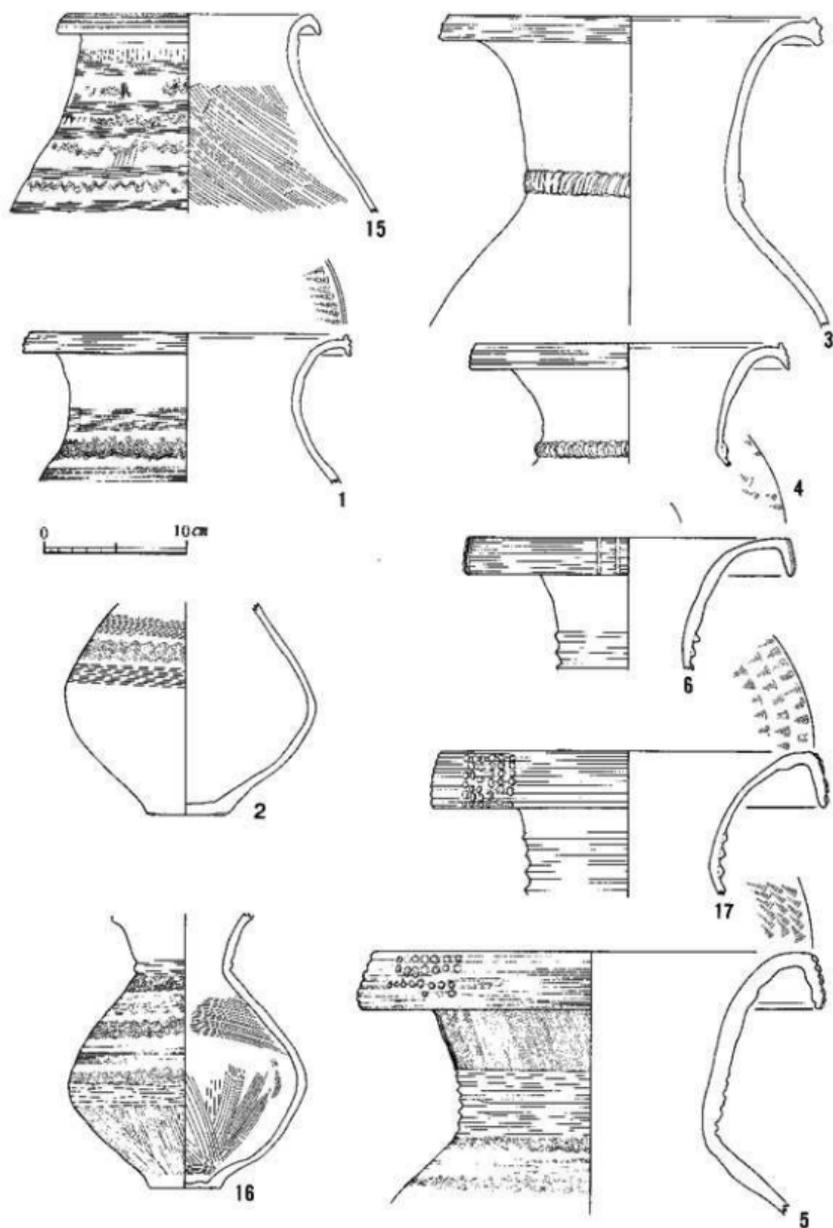




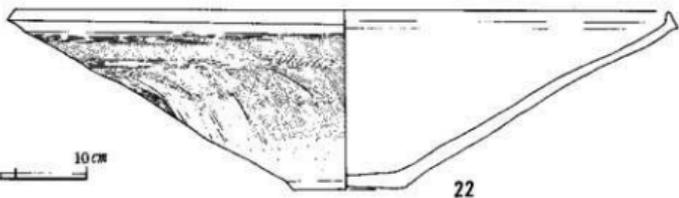
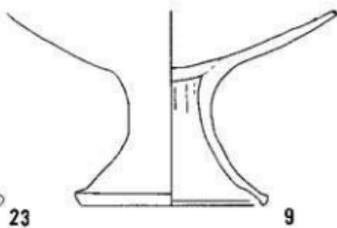
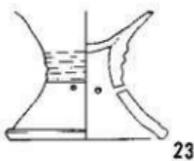
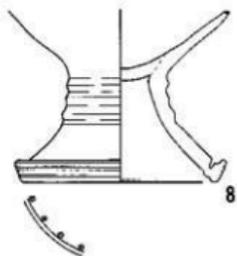
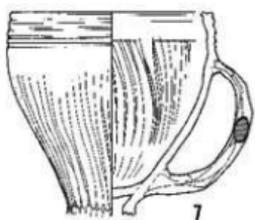
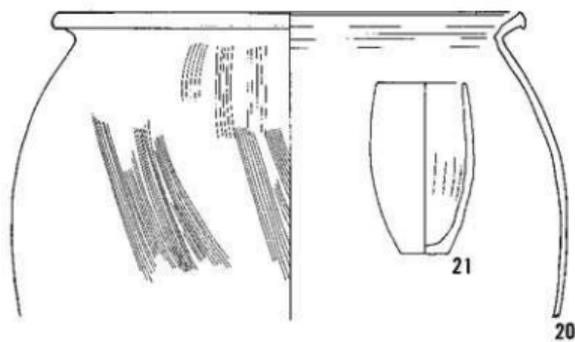
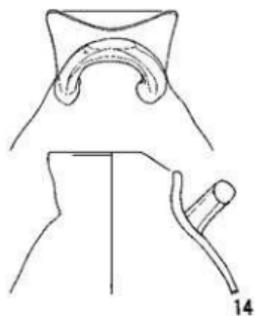
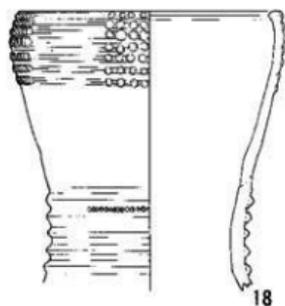
1. 青灰色砂質粘土層
2. 灰色粘土層
3. 茶灰色粘土層
4. 淡黃白色粘質土層 (地山)
5. 灰色砂層
6. 淡灰色砂質層 (地山)
7. 灰色砂質層
8. 灰色粘土層 (鐵分多)
9. 青灰色砂礫層
10. 暗灰色粘土層



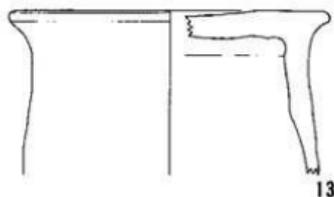
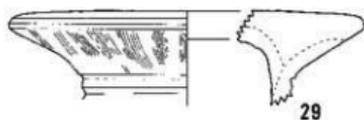
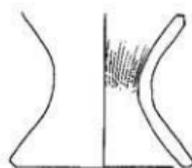
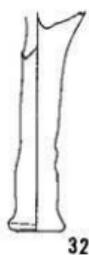
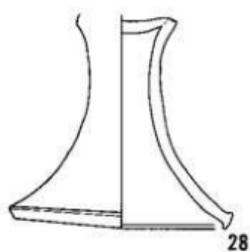
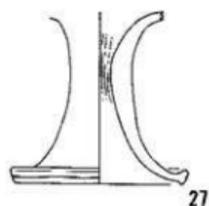
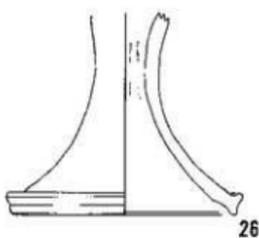
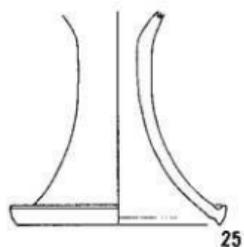
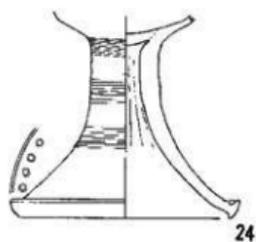
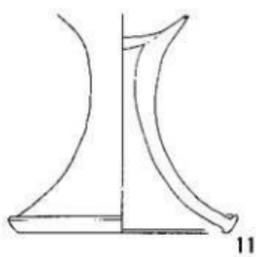
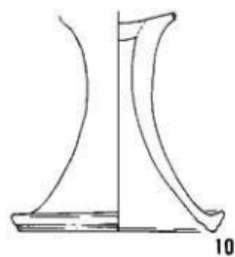
1. 耕土
2. 淡茶灰色砂質層 (包含層)
3. 淡綠黃色粘質土層
4. 黃色粘質土層 (生活面)



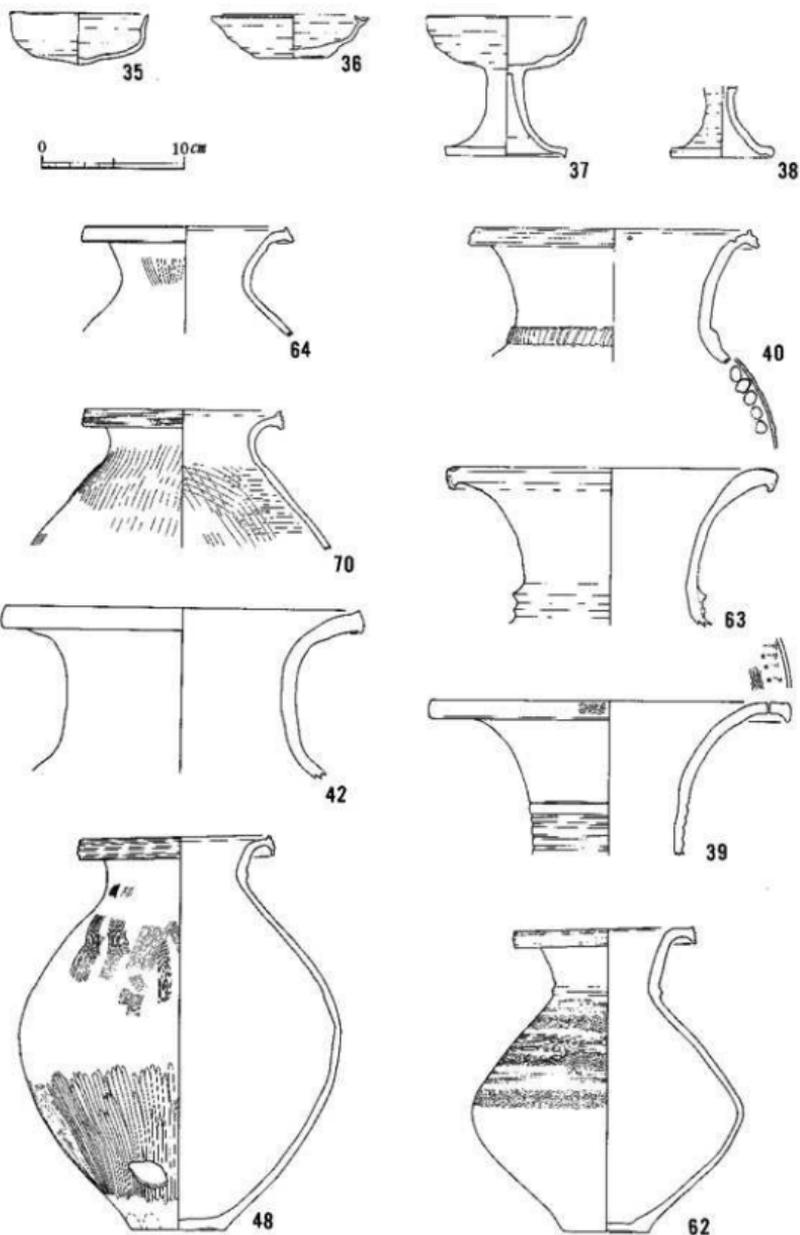
東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器



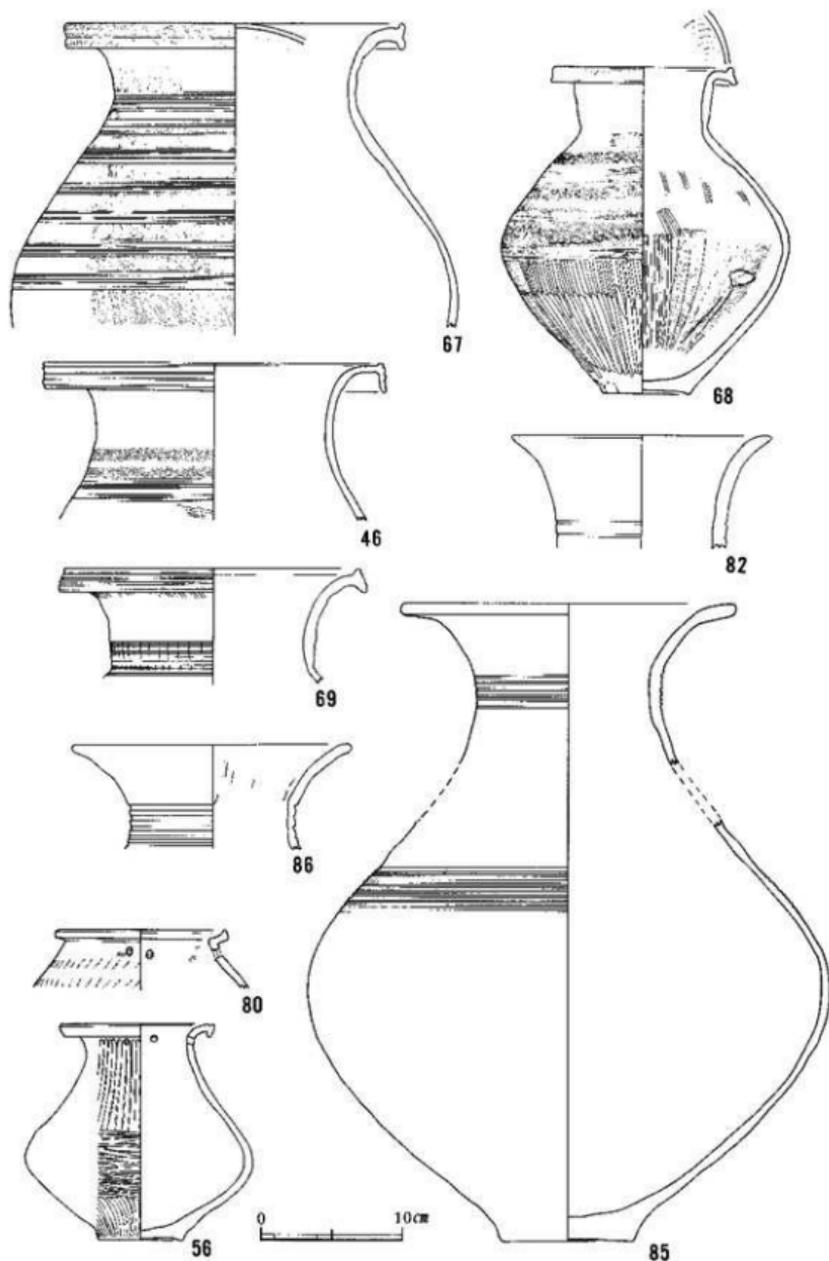
東奈良遺跡(87-4) H・N C-4-K・O地区 溝-1・1(A) 出土の土器



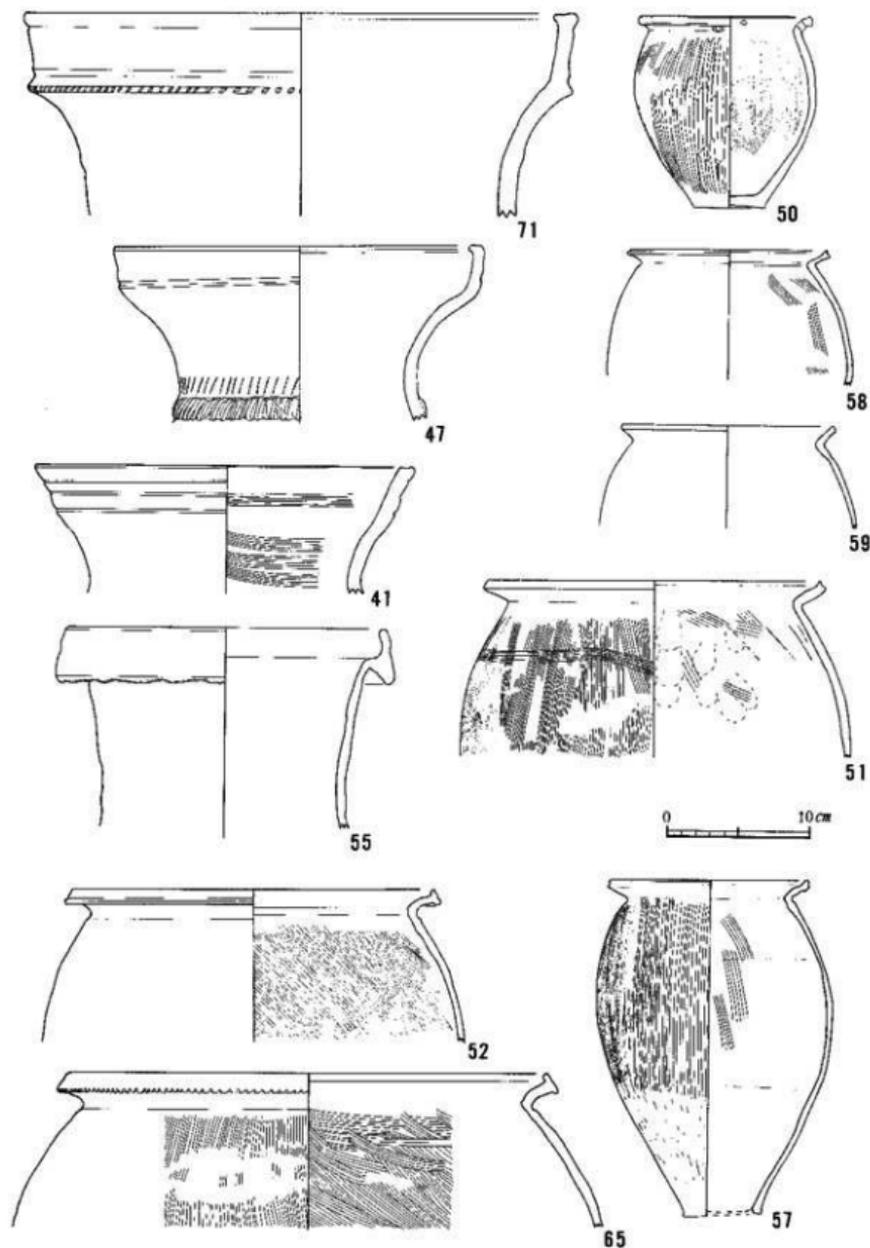
東奈良遺跡 (87-4) H・N C-4-K・O地区 包含層、溝-1・1 (A) 出土の土器



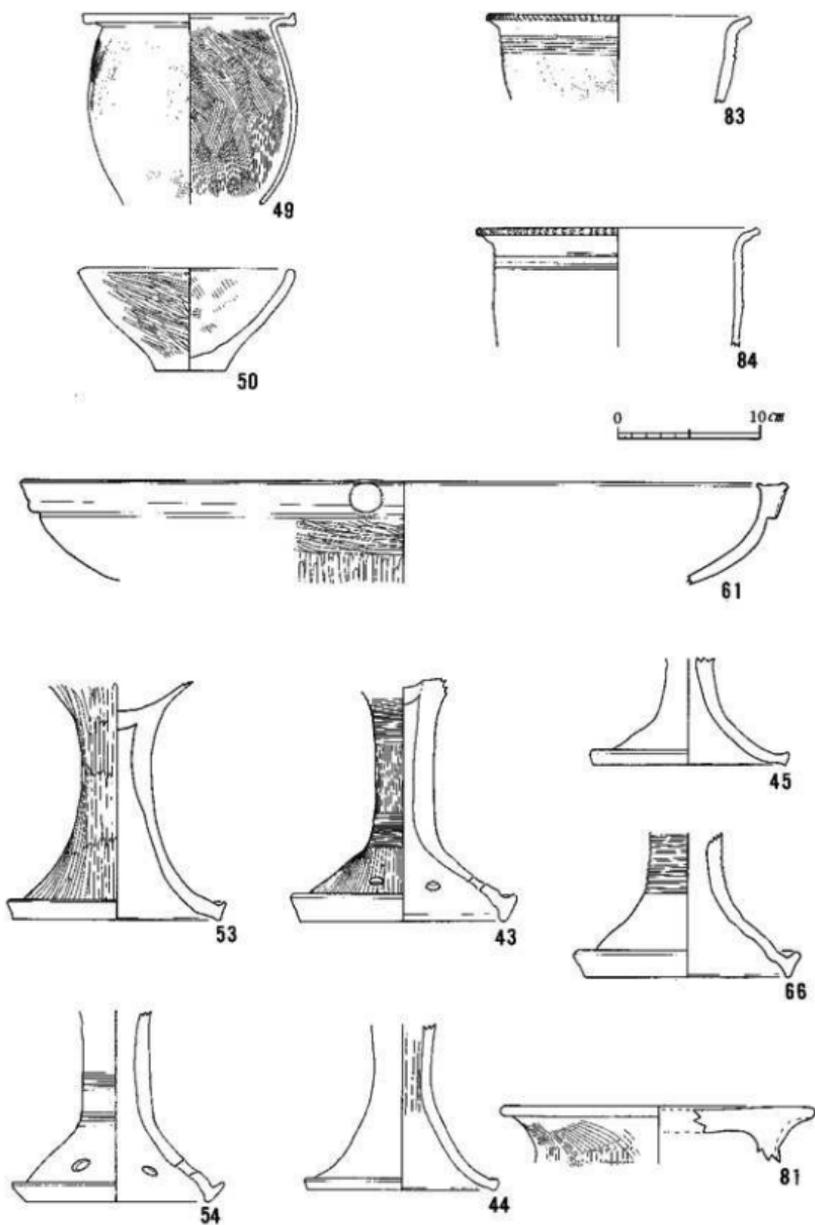
東京良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2出土の土器



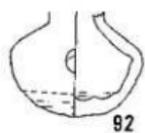
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3・4出土の土器



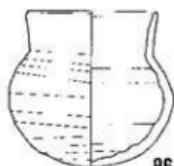
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2出土の土器



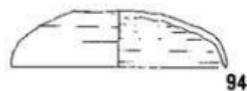
東奈良遺跡(88-1) H・N H-4-C地区 包含層、溝-1・2・3出土の土器



92



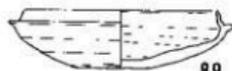
96



94



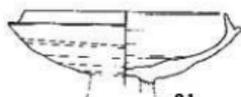
90



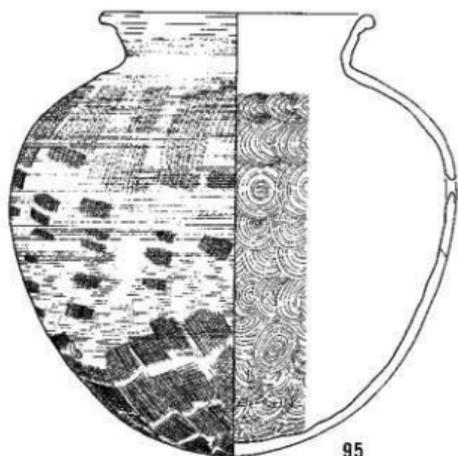
89



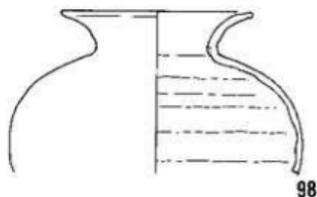
93



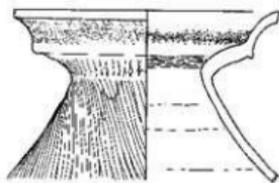
91



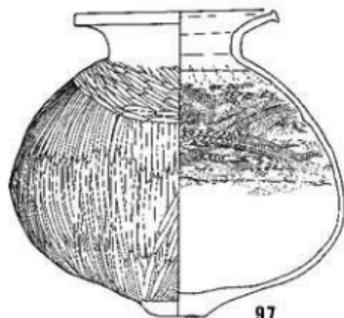
95



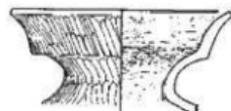
98



99



97



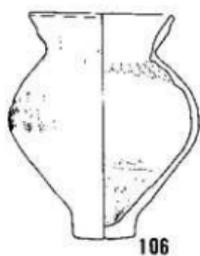
100



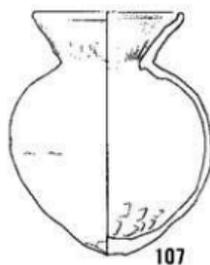
101



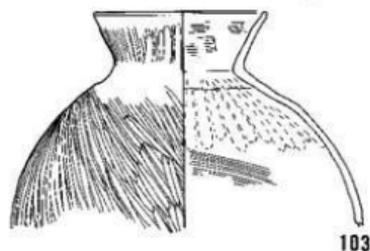
102



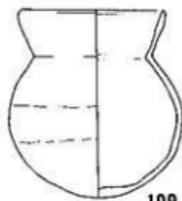
106



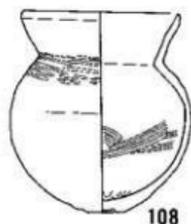
107



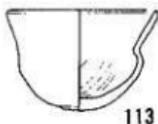
103



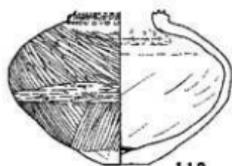
109



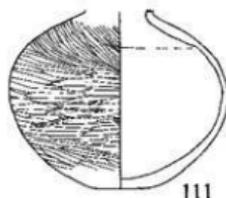
108



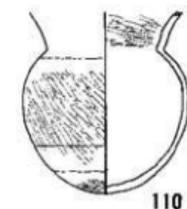
113



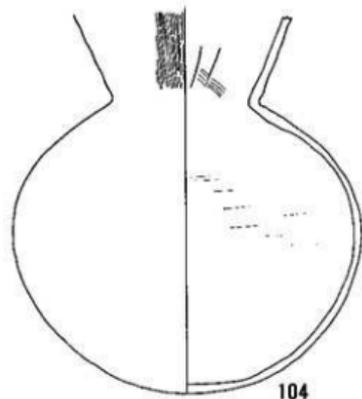
112



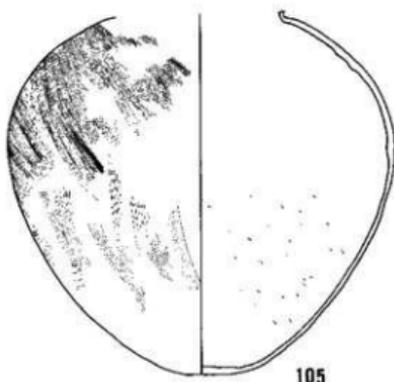
111



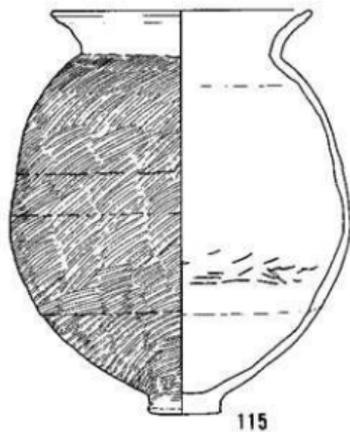
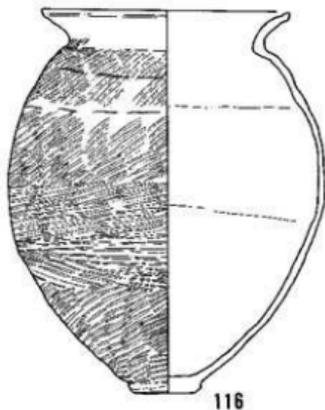
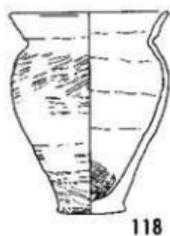
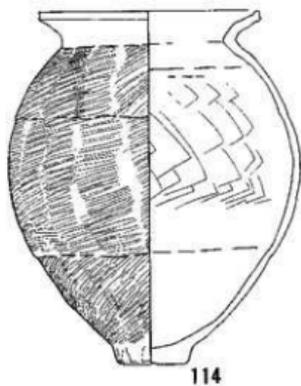
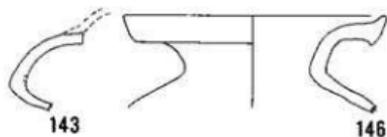
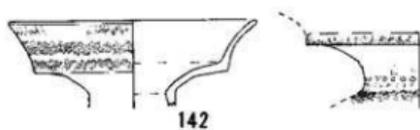
110



104



105

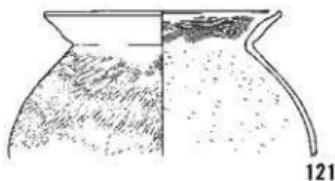




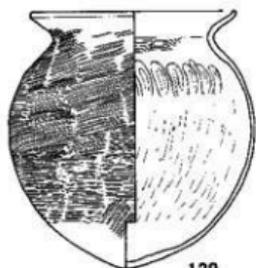
119



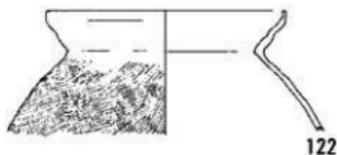
123



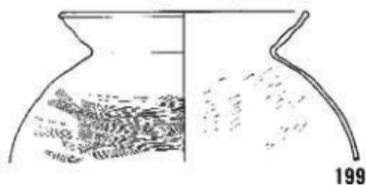
121



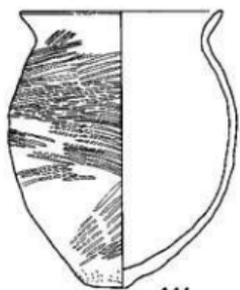
120



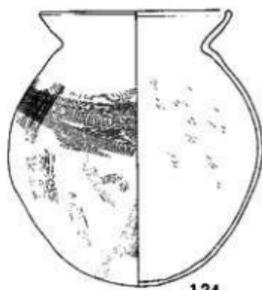
122



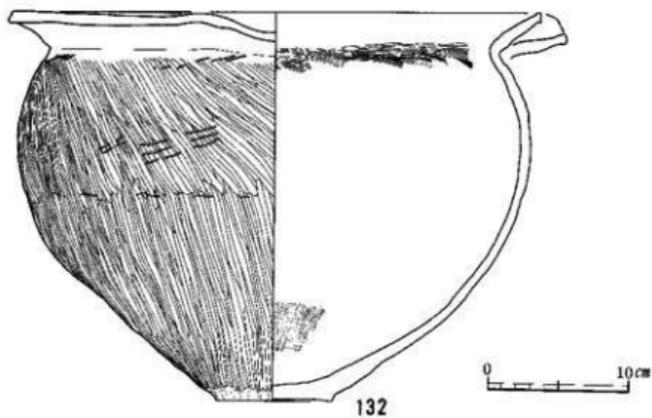
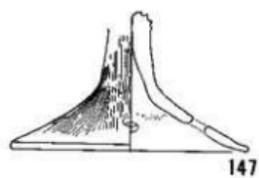
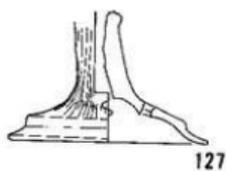
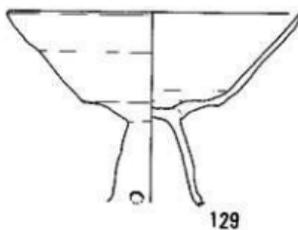
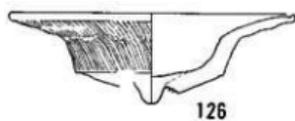
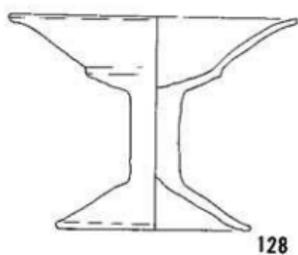
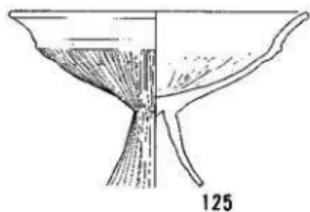
199

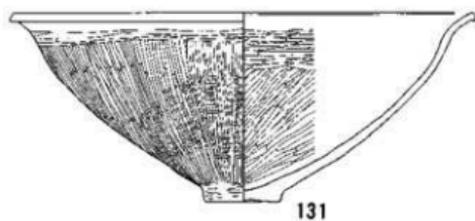


144

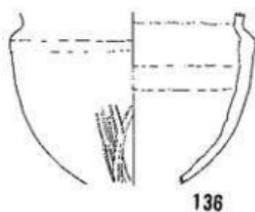


124

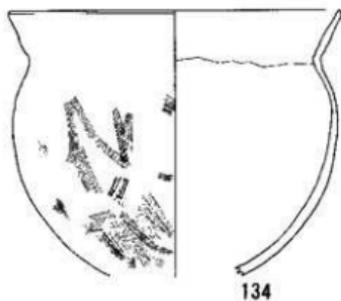




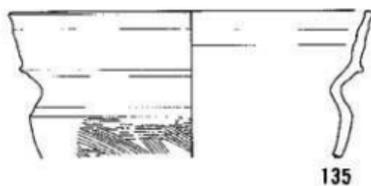
131



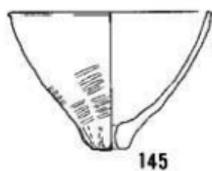
136



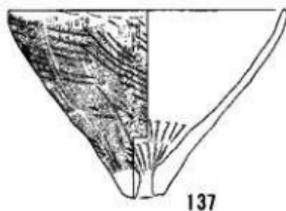
134



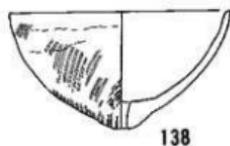
135



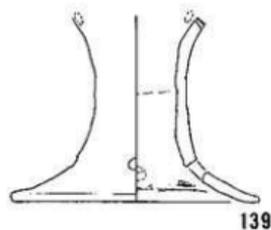
145



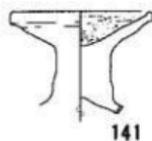
137



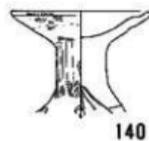
138



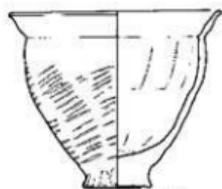
139



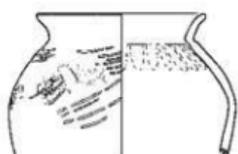
141



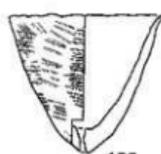
140



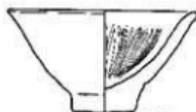
149



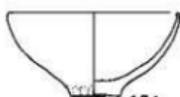
150



155



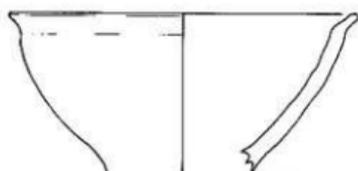
148



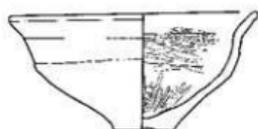
154



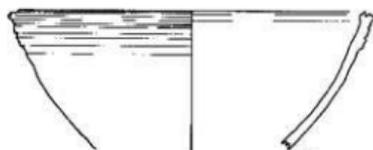
153



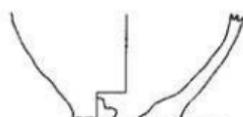
162



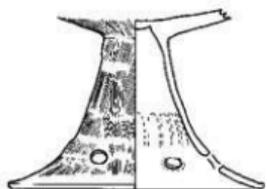
163



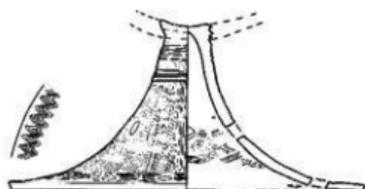
161



166



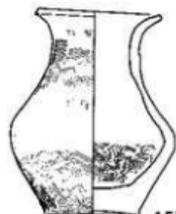
151



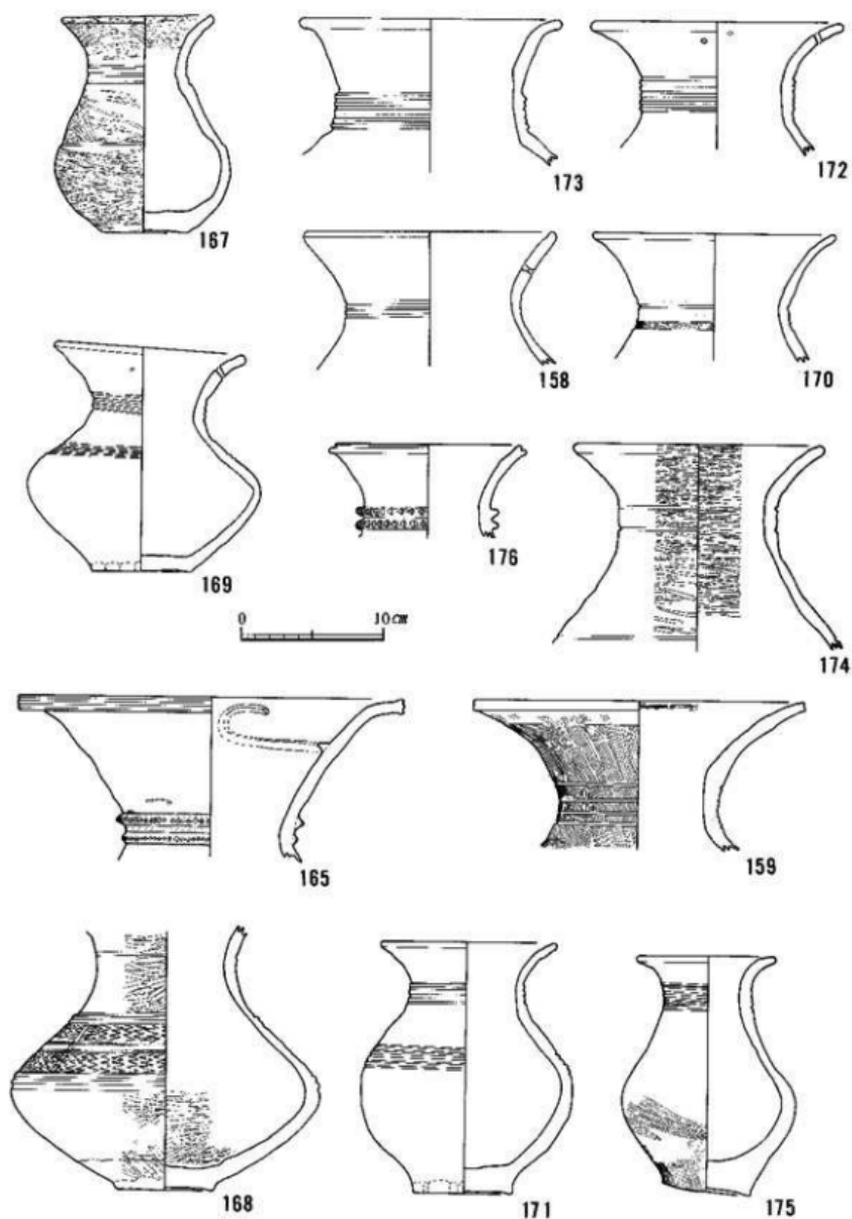
152



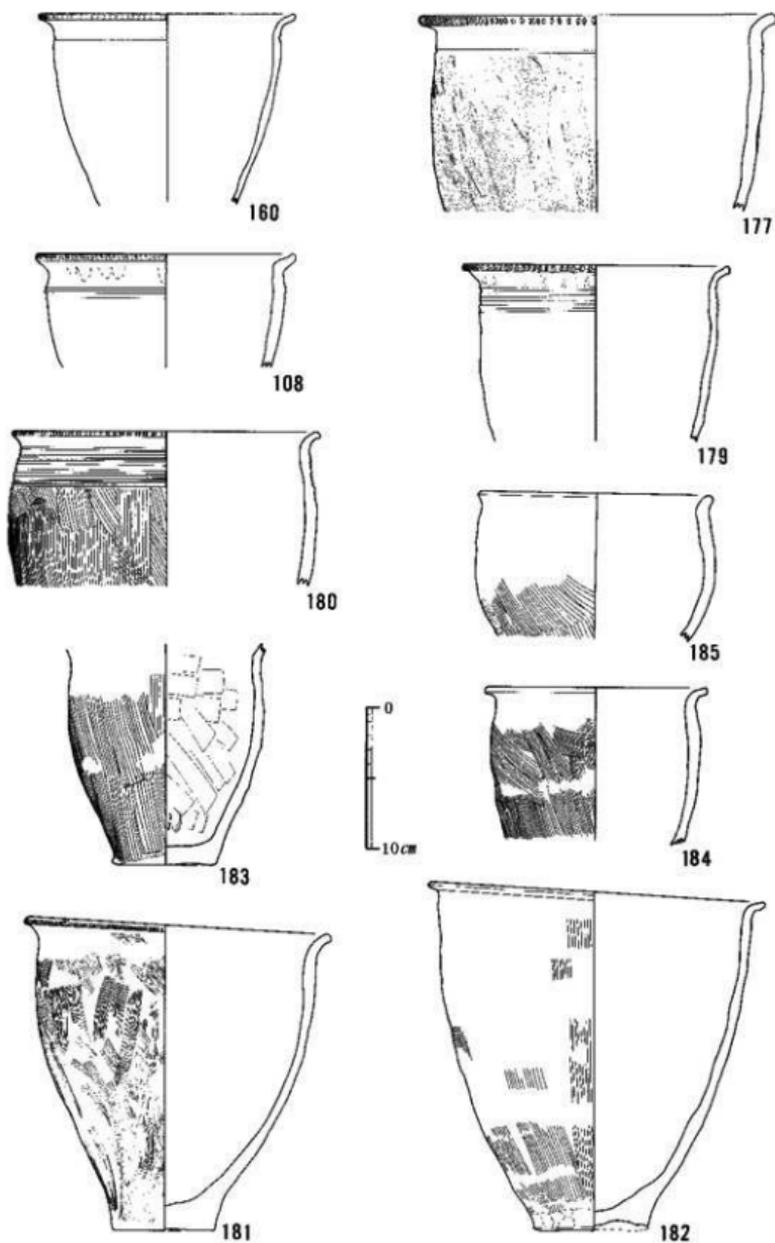
156



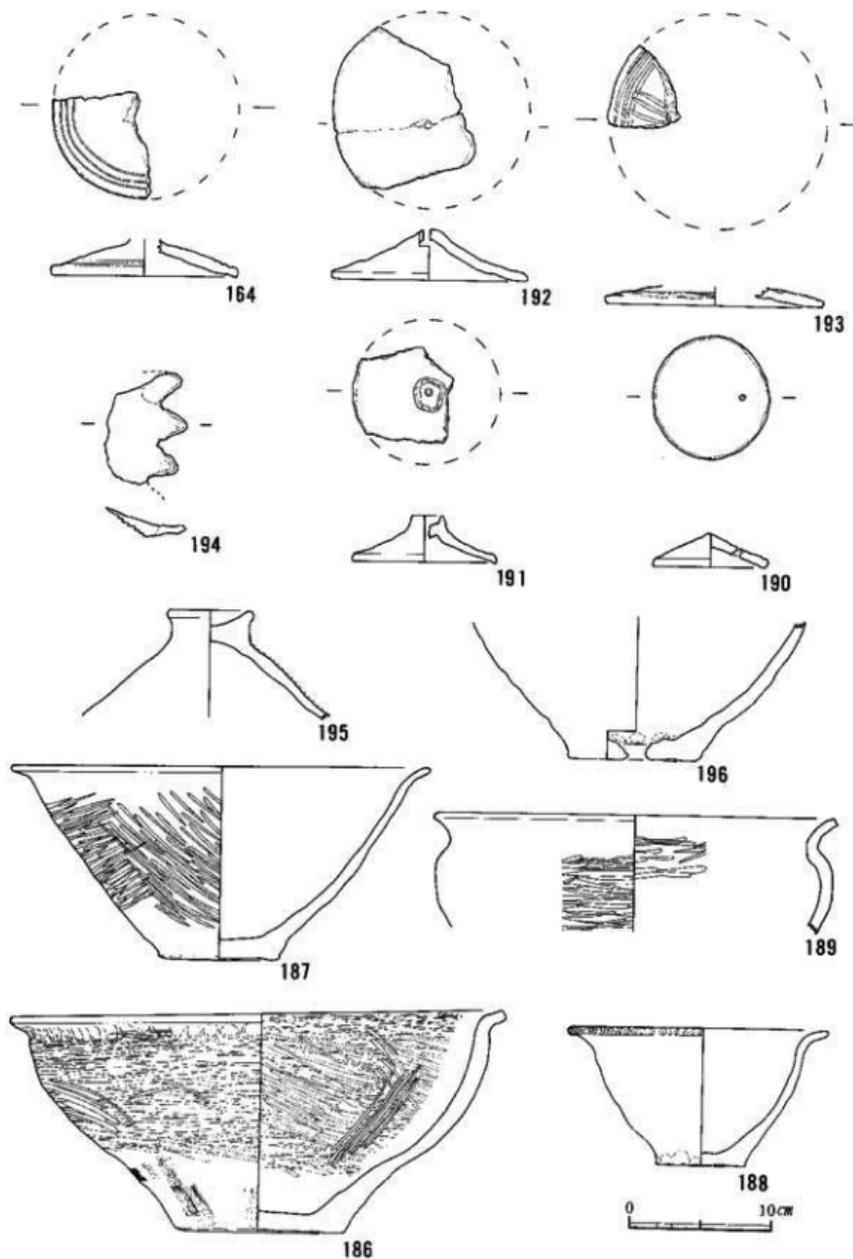
157



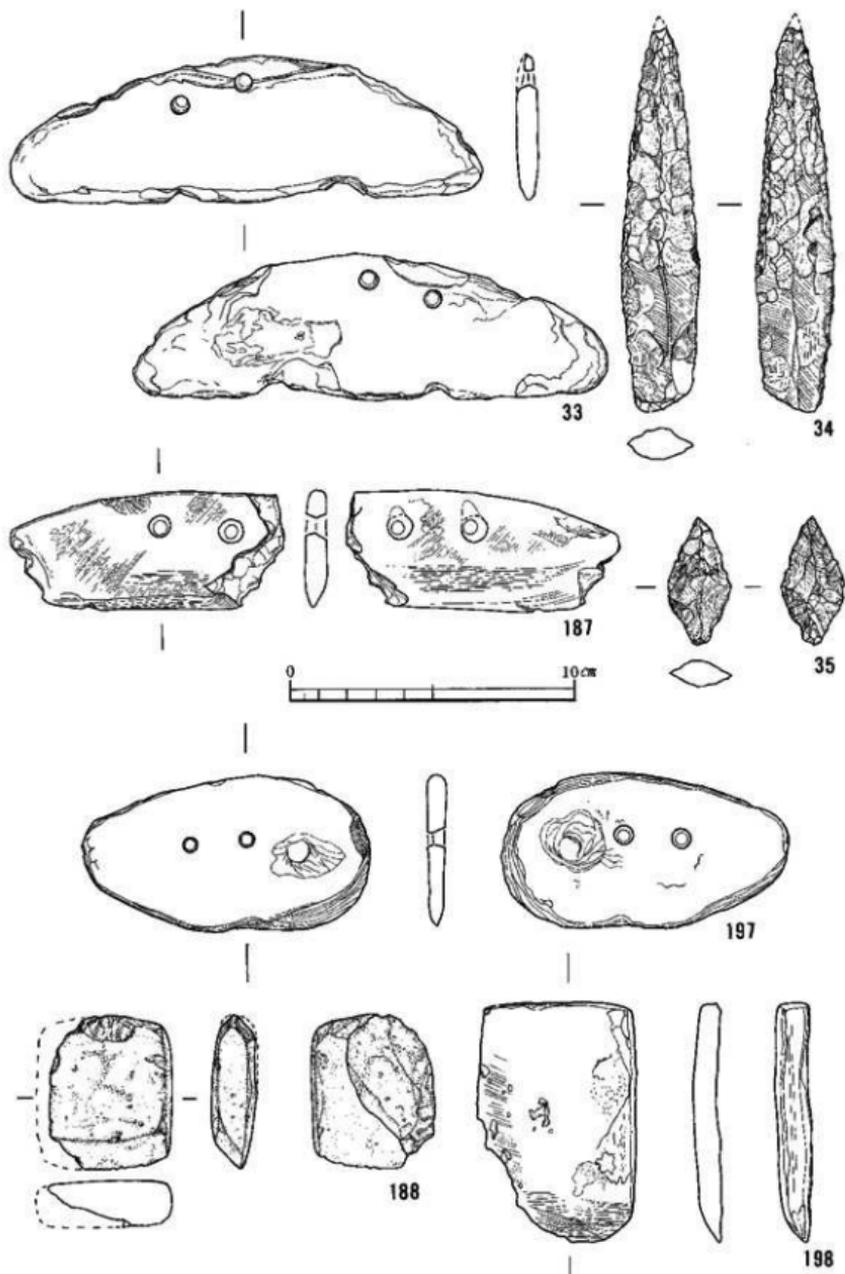
東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器



東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 溝-1出土の土器



東奈良遺跡(88-3) H・N E-5-G・K地区 包含層、溝-1出土の土器



東奈良遺跡 各地区 出土の石器

昭和63年度 発掘調査概報

発行日 平成元年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 赤井印刷工房